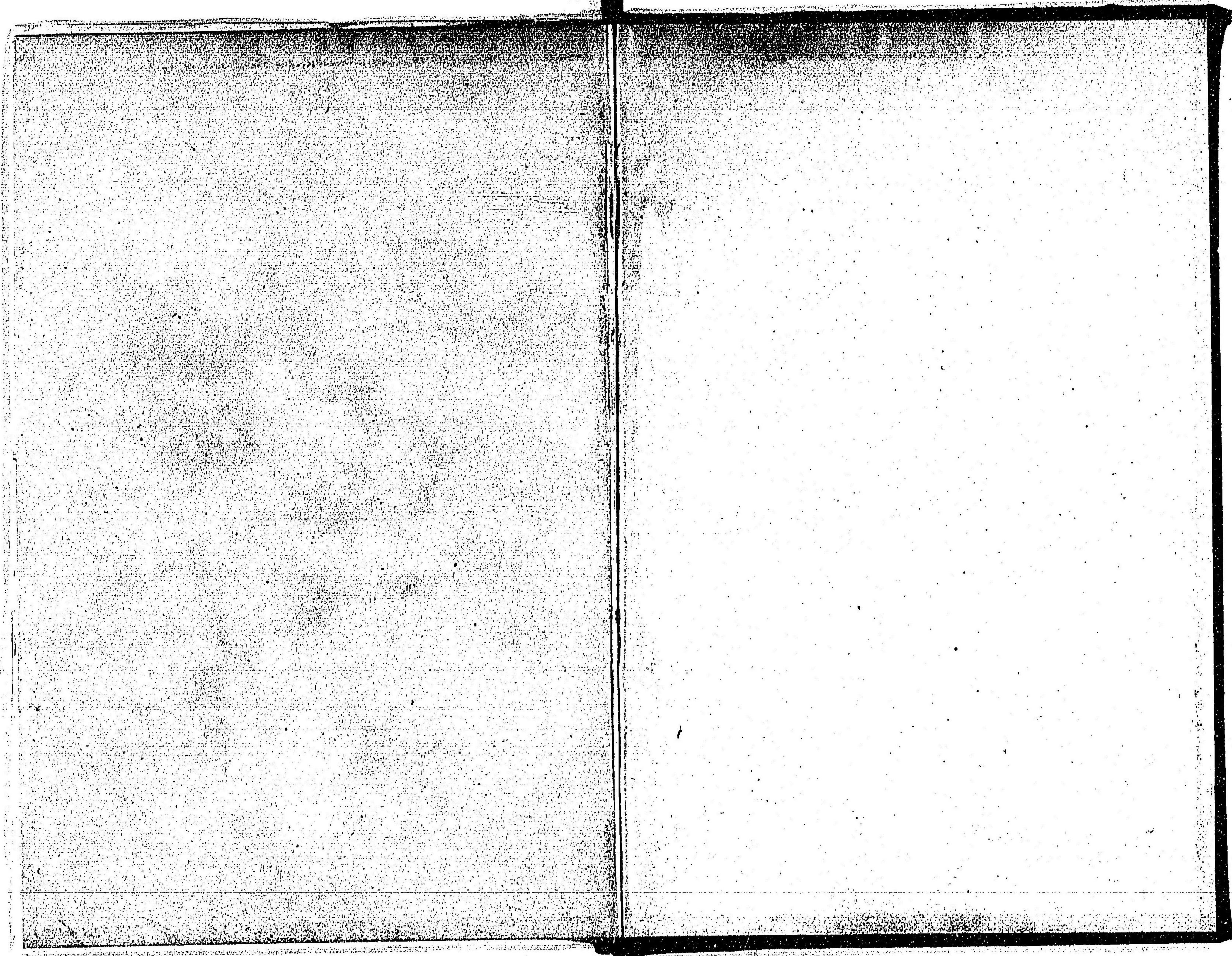




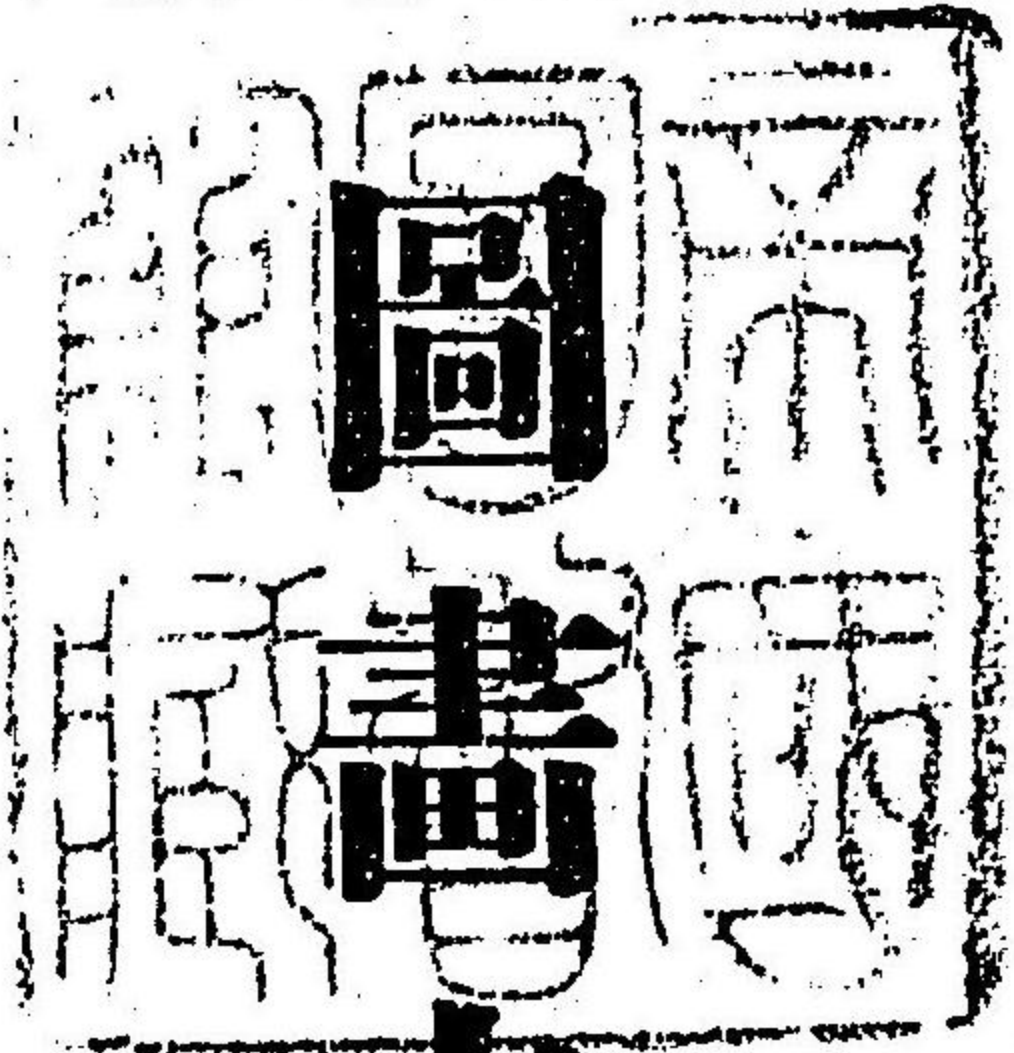
2  
836







訂正五版



之新趣味

完





### 緒言

私は、齒が抜けなくて困る……とは、近來小學校や幼稚園の先生達から、感聞  
くところの泣言である。

又私は、宅の小供が馬を描けとか、汽車を描けとかいふには、實に閉口する  
……とは、一般愛兒を持てる父母、若しくは、其兄姉諸氏から、度々聞くとこの  
歎息である。

苟も、兒童教育の任に當れる者で、齒を描くことを知らず、又これを教授上  
に、利用することが出来ない人は、其教師たる資格に於て、己に缺くる所では  
あるまいかと、自分は思ふのである。況して教授は、直觀的でないならば  
ぬとは、教育者自身が常に言ふ所のことばではないか。

又惟ふに、愛兒を待つに、單に其口腹の慾を充たしむることのみを知りて、  
彼の愛すべく、しかも高雅なる、兒童天賦の圖畫の慾望を満足せしめ、尙進ん  
でこれを利導することを知らない父兄達は、眞に其幼を愛し、進んで健全な



る發育を祈るものとはいへないのみならず、如何にも児童にとりて、可愛想なことである。

自分は、身を普通教育に委れ、主として圖畫科の教育的價値を研究して居るので、如何かして世の父兄及び児童教育の任に當る人の資料に供へんかと、兩三年來圖畫法其他の研究に苦慮し、稍得る所があつたから、今これを蒐録し、世の識者の批正を乞はんとするのである。自分の淺學未熟なる、敢て人に教ゆるには足らないけれども、其信する所を施して、國民教育に向つて聊かなりとも、貢獻するところあらば、眞に本望の至りである。

遼東の野に於て

竺 堂 生

明治三十八年四月

特23  
977

# 圖畫之新趣味

## 目次

第壹編	圖畫の初步教授	五〇一頁
第一	教授の方針	五〇七
第二	教授の方案	五〇九
甲	自由略畫の教授	五〇七
一	畫題	五〇八
二	練習	五〇九
三	批正	五〇〇
四	臨模	五〇一
五	應用	五〇三
乙	略畫に併せ授くべき諸法	五〇三



一	補寫	一三
二	看取及速寫	一四
三	測圖	一五
四	透寫及伸縮	一六
五	工夫畫及用器畫	一六
丙 教授の補助		
一	自然界に兒童を誘致すること	一七
二	美術作品に接せしむること	一八
第貳編 略畫法		
第一	鳥 <small>自第二一圖至第二二圖</small>	自二〇至四九
第二	獸 <small>自第二二圖至第四二圖</small>	自九〇至七一
第三	魚介 <small>自第四二圖至第四五圖</small>	自七七至七七
第四	蟲 <small>自第四六圖至第四八圖</small>	自七八至八一
第五	人 <small>自四九圖至六二圖</small>	自八二至〇一

第六	器具 <small>自第六三圖至第七三圖</small> <small>(附)濃淡法・描寫法</small>	自一〇二至一二七
第七	果實及野菜 <small>自第七四圖至第七六圖</small>	自一二六至一三〇
第八	花卉及樹石等 <small>自第七七圖至第八一圖</small>	自一三一至一三八
第九	橋船・車 <small>自第八二圖至第八八圖</small>	自一三八至一四七
第十	建造物及景色 <small>自八九圖至九一圖</small>	自一四八至一五三
第參編 圖畫法		
第一	測圖 <small>自九二圖至九三圖</small>	自一五五至一五九
第二	透寫及伸縮 <small>自九四圖</small>	自一六〇至一六一
第三	工夫畫 <small>自九五圖至九八圖</small>	自一六二至一六八
第四	配色 <small>自九九圖</small>	自一六九至一七二
第五	配合及作圖 <small>自百圖</small>	自一七三至一七九
第六	素圖及運筆 <small>自百三圖至百四圖</small>	自一八〇至一八三



## 第四編 塗板畫

塗板畫に就て(第百五圖)……………	一八四
塗板上描畫の注意(其一)(第百六圖)……………	一八六
塗板上描畫の注意(其二)(第百七圖)……………	一八八
塗板畫の練習(第百八圖)……………	一九〇
省略描法に就て(第百九圖)……………	一九二
(附記) 一 圖畫用具 二 礬水紙引の製法……………	一九四

## 圖畫之新趣味 目次終

### 圖畫之新趣味

竹内次郎著

#### 第一編 圖畫の初歩教授

##### 第一章 教授の方針

圖畫の教育的價值は、此頃に至つて愈々確められ、追々人の注意を惹くこととなつた。それは、即ち圖畫が他の諸學科と等しく精神の教化に、多大の影響を與へるもので、彼の健全なる國民性を養ふ上に、極めて重要なる學科の一つであること、及び人間生活上必要なる技藝の一つである、といふことが認められ來つたのである。が、扱その實際の教授になると、何人も大抵は、被教育者の側を忘れ、自分勝手な理由を附けて、教授に立つのであるから、兒童は實に教授法の犠牲とならねばならぬ。試に思へ、如何に圖畫修習の法則であるからと云つて、一條の直線を一時時間も習



はせられたり、如何に練習の順序であるからとて、面白くも亦可笑しくもなき、十字形を習了するに、二三時間も費したり、これは、正確なる観察をさするに、必要なる方法である。と云ふので、初年級の児童に、幾何形體の透視畫的观察を強ゆるが如きは、無法と云はねばならぬのではないか。又、圖畫は、勿論、他の學科と聯絡するが、必要ではあるが、さればとて、寫生の材料を、豆細工や折紙細工から、是非撰ばなければならぬと云つたり、尋常科生徒は、難について、理科的智識を持たないから、之れを描かしむることは、出来ないと思つたり、圖畫の教授は、必ず實物から導かなければならぬから、象とか、軍艦とかを、見たことのない児童には、之れを描かしむべきでない、などといふのは、皆一理あるが如くに聞えるけれども、よく考へて見ると、何れも児童の本能を蹂躪し、児童將來の利害を無視した考で、實に頑迷な説と云はなければならぬ。

圖畫の教授は、果して此の如き没趣味の理論によつて、其目的を達せらるべきであらうか。児童心理の研究が、驚くべく進歩したる今日に於て、自由を尙ぶべき藝術の教授が、此の如き偏狹なる議論によつて、効果を修め得べきものであらうか。自分は、實に疑はしいと思ふ。

自分も、圖畫の一般教授は、線面及び體の順序、即所謂圖畫の形式的階段を追ふて進むべきもので、圖畫の教授法としては、これが最も正しい道で、恐らく此右に出づる名案は、無からうと思ふ。殊に彼の幾何形體によりてする、嚴密なる練習の結果は、儘に人間の頭腦を造るのであるから、この方法で、普通教育に於ける圖畫科の目的は、過半達し得られるものと思ふて居る。自分は、斯く之れを賛成して、而かも、尙之れを非難するといふのは、決して説を好むのでない。唯世の教育者の中には、直に如上の法則のみを以て、義務教育期間にある児童を、律せんとするものがあるのを、慨するからである。

若し、我が國児童の大多數が、悉く小學を了へて、中學に進むべきものであるならば、自分は、決して愚案を述べ、るの迂を學ばないが、悲しいかな、我が國目下の状態では、辛ふじて義務教育の修業を了へたるものが、將來の國民の多數を占むる有様であるから、此所が大に一考を要すべき點であらうと思ふ。何となれば、是等多數の國民は、他日何の必要から、義務教育期間に於て、圖畫の教授を受けなければならなかつたかを疑ひ、其修業年間に於ける形式的で、しかも隷屬的であつた圖畫教授が、生活上に何等の貢獻をしたかを疑ひ、之れが爲めに如何程、眼が養はれ、腕が練習せ



られて、又どれ程頭が正確になつたかを疑ひ、面白くもなき、圖書の教授時間に於て、如何に心意集中の習慣が餘成されたかを疑ふに至るであらうからである。

此様であつたならば、美威の養成などは、もとより思ひもよらぬことではないか。教授者被教授者が、多年の苦辛は、全く徒勞に歸したるわけではないか。從來世の國民教育云々を、口にするものが、生活を便利にする圖書が、同時に國民的の智識を與ふることを、顧慮しなかつたのは、實に不都合と謂はなければならぬ。

或人は、又我が國民は、頭腦の不正確なる人種であるから、是非これを矯正する爲に、此の際毅然として嚴正なる幾何的教授を實行すべしと云ふが、總ての言動が、ただ遊戯的である、幼年級生徒に向つて、無味乾燥な全然理論的である圖書の智識を、如何にして注ぎ込むであらうか。勿論、將來の圖書教授は、此國民性の弱點を搔ふべく、猛進しなければならぬが、唯に筆舌だけで、修養の伴はざる議論には、未だ遽かに首肯することは出来ないのである。實に圖書の教授は、理論や實物や、はた模本たよりては、決して成功するものでない。それで自分は、世の教育者其人に目下の急務として、各人の實力修養を切望するのである。彼の不條理なる、小學校教員檢定規則を楯にして、圖書の學習を勉めない教育者の如きは、未だ俱に本科教授の改

善を談ずるに足らないのみでなく、國民教育の重任は、未だ容易く委ねることができないと惟ふのである。

次に一言したきは、前にも述べたところの、圖書と他の學科との聯絡説である。學校に於ける總ての學科は、相互に聯絡を保ち、相助け相成して、始めて圓滿なる進歩をなし、確實なる智識を與ふるものであることは、勿論であるが、此所に戒むべきことは、聯絡を重んずるの弊として、圖書科を全く他の學科に、隸屬せしむるに至ることである。

圖書は、實に世界的言語とも、亦文字とも云ひ得る如くに、極めて普遍的のものであるから、諸學科は、此圖書の補佐によりて、教授の効果を收め得る場合が多い。だから世人が、諸學科を一に圖書に聯絡し來ることは、自然の勢で、しかも是れ教育上最も慶すべきことではあるけれども、其極や圖書を、他の學科の隸屬物視し、畫題を強て他の學科から求め、圖書を單に他學科の智識を、確實にせしむる方便とする風を生ぜしむるに至りては、圖書の眞價を認めないもので、決して厭過すべきことではあるまい。由來圖書は、其畫題こそ他の學科より、供せらるることはあるが、別に必ずしも他の學科に關係しなくても、随分進歩發達し得るものである、といふこと



は、東西の美術史が、明に之れを證して居る。

從來の圖書教授が、良好なる結果を得なかつた理由は、澤山あるのであらうが、自分分は、此聯絡説の誤解が、其獨立の發達を阻礙したことは、慥かに一大原因であらうと、信ずるのである。

彼の兒童には、學ばないものでも、不完全ながらに、之を描いて見やうと云ふ精神があるのに、難に就いての理科的研究が、濟まないから、難は描かせないとか、汽車の學理構造、其他を悉知しないから、汽車は、描かせないとかいふならば、可憐の兒童は、何れの日、宇宙の森羅万象を研究し盡して、己が渴望を満たすことが、出来るであらうか。

以上の所説を約言すれば、畢竟圖書の初歩教授は、理論上の附會に流れず、偏狹に陥らず、兒童本能の發展を以て眼目とし、其精神的陶冶の方面を輕視して、單に形式の末に走り、他學科との聯絡のみを顧慮して、肝腎の本旨を忘却してはならぬ、といふことである。若し、この目的が、達し得られるならば、求めないで、諸學科との聯絡も、親密に保たれ、自ら兒童の智識を開發し、やがて國民性の養成も、期し得らるるに相違なし。

然らば、即ち其實際の教授は、如何にといふに、義務教育期間の圖書は、殆ど自由略畫を以て、終始一貫せんとするのであるが、時に補寫又は看取速寫を爲さしめ、測圖及び用器畫の初歩の如きも、亦之れを授けたが、よからうといふ考である。

自由略畫の教授は、兒童が興味を以てする、樂書風の略畫より導き始め、檢束なしに、自由に愉快に、宇宙間の總ての形象及色を極めて畧式に、表現することを、習熟せしめたいと云ふ考である。ここに自由といふのは、全く放任することの意味ではなく、彼の筆力とか筆勢とか、或は雅趣とか云ふ様なことは、決して責めなくて、點畫の末に拘泥しないといふことなのである。併しながら、其形と云ふことに就ては、大に注意を拂はせて、教授の際にも、統一とか權衡とか、又調和とかいふ考を、飽く迄も養成し、夫が次第に習ひ性となつて、模本なしに自由に描畫し得る域に到らしめることは、最も望む所である。

## 第二 教授の方按

### 甲 自由畧畫の教授



## 一 畫 題

從來の自由畧畫とも云ふべきものの教授を見るに、多く畫題を一定しないで、教師が之れを批正することをしなかつたのであるが、これは未だ畫を教授したとは云へないであらう。それで將來は、批評訂正の便利の爲め、一定の畫題を課し、兒童各自に其好む所を表出せしめたいと思ふのである。而して其畫題は、其教授時間の始めに於て、突然に指定するのと、少なくとも其前日、之れを明示して置いて、兒童に能く其實物を認識せしめたるのち、彼等の各自の頭に描かれたる畫案を、表出せしむるのとの二様あるであらうと思ふが、最初には、單獨のものを、而して後には、想像の力によりて、既得の材料を結構して、時に他の教科より得たる概念を、表出せしむるのが宜しからう。

畫題は、普通一時間に一題を課するのであるが、時宜により、二三題を課することが、必要なる場合もある。殊に彼の特別なるものの爲めには、特別の畫題を課するが如きことも、忘れてはならぬ。若し一學級に一人たりとも、優秀なる生徒を得るならば、之れは實に其クラスの華、ひいては、國の華なのであるから、教育者たるもの

は、普通一般の庭木の培養に、力を盡すと同時に、此歴はしき華の特別養成を忽にしない様に願ふ。換言すれば、圖畫の教授は、團體教授の外に、個人教授のことも、亦願ふべきであらうのである。

又畫題は、毎學年若しくは、毎學期繰り返へさるることによりて、兒童の進度を知ることが出来るのであるから、同題若しくは、應用題によりて、反覆これを試みたいのである。何とならば、由來兒童が、如何に事物を観察する様になつたかといふことは、それを描き出す程度によりて、確めらるることが多いのであるからである。

## 二 練 習

畫題によりて、兒童は、石盤若しくは紙上に想像、或は記憶から描出するのであるが、教師は、其中から佳良なるものを選び、批評訂正の後、之れを練習せしむるので、此際便宜上色鉛筆若しくは毛筆を使用せしめ、又繪具の使用に慣れしむることを、要するのである。而して彼の塗板上の、描畫の如きも、亦常に之れに伴はなければならぬ。

練習其度を重ね、別に意を用ゆることなく、模本に依ることなく、自由に描き得る



様になつたならば、一々清書を徴せず、之れを見童各自の、圖書手簿に描かして置いて、必要に応じて、此手簿を検すれば、足るのである。

爰に、注意すべきことは、畫は、眼の練習、即、形と色とに關する認識力と、辨別力とを、練習することに、次で手腕の練習と云ふことが、必要である。それに、從來の畫の教授は、教師が身を以て導くことをなさず、長々しき説明講話に、時間の半を消費し、中には、此前提の廣く、且、深さを以て、教授の妙を得たりと自負するものがあるが、これは大なる心得違ひで、其効果の見えないのみか、見童をして嫌惡の念を惹起せしめ、其上専心練習すべき時間を、尠なくする爲めに、十分稽古することが出来ず、見童が不本意ながら筆を擱き、繪具皿を洗ふといふ状態は、屢見る所ではないか。彼の見童が畫に興味を覺ゆるときには、一時受身の境を脱して、自動の位置に立ち、自分の實力を眼前に表はさうと思ふ念が、勃興するのであるのに、教授の下手な爲めに、其企が成らないといふのは、實に可愛想なわけである。世の中のことは、すべて手腕家に俟つことが多いが、圖書の教授に於ても、亦切に是れを感ずるのである。

### 三 批 正

畫は、形が第一であるから、能く權衡とか、調和とか、云ふ様なことに留意して、先づ全般に共通の、誤謬を批評訂正し、漸次各個に及ぼし、時宜によりては、二三階級の成績を、塗板上に描出せしめ、俱に問答批正を試むるもよからう。此時には、清潔て其要を得る様にしたい。さうして、其間に多數の見童は、己が成績についても、自分で非を見出して、修正するであらう。彼の遠近による大小の差などは、眼前に於ける一小物體に就ては、吾人すらも、兩眼を以てするとき、見出だし兼ねるものであるから、これを見童に彼是といふ必要は、勿論ないが、長き土塀とか橋とかに就て、遠近の形に及ぼす變化を、講話して置いて、庶物皆此理によるものであることを、知らしむるのは、必要なことであらう。

又色に於ても、遠ざかるに従ひ、漸次其固有の色を失ふと同時に、青色を帯びて來るものである、と云ふ位のことには、知らせなければなるまい。

最後に、批正に於て、特に戒むべきことは、見童の成績を全く非認しないで、宜しく其價値に應じて、之れを修補し、利導するといふことである。

### 四 臨 模



児童の成績の中、佳良なるものは、之れを塗板面に描寫せしめ、全級の児童をして、臨模せしむるか、或は其佳い所をとり、各個の成績を改めて、結構せしむるかであるが、若し適當のものを得ない時は、教師自ら板面模本を描き示さなければならぬ。其要領は、最も單簡で、しかもよく其物の特徴を捉へ、最も美的のものを選ぶことが緊要である。もとより是れによりて、児童は、美しき形象を認識し得るのであるから、これが爲めには、場合によつて、其物の各種の形を描いて、比較説明するが如き必要は、屢起るものと、覺悟しなければならぬ。彼の美感の養成と云ふ様なことは、多少此邊より、確實にせらるること、自分は信ずるのである。

臨模について、特に警戒しなければならぬことは、一點一畫の末に拘泥して、運筆の自由を失ふことである。勿論、彼の無意味に、筆のはねくちを表はして、筆力と誤認するが如きは、取るべきではないが、宜しく其形似に留意し、心手相應して成るの域に到ることを期せなければならぬ。

由來、臨模は、其練習の度を重ねるに従ひ、模本を遠ざくべきものであるのに、近時は、反て愈近接するの弊を生じ、遂に固着して、筆路の圓熟を妨げ、板硬觀るに堪へないばかりでなく、心意の自由をも、併せて迫害せんとする有様であるのは、實に寒心

すべきことである。それで自分は、將來は、中途で模本を除去すべき練習を屢して時弊を矯正せねばならぬと考へて居る。

## 五 應用

児童が修了した略畫は、暈めて之れを應用せしむることを計らなければ、其効が少ないから、既習の略畫に就て、其姿勢方向等を變化するとか、それに飛躍活動を與ふるとか、其二つ以上を結合して、一圖を作らしむるとか、談話によつて描かしむるとか、諸學科の筆記に圖畫を挿ましむるとか、畫を以て其日の出來事を録せしむるとか、記憶によつての、想像略畫を描かしむるが如き、種々の方法を探り、殊に自發活動を尙ばなければならぬ。何となれば、児童は、決して命令を受けてのみ仕事をするものでなく、自分から工夫して、且其仕事を楽しんで、するものであるからである。

## 乙 畧畫に併せ授くべき諸法

### 一 補 寫



補寫とは、或る略畫の練習を了へた後、兒童に其實物又は模型を觀せ、或は講話して、其略された部分を補筆させ、彩色させ、或は時に不充分な模本を與へて、其非點を發見指摘させ、又は訂正させる等のことを謂ふので、觀察の精緻などと云ふことは、此間に於て、自然に養はれることが出來、實物寫生に入るの一階段として、随分必要なことである。

## 二 看取及速寫

實物の概形及び其色の大體を見て、之れを簡略に描き出だすことを、看取といつて、寫生の初步とも云ふべきである。其材料は、天然と人工とを問はず、極大なるもの、例へば門華表、家屋、樹木等より始め、木葉團扇等のやうな扁平のものに及ぼし、時に正面若しくは、平面に視て、其形を失はない材料を混せて、之れを縦圓若しくは平圓に描寫せしめ、次に球體、圓柱體及び立方體に及ぼすべきで、總て活動しないものを撰むのである。彼の剝製の鳥獸、蟲魚の類は、即此場合に用ひられる材料であつて、彼の活動して居るものなどは、是非速寫の法に憑らなければならぬ。

速寫の豫習としては、實物若しくは模型を示して、簡単に説明し、兒童をして、凝視

せしむること一少分時にして、之れを去り、一定時を限つて、各自の記憶によりて描かせるのである。其成績は、概容若しくは、概容と色との大體を、寫し得たものを可とし、局部は、精緻に出來ても、其全體を盡くさないものは、之れを不可とする。

此練習を重ねて後、活物に對せしむるので、其形態の變化の如きは、全く腦裏に看取つて、後に描出することに及ばなければならぬ。又會て實際に視たもの、例へば旅行中、車窓より見た景色等を、後日に至り、記憶畫として、描出せしむることを試むるが如きも、極めて必要な練習であらう。

此看取速寫の練習は、大に記憶力を練り、速に物體の特徴を看取し、乃至は、事物の要領を捉へるといふ好習慣を養成し得るので、將來の圖畫教授上、大に力を致さなければならぬ事の一つであらうと、思惟するのである。

## 三 測 圖

吾人が、單簡なる地圖を描き得ると云ふことは、生活上必要な事であると思ふ。それで先づ最初に教室、又は家屋の平圖、縱圖等から始め、距離の步測、及び目測を練習して、路上測圖、自算測圖、乃至暗記測圖等に及ぼし、出來得れば、磁器測圖板の使用



に慣れしめたいと思ふ。勿論初步に於ては、方眼紙は、使用しないで、彼の梯尺の如きも、一向考に置かないのである。

#### 四 透寫及伸縮

或る畫又は圖をそれと同様に寫し取ること、己が目的通り擴大縮小することを、練習せしめ置くことは、之れも亦甚だ必要なことと思ふ。

#### 五 工夫畫及用器畫

線角・面等の結合、及び分解より線網の拾綴、及び其配色若しくは模様を練習して、實業に關する思想を養成し、兼て其基本的技能を、與へたい考から、自分は、工夫畫の必要を認める。殊に色に就ての智識の如きは、此工夫畫を措て、他に授くべき時機は、餘りないのであらう。なぜと云ふに、實物を模範とする場合に於ける色は、初步にありては、實物其物の色に近似することを、力ひるより、外に何の考も要せないのであるが、工夫畫に於ては、全く自己の工夫によつて、適意に配色することが出來、千種万態限りないのであるから、色に關する研究をなすには、屈竟な練習であると思

ふ。而して圖引具の如きは、是非此時機に於て、使用に慣れしめたい考である。

從來小學校に於ける、用器畫と云ふものは、殆ど不要視され來つたのであるが、これは全く理論に馳せて、實用を顧みなかつた弊である。將來は實用の方面から、應用の廣き教材を撰定して、最近法を採用し、以て日用に便利にしたい考である。

故に之を工夫畫に併せ、課すると云ふことは、最も適切であると思ふ。尙臨模看取寫生等の教授に際し、必要に應じて、投影畫法、及び遠近畫法の圖式位は、教えなければなるまいと思ふ。

#### 丙 教授の補助

##### 一 自然界に兒童を誘致すること

圖畫の智識は、教室ばかりでは、充分に與へられないから、時時郊外に兒童を誘導して、自然に對する問答を試み、圖畫の智識を得ると同時に、自然の美を悟らしめ、他日繁劇の社會に處して、能く自然を娛しみ、胸中常に閑日月ありと云ふ様な人格を、作りなしたいと思ふ。



## 二 美術作品に接せしむること

美術作品は、作家苦心の蹟であつて、吾人の生活上に、高雅なる快感を、與ふるのみでなく、彼の歴史畫の如きは、親切に吾々祖先の歴史を語り、今日の風俗畫は、現代の消息を、吾人の子孫に傳ふるもので、尊重すべきものであると云ふことを、知らせることは、極めて必要であると思ふ。若し彼の法隆寺の壁畫が、如何に我が繪畫史の研究を、世界的ならしめたか、御物の阿佐筆と、傳來する聖德太子の像が、如何に我が國上古の繪畫の手訣を、吾人に教えたか、大和の藥師寺の吉祥天の繪は、如何に明瞭に大寶の衣服令を説明したか、御庫に秘せらるる、長隆兄弟のものしたと云ふ、蒙古襲來の繪卷は、如何に久しく我が國民の元氣を鼓舞し來りたるかを知らば、思ひ半ばに過ぐるであらう。

是れを要するに、兒童に美術品の美なる所以を、悟らしむることは、未だ容易に望み得べきではないけれども、之れを愛重するの念を養ふことは、生存競争の劇甚なる、現今の社會に於て、能く清談の樂を、解するの人となるに於て、大に得る所があることを信ずるのである。

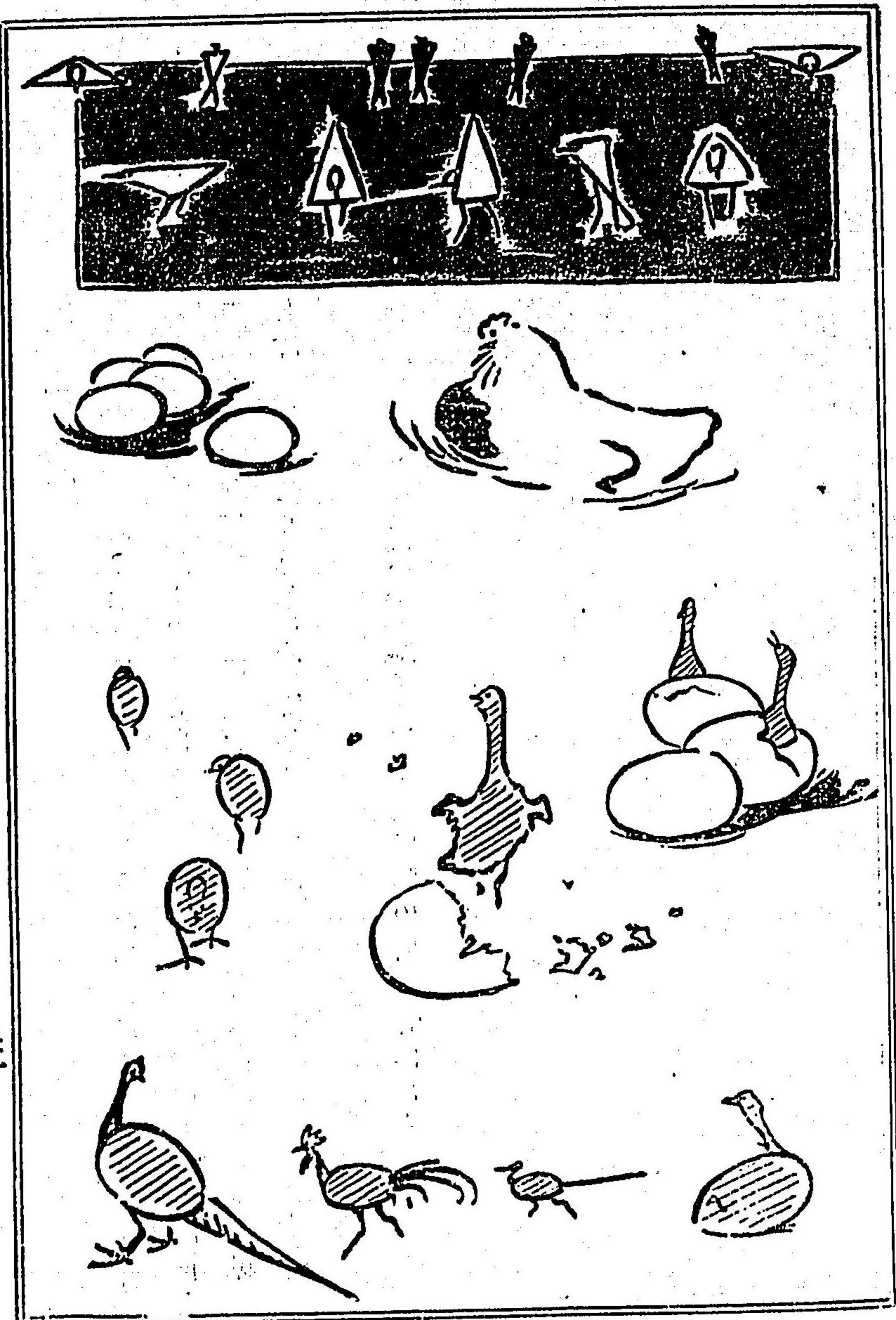
終りに一言して置くが、圖書教授の法は、目下革新の途に進みつつあるが、其革進は、初歩教授より急なるはなく、其効果は、教育者自身の實力修養より、大なる者はない。彼の塗板上の圖書の活用などは、大に兒童の自發活動を、喚起せしむるもので、圖書科の目的を、達する上に於て、重大なる研究の一つであらうと思ふ。それで自分は、本書の編著に當り、直に塗板畫に應用し得べく、又臨模の範本たり得べき數百の畧畫を、挿み、これが解説をも加へて、如上の趣旨を、實際に施すに便にせんことを企てたのである。世の兒童教育の任を、帯べる人々よ、今後筆硯と相親しみ、大に圖書教授の上に、考慮を廻らして、我が國の教育上、多大の貢獻をせられんことを、自分は、囑望に堪えぬのである。



## 第二編 略畫法

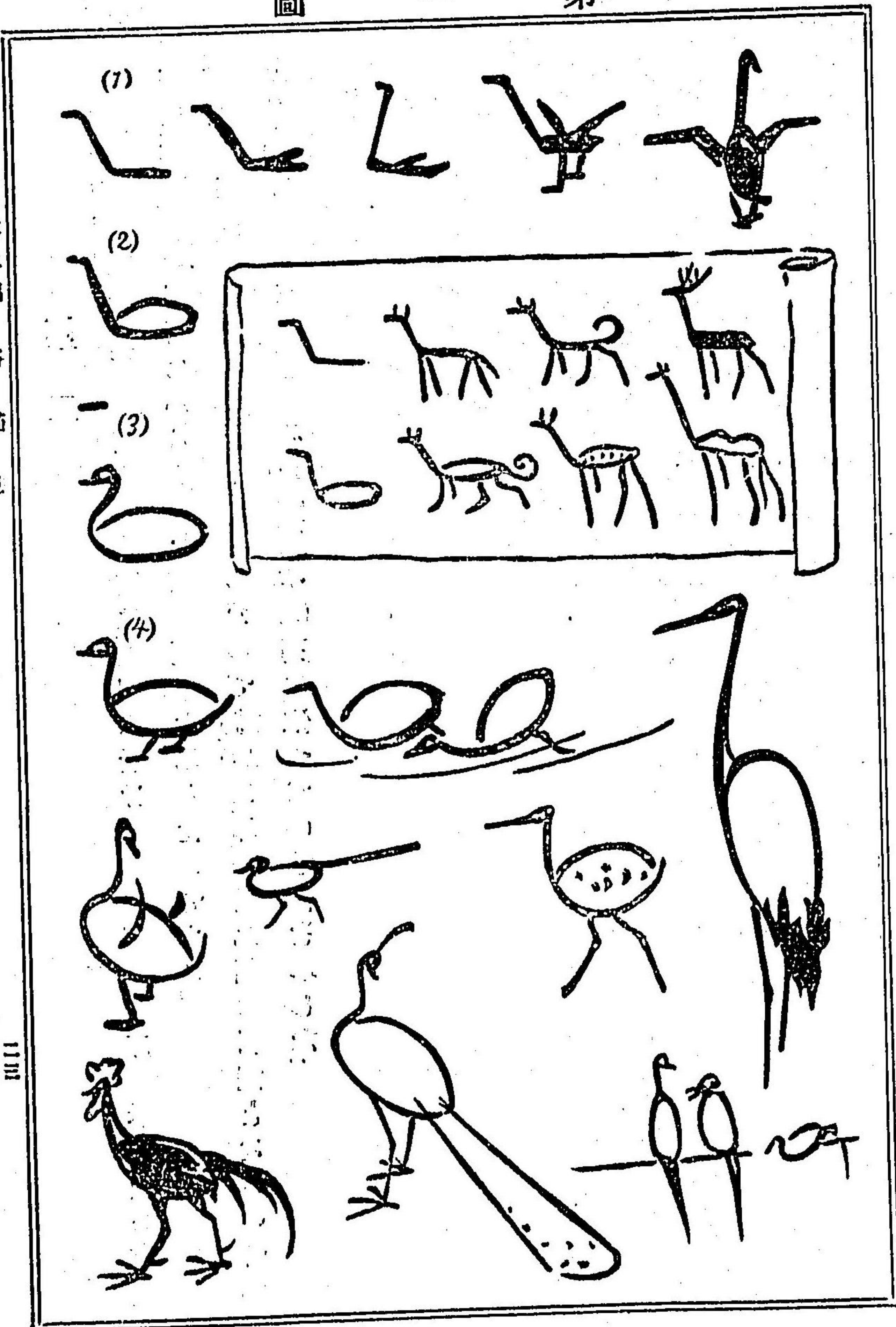
### 第一 鳥

鳥類は卵から生まれるので其卵は普通卵形又橢圓形であるが何れも見様によりては等しく圓になる。そこで此圓橢圓若しくは卵形にそれぞれ頸脚及び尾を附けたならば求むる所の鳥を描き得るのである。  
又三角形からも描き出ださるることは次の圖で判るであらう。





第一圖



第二圖略誌

三三

第一圖

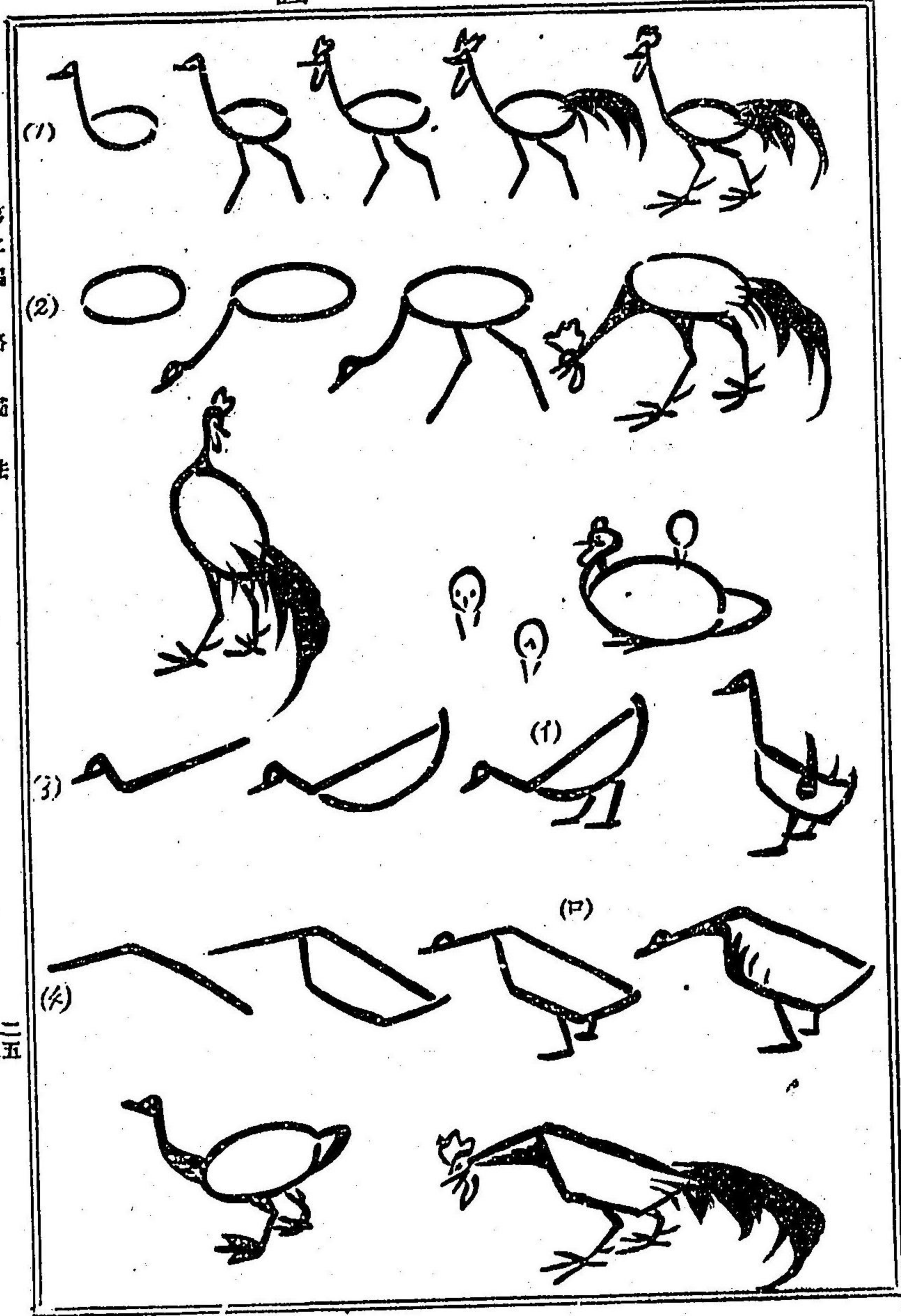
鳥類の原型(其二) 側面向 (1)の如き折線及び(2)(3)(4)の如き形は、既に水禽を示してゐるのであるが、就中(3)(4)は、最も完全である。それで此の(3)といふ原型に、尾脚等を描き加へるならば、望む所の鳥の略畫を爲し得るので、鶴、鴿、孔雀、雞等は、皆其例である。若し蛇鳥を描こうとして、其物を知らなければ、第十三圖を參考すればよ。

(1)(2)は、單に鳥類の原型であるばかりではなく、又動物の原型である。

三三



圖 二 第



第二編 繪圖法

二五

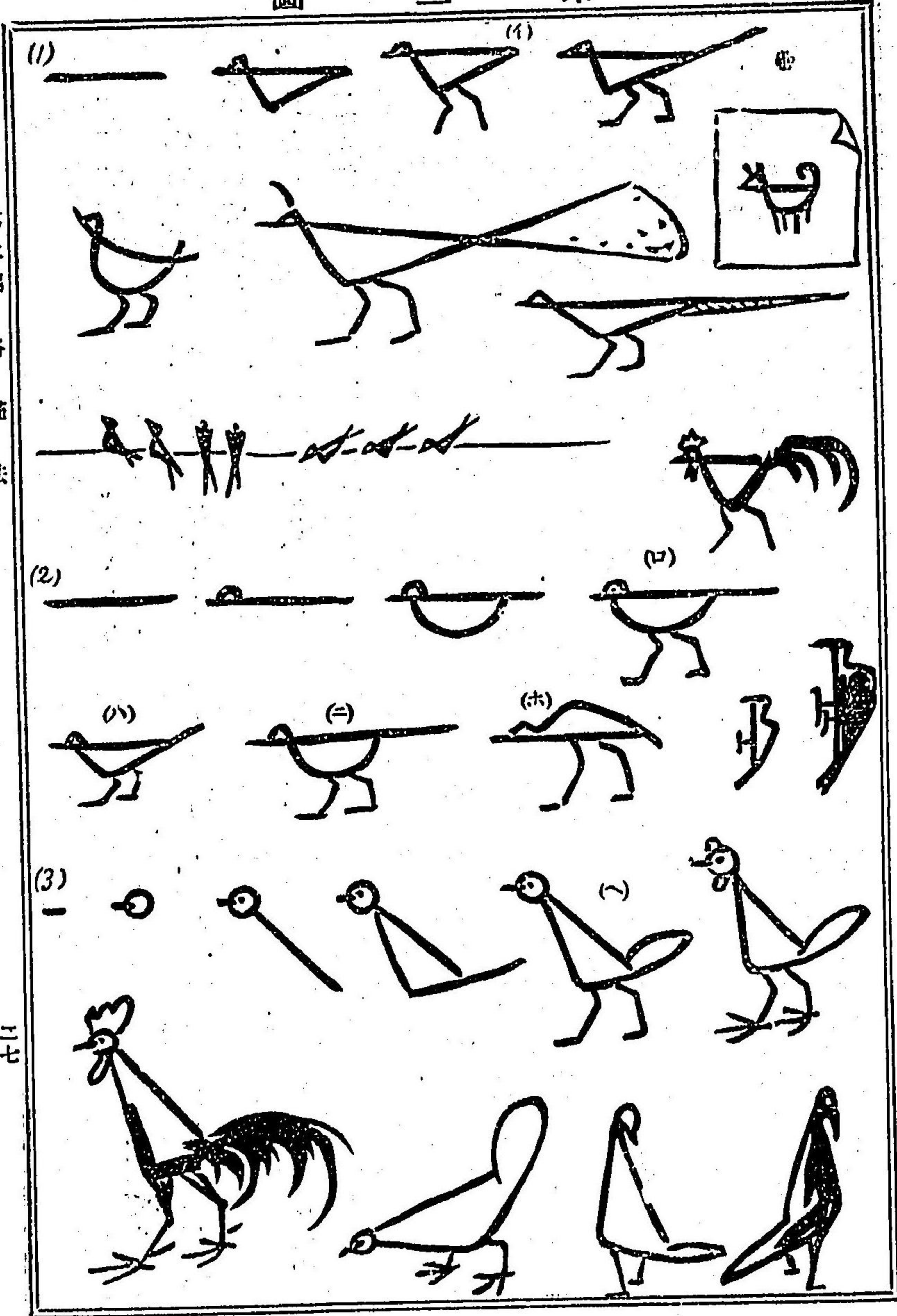
第二圖

鳥類の原型(其二) 側面向 (1)列は、前圖に於ける雞の運筆順序を示したので(2)列は、其隨意の姿勢にあるものを描く順序を示したのである。(3)(4)列は、水禽の描法順序を示したので、(イ)(ロ)は、即一般鳥類の原型となるのである。(ロ)によりて描き試みた雞及び(2)列に依つての水禽を示した。

二四



第三圖



第二編 略 法

二七

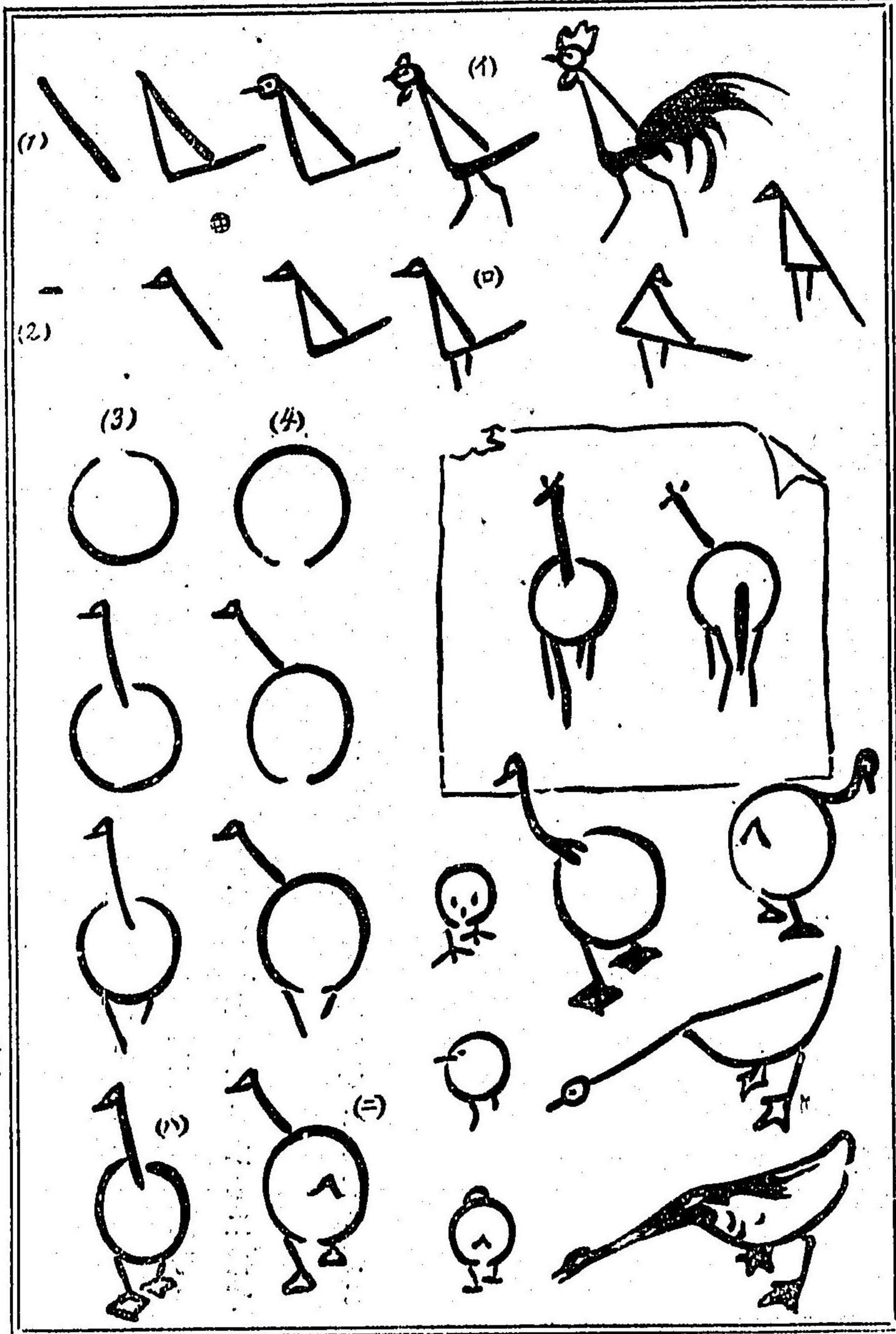
第三圖

鳥類の原型(其三) 側面向 (1)(2)(3)列は、何れも皆鳥の別種の描法順序を示した  
 のて(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)の如きは、皆其原型となり得るのである。  
 孔雀・雉子・啄木鳥・雞等は、其例である。

二六



第四圖



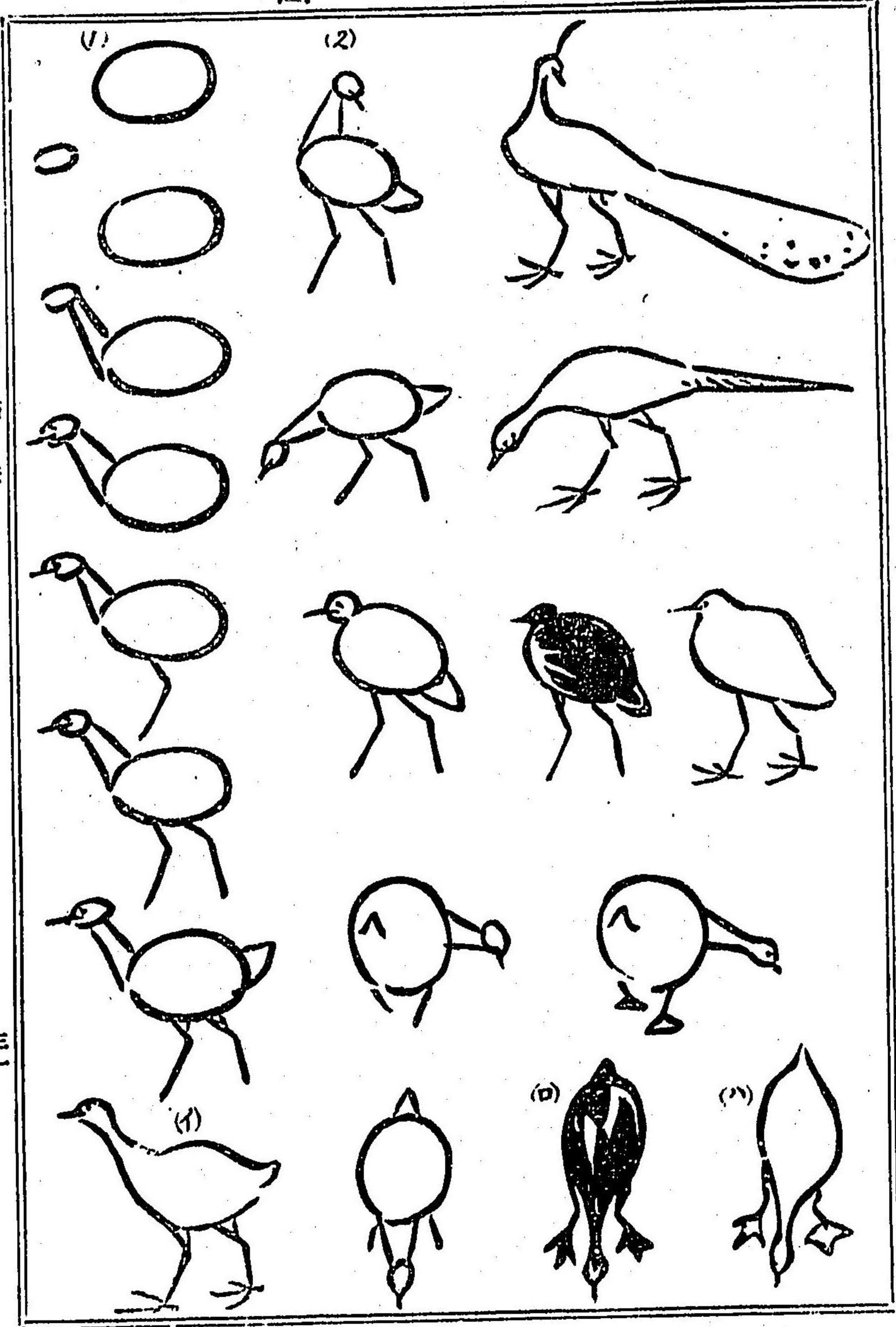
第四圖

鳥類の原型(其四) 側面及正面向 (1)(2)列の(イ)及び(ロ)は、又側面原型である。(3)(4)列は、水鳥の正面及び背面描法の順序を示したので、(ハ)及び(ニ)は、鳥類の原型となるのである。

水鳥の正面向きの足は菱形に、背面は三角形に描くのである。他の鳥の背面向の足の如きは、倒丁字が適當であらう。



第五圖



鳥の姿勢の描法

三〇

第五圖

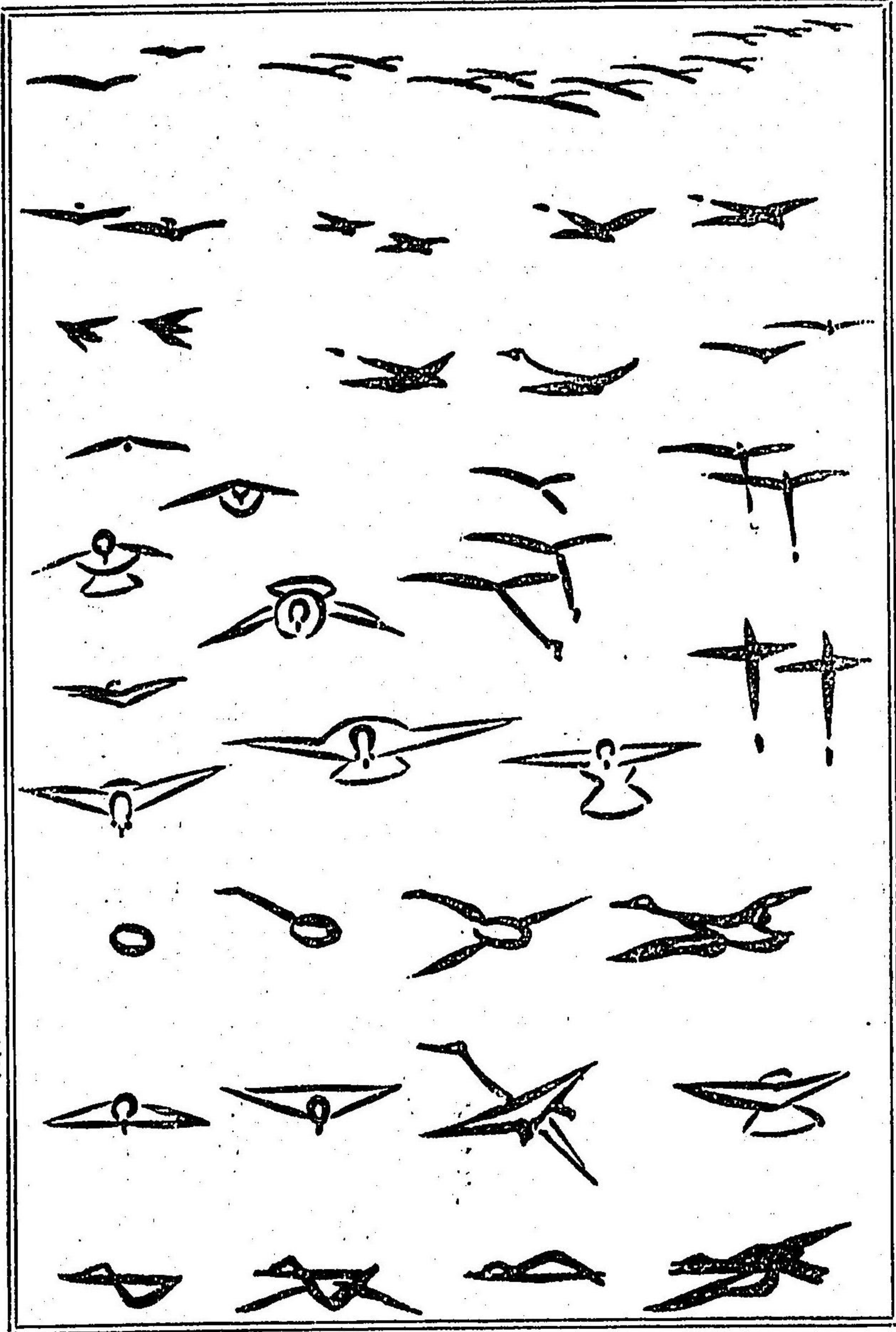
各種の姿勢にある鳥類の描法及構成 (1)列は、任意の姿勢にある各種の鳥類を構成する順序を示したので、後に其不要の線を消去して、單に其輪廓のみを認むること、(イ)若しくは(ハ)の如くするか、又は其全體を塗抹して、(ロ)の如くするか、の二様である。

(2)列は、各種の姿勢に於ける構造例を示したので、孔雀とも亦雉子ともなり得るのである。

三〇



第六圖



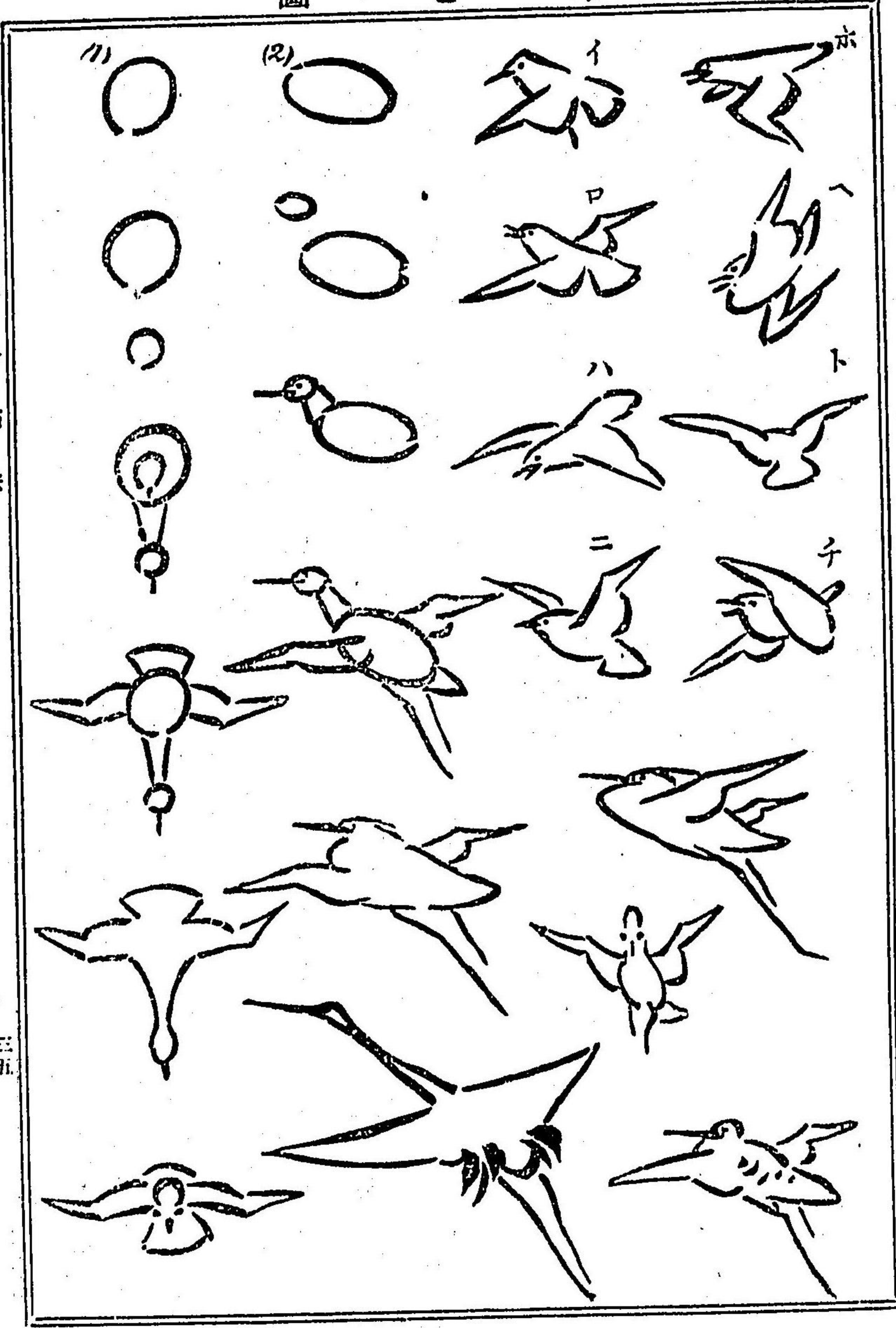
第六圖

飛鳥 本圖は種々の鳥の飛んで居る形を、雜然描き集めたのであるが、其運筆順序は、第百四圖の解説を參看して、便宜所決して宜しい。實はこれ位のもは、何所からでも描き得るのであるから。

飛鳥を描くに注意すべき一事は、筆を輕快に運ぶ事である。



第七圖



第二編 略 法

三五

第七圖

各種の姿勢にある飛鳥の描法及構成 (1)列は、正面若しくは背面に向つて、飛ぶものを構成する順序、及描法を示し、(2)列は、其側面向のもの、を工夫する順序を示したので、(イ)・(ハ)・(ニ)等の諸形も、皆如上の構式法により、案出せらるるのである。

- 第八・九圖 鶏 (其一其二)
- 第十圖 鳩
- 第十一圖 啄木鳥 鴉鳥
- 第十二圖 鶯 ミサゴ
- 第十三圖 鶴
- 第十四圖 雁 鴨
- 第十五圖 鵜
- 第十六圖 雉子 孔雀 七面鳥
- 第十七圖 鴉 雲雀 鶯 雀 鴿 魚狗 鷹
- 第十八圖 烏 燕 鷹 ゴンドル
- 第十九圖 燕 鳥 木 兎 鷓 鴒 インコ
- 第二十圖 鷺 五位 鷺
- 第二十一圖 飛 雁 鷺 鷺

三四



圖 九 第

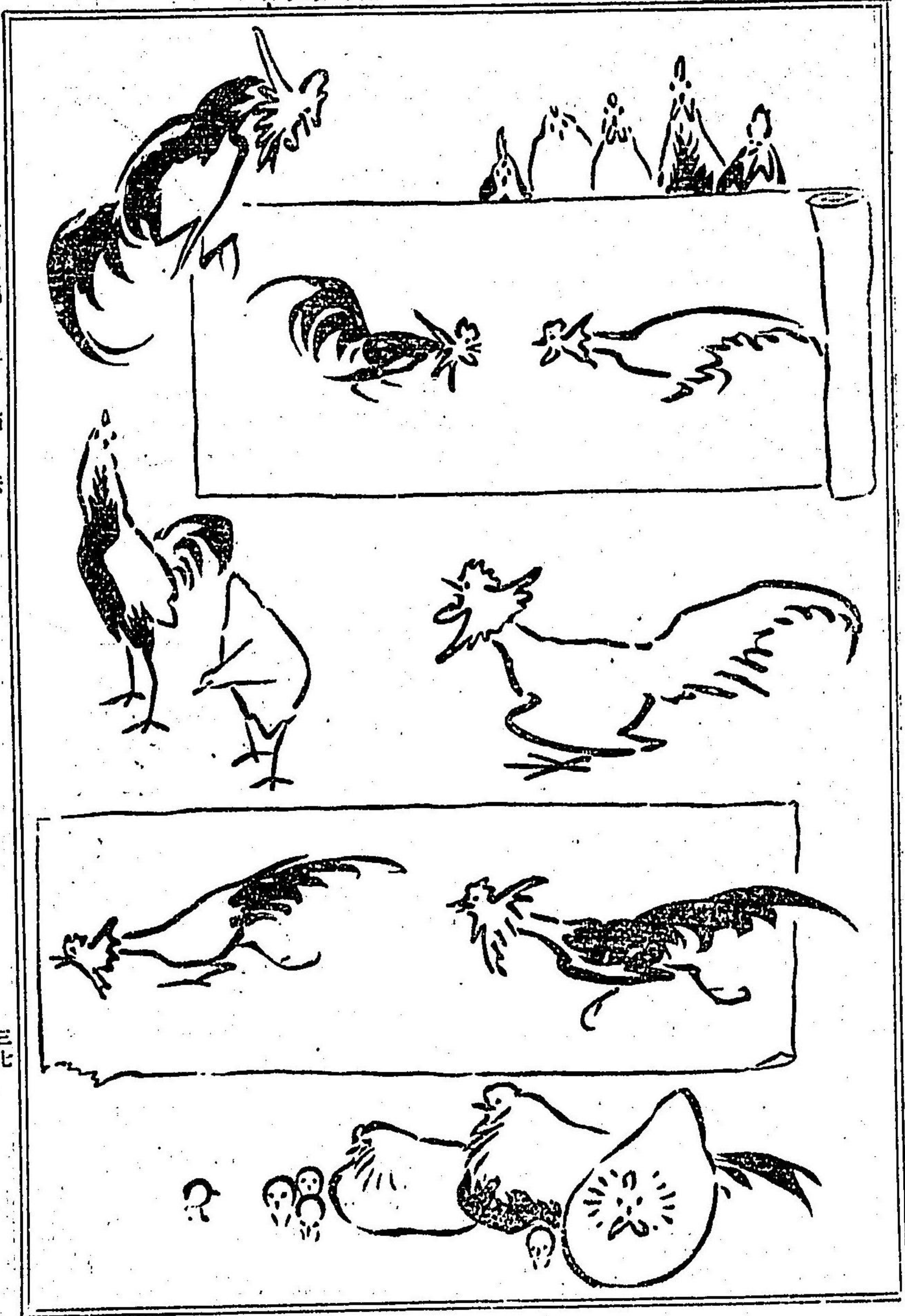


圖 八 第

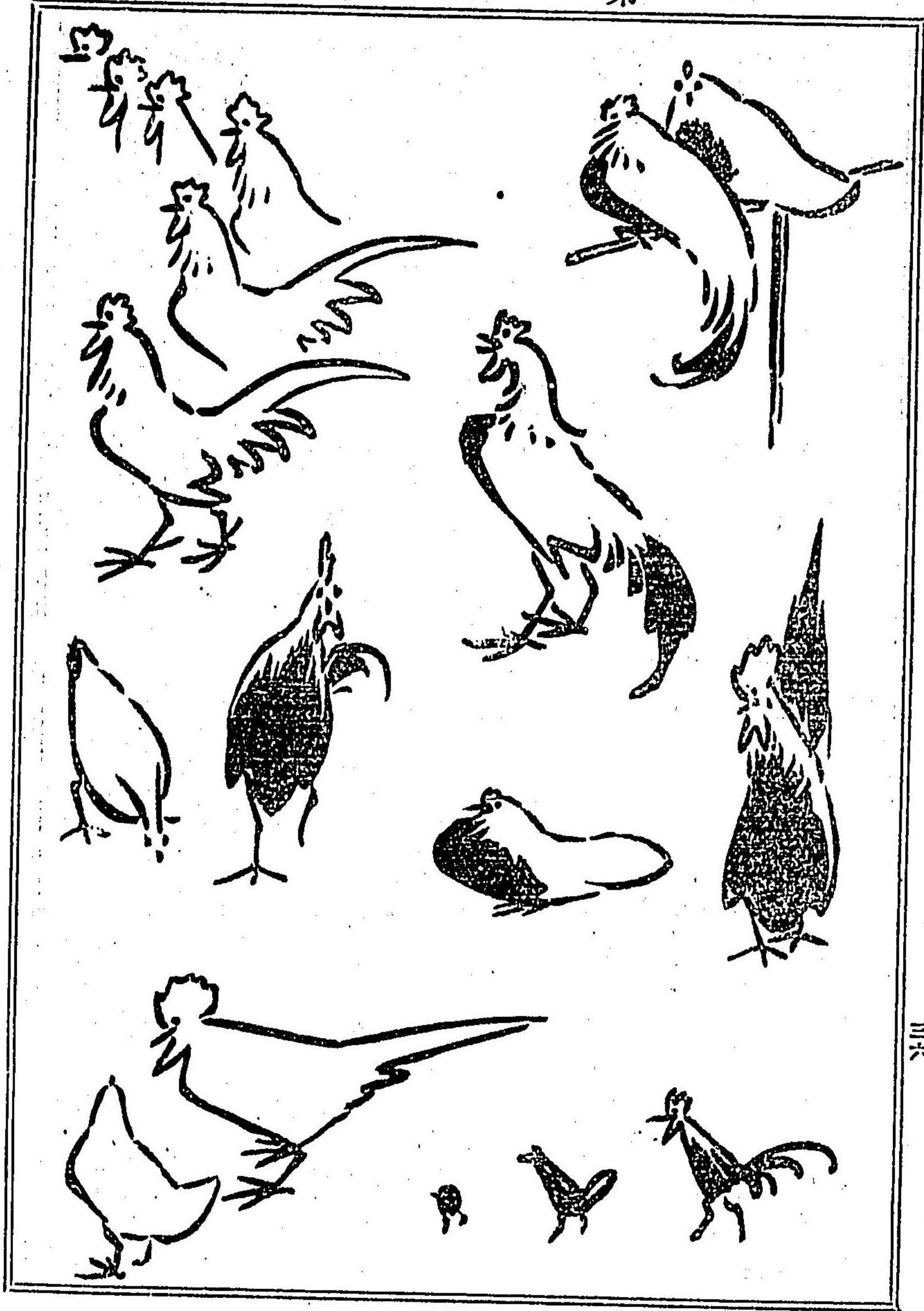
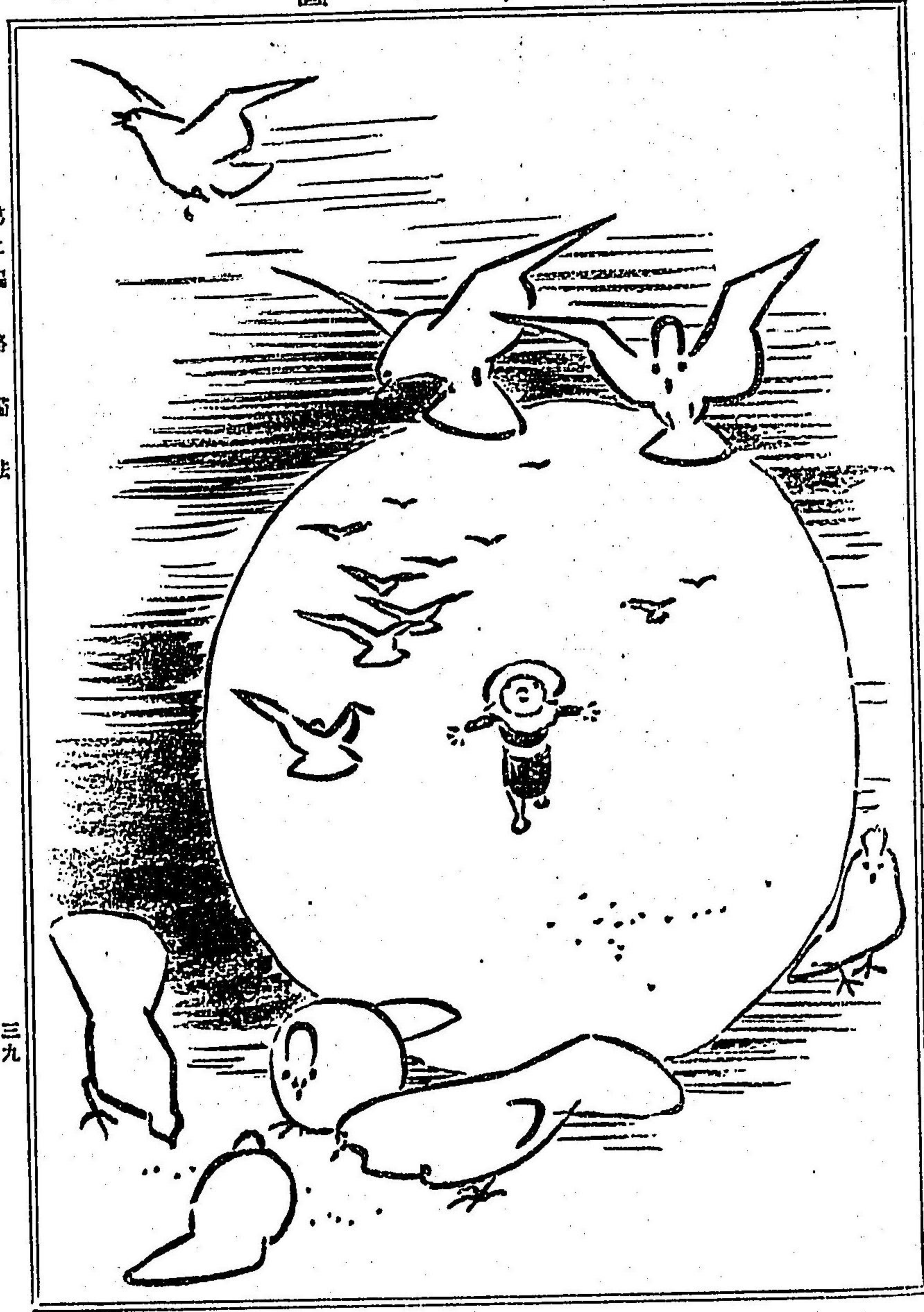


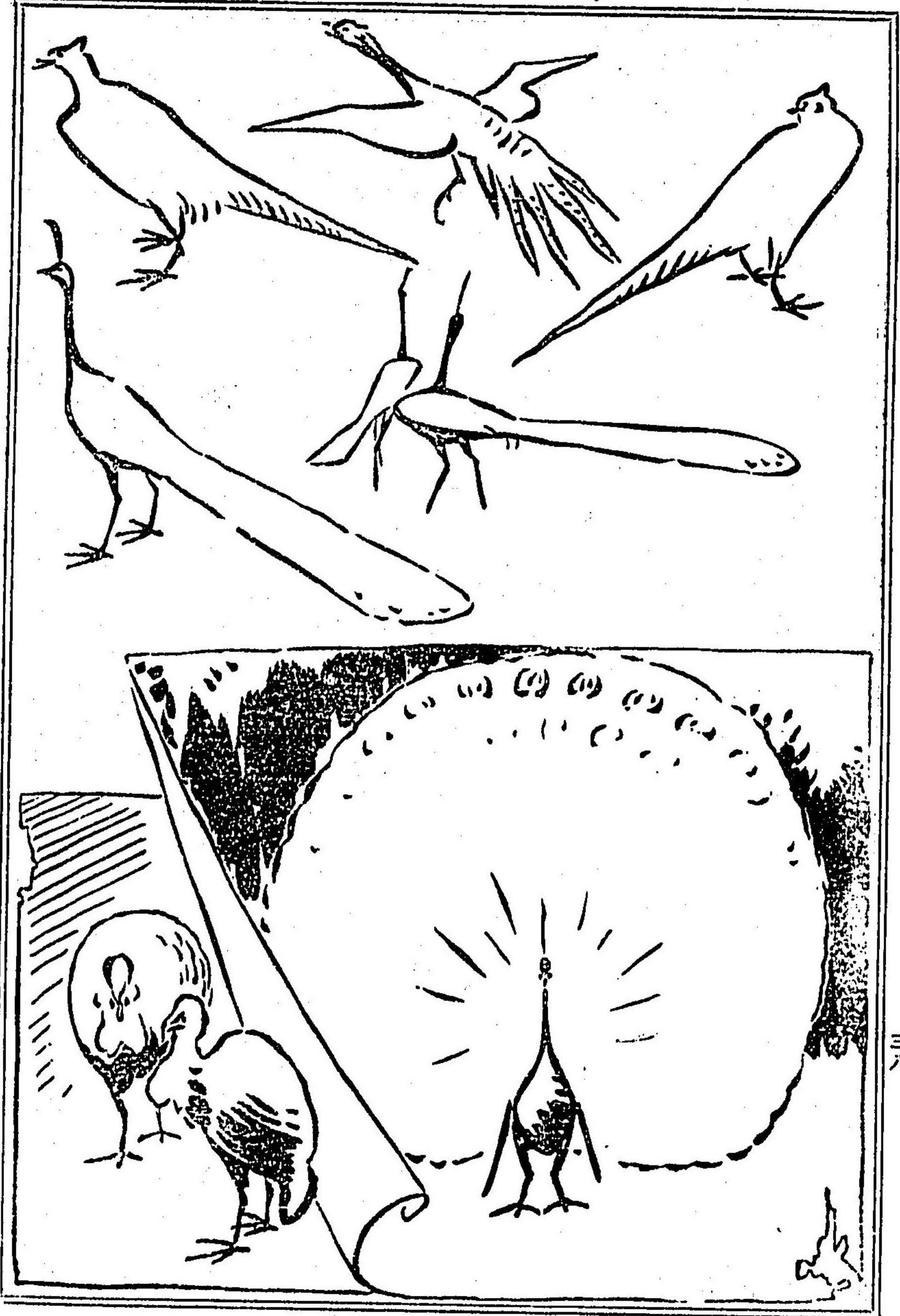


圖 一 十 第



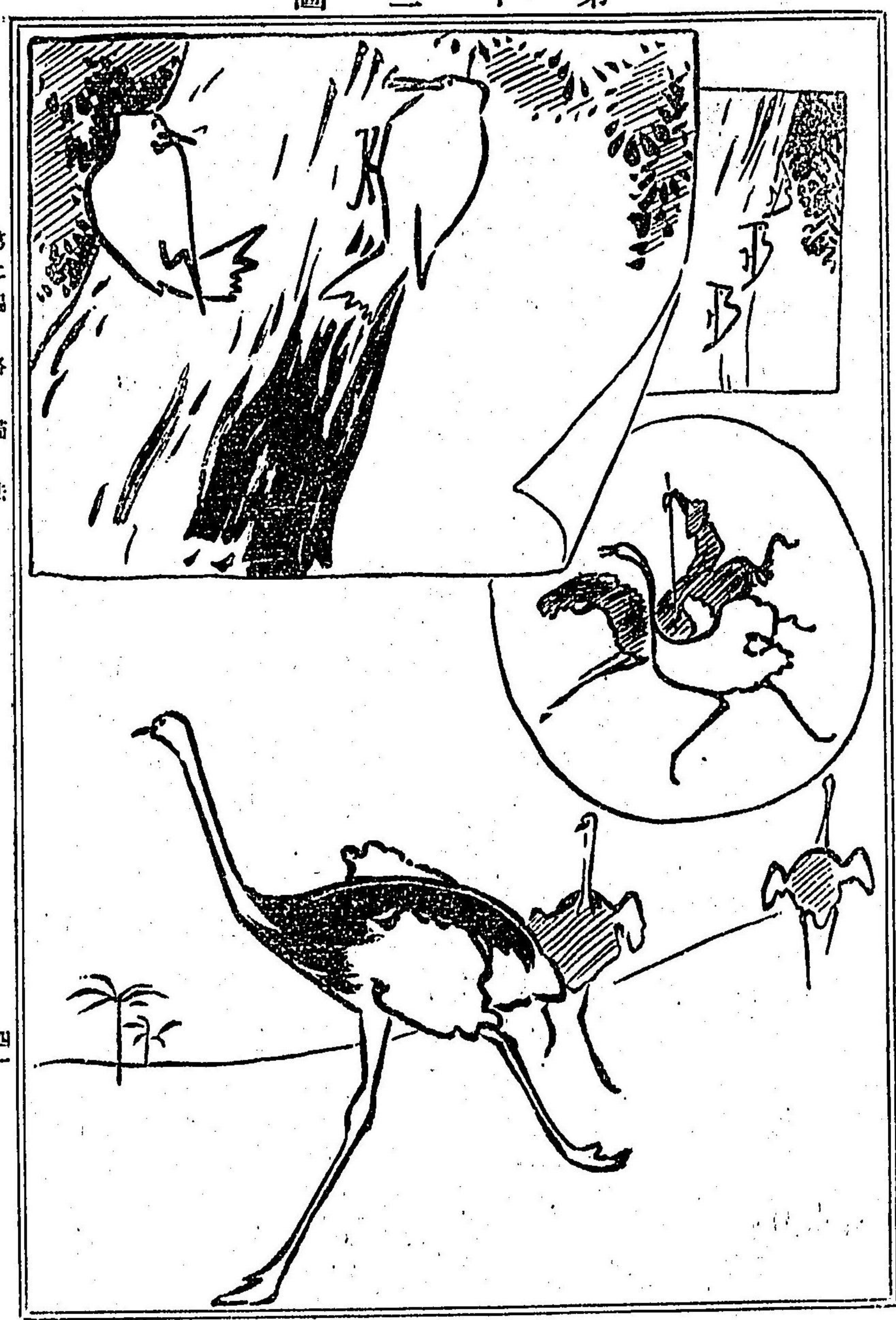
第 二 編 略 畫 法

圖 十 第





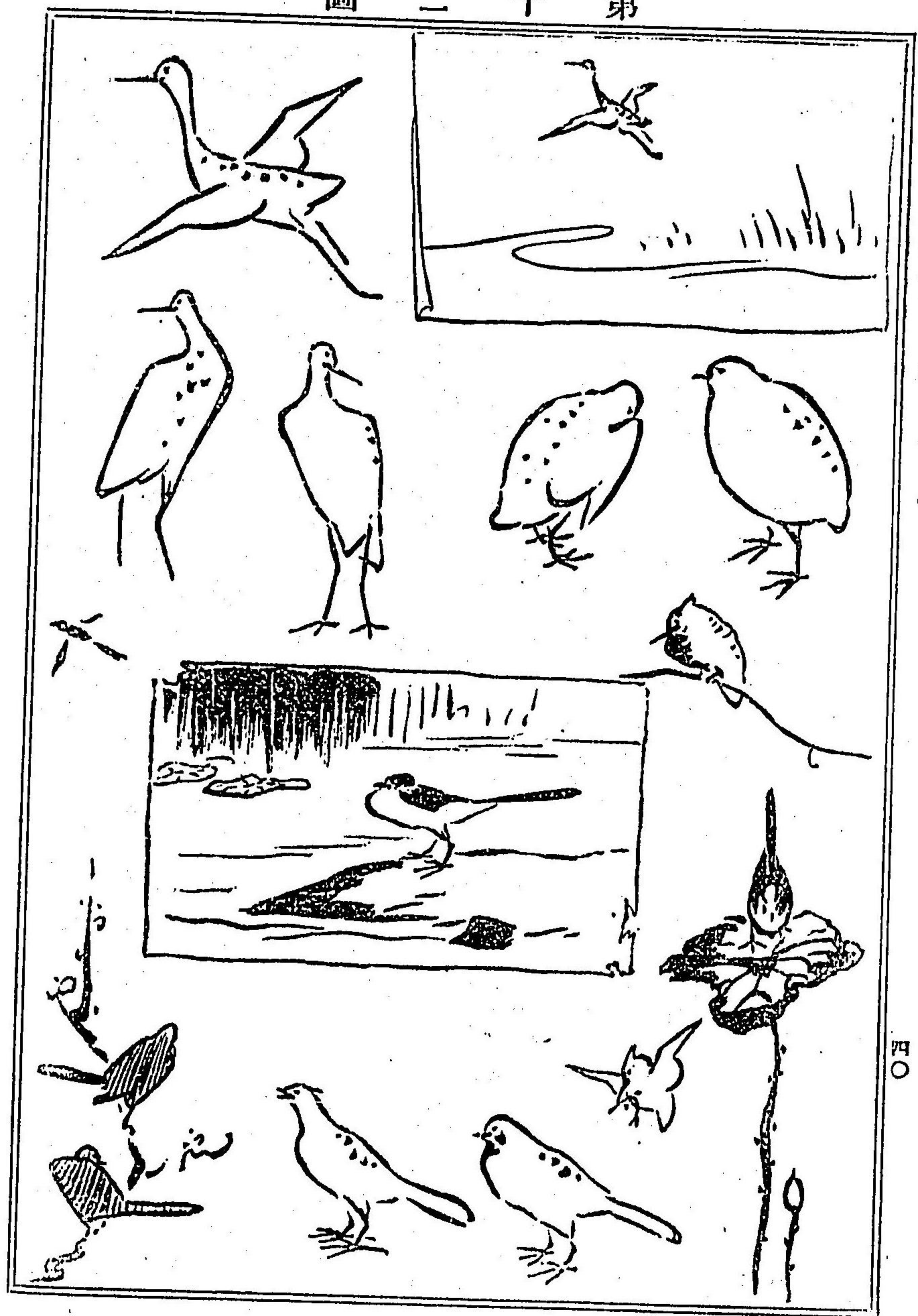
圖三十第



第二編 略 畫 法

四一

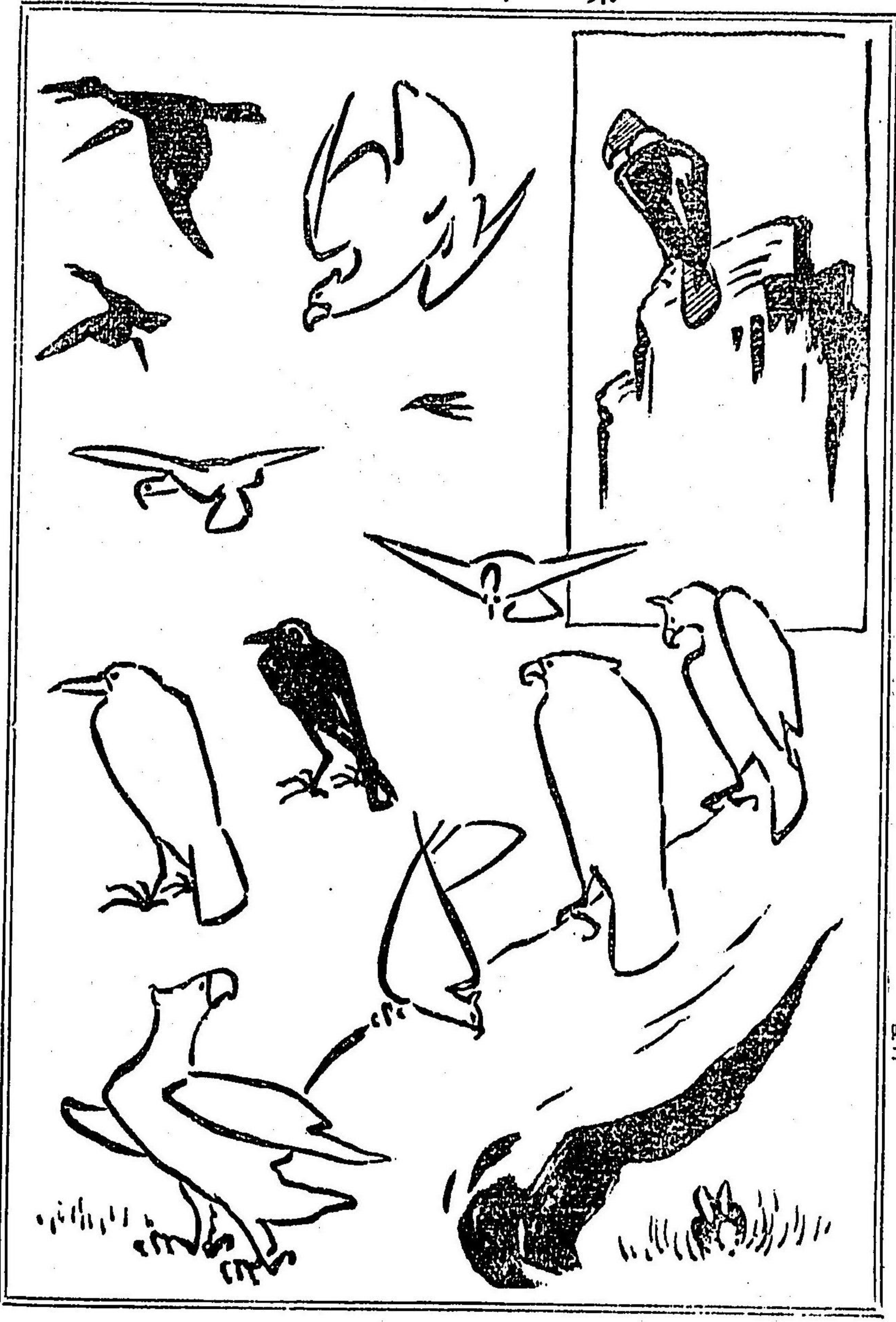
圖二十第



FO



圖 四 十 第



四二

圖 五 十 第

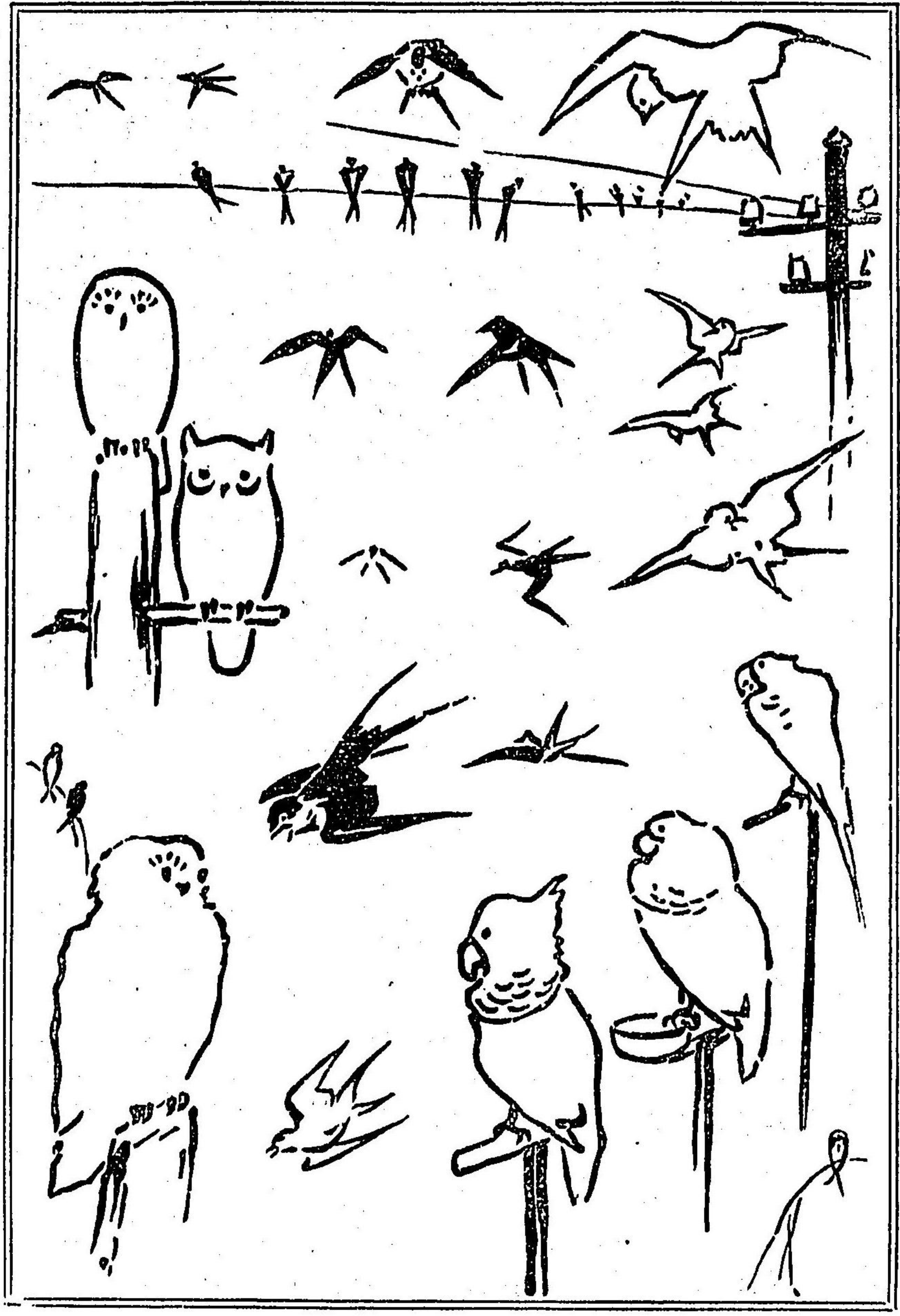


第二編 略 節 法

四三

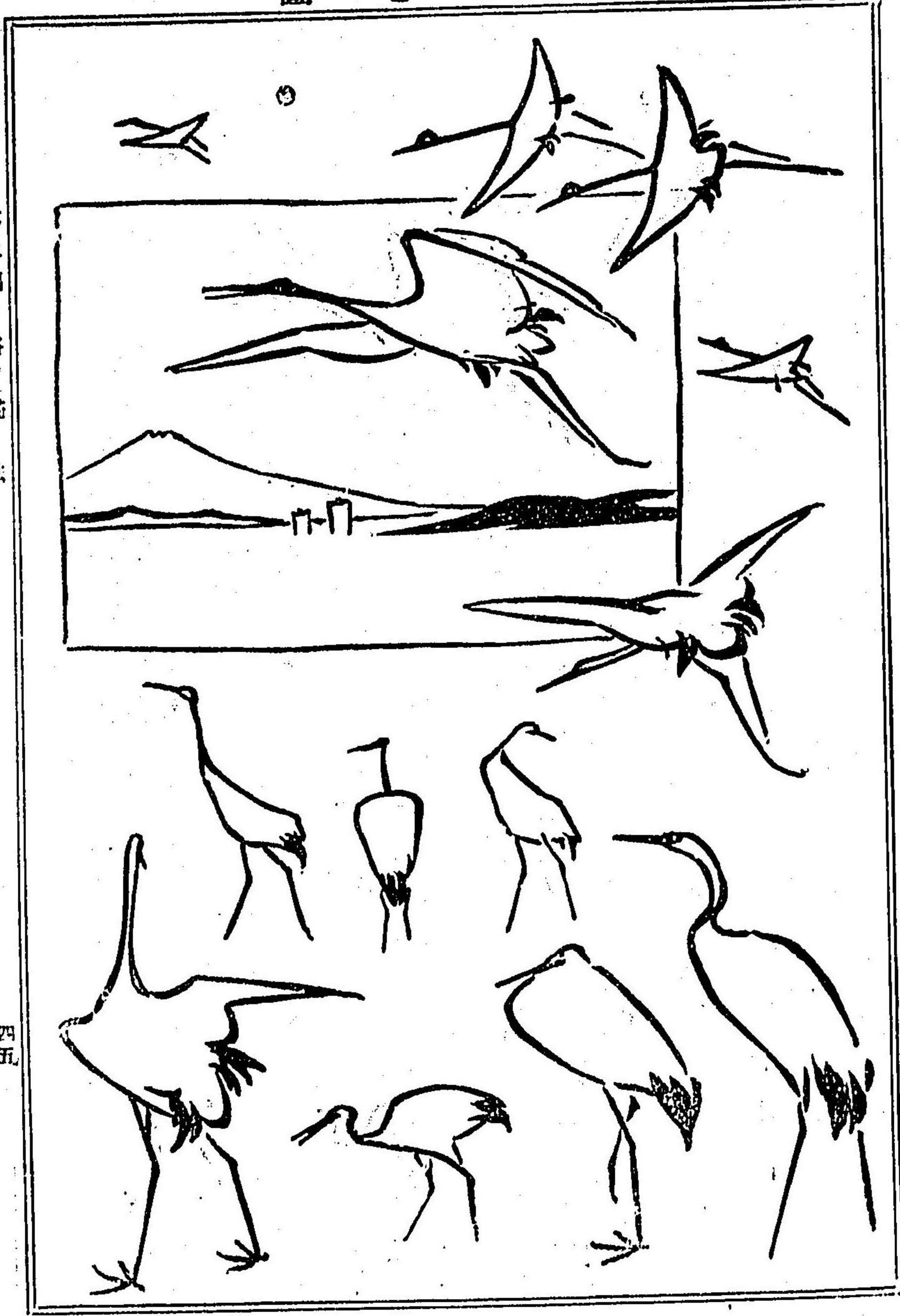


圖六十第



四

圖七十第

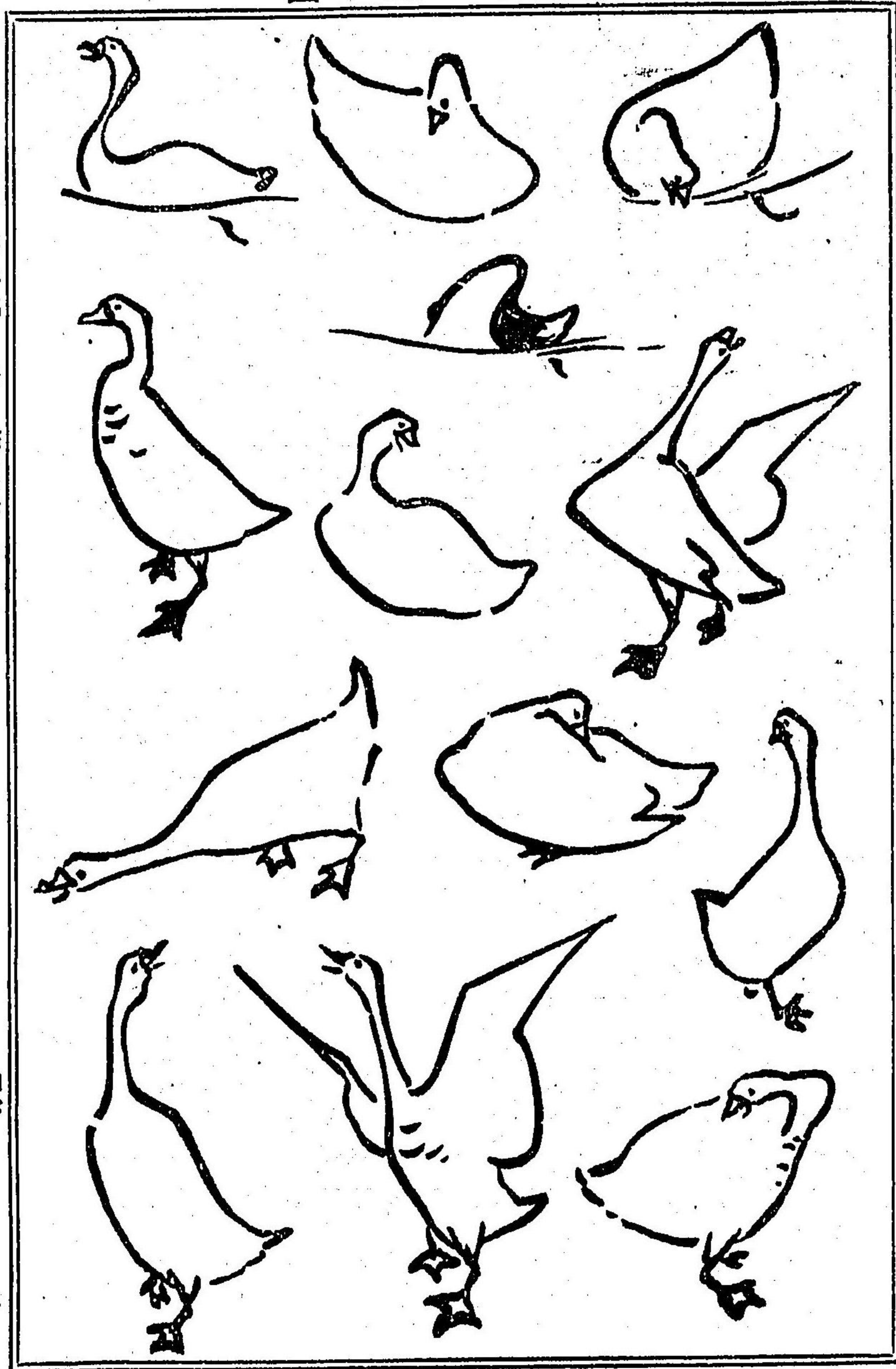


第二編 呼 誌 法

四



圖九十第



第二編 略 畫 法

四七

圖八十第



四六



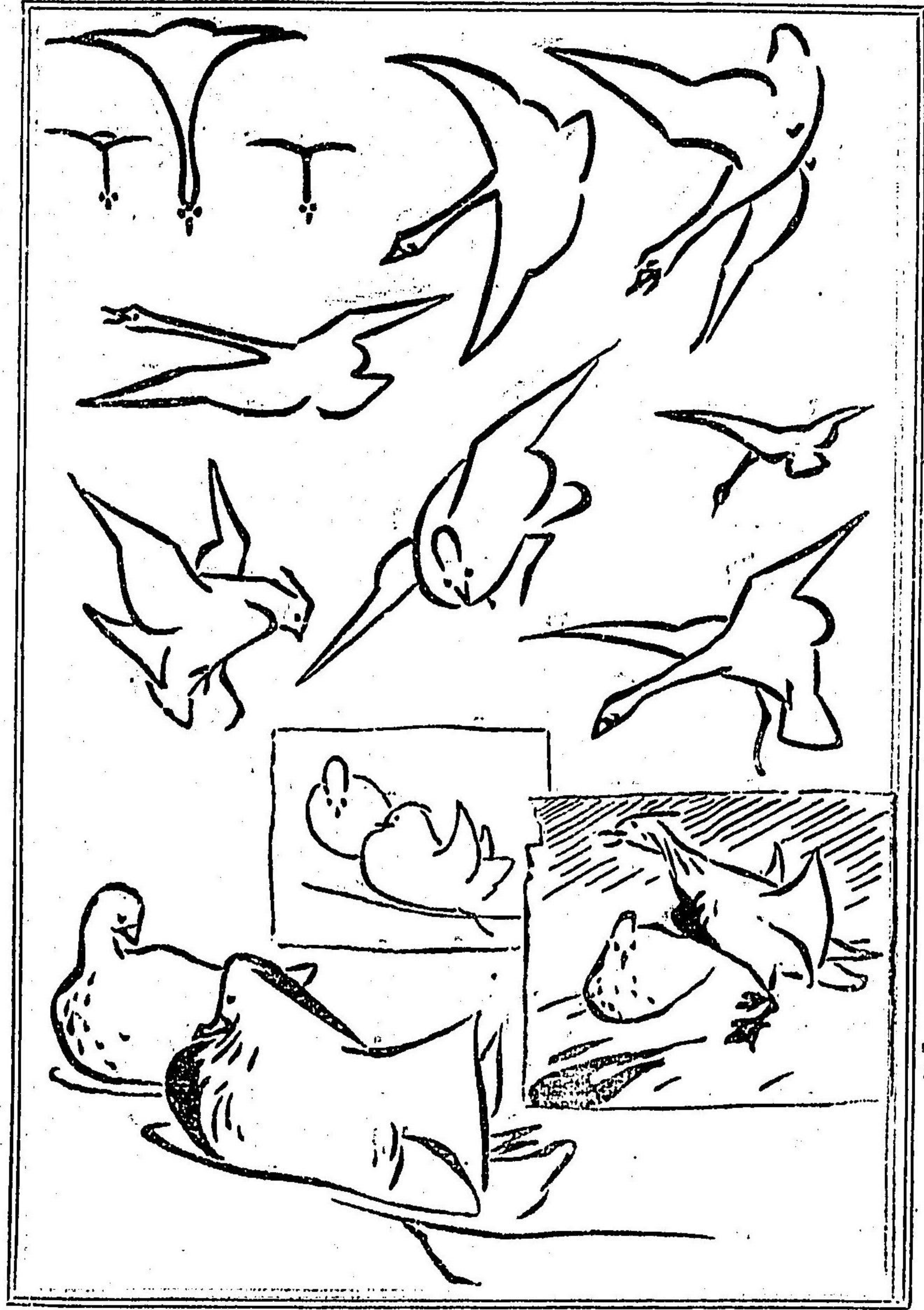
圖一十二第



第二編 略 畫 法

四九

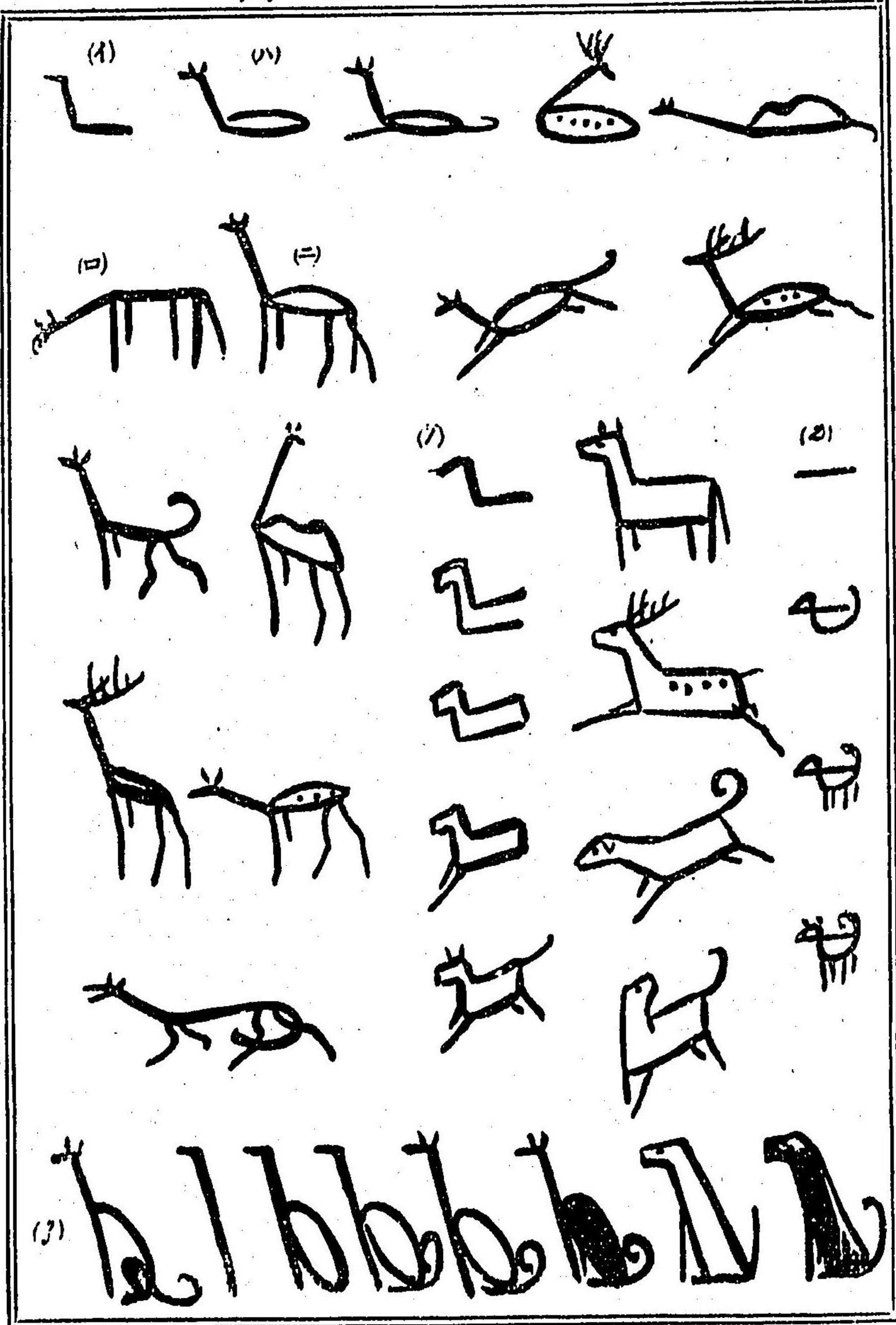
圖十二第



四八



圖 二 十 二 第



第二 獸

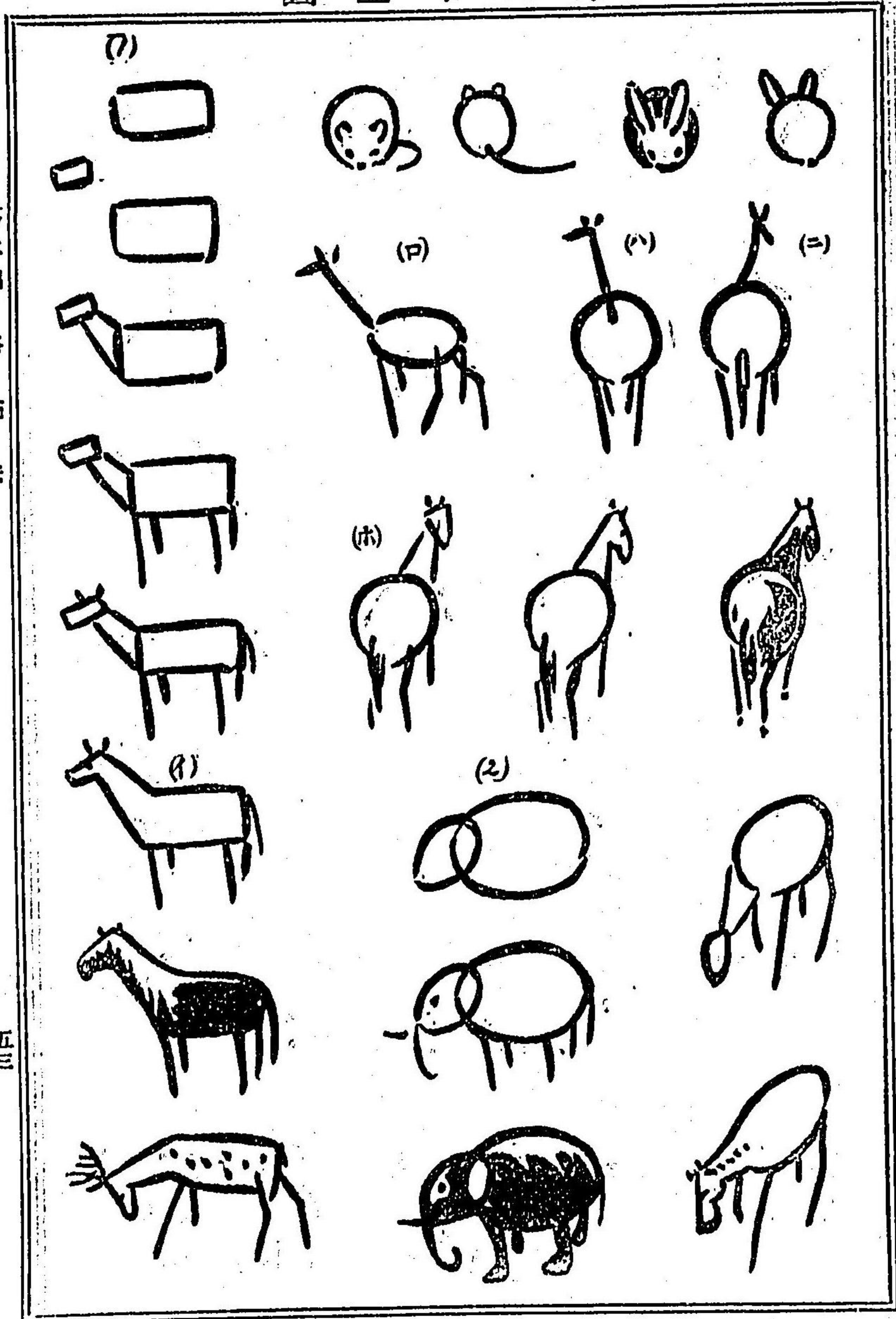
第二十二圖

動物の原型(其一) 側面向 (イ)の如き折線は、不充分ながら、坐せる動物の形であるが、これに四足及び尾等を附け加ふれば(ロ)の如く、確に動物の原型となり、(ハ)の如きも、亦足及び尾などを添えて、(ニ)の如くすれば、一層確なる原型を得るのである。

(1)(2)列は、一層完全なる動物原型の運筆順序を示したので(3)列は、以上三種の原型により、犬を描き試みたのである。



圖 三 十 二 第



第二十三

動物の原型(其二) 側面及正面背面向 或る動物の任意の形を描かんとするならば(1)列の如き順序で構成し(イ)の如く冗線を消去して單に其輪廓のみを認むるか又は全體を塗抹するのである。(ロ)は構成順序に準じて前回の(ニ)を任意の姿勢に描き得ることを示した迄である。

以上は側面向に於ける構成に就てであるが正面及背面は(ハ)(ニ)の如く又(ホ)の如くにして工夫するのである。

象猪若しくは豚の如きものは(2)列に法るべきものである。

第三十四圖 狐 第三十五圖 象。

第三十六圖 猫 第三十七圖 虎豹。

第三十八圖 ライオン。

第三十九圖 猿 第四十圖 駱駝 熊 白熊 ビーバ。

第四十一圖 鯨 及 魚類に屬する鱈。

第三十圖 鹿カモシカ 駟鹿シラフ。

第三十一圖 兎。

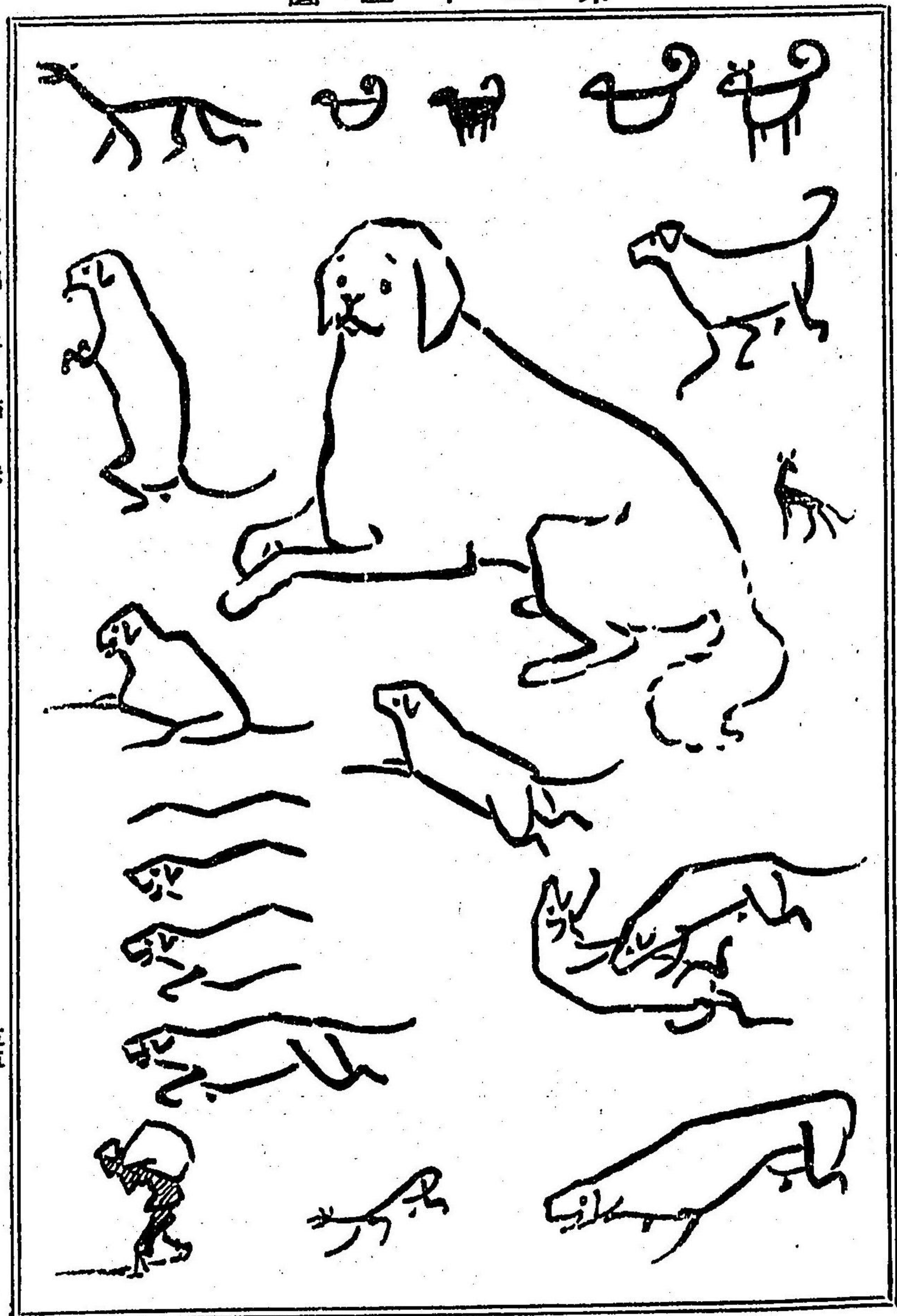
第三十二圖 鼠 栗鼠袋鼠。

第三十三圖 牛。

第三十四圖 狐 狸 猿 猪 系ムシラモチイタ



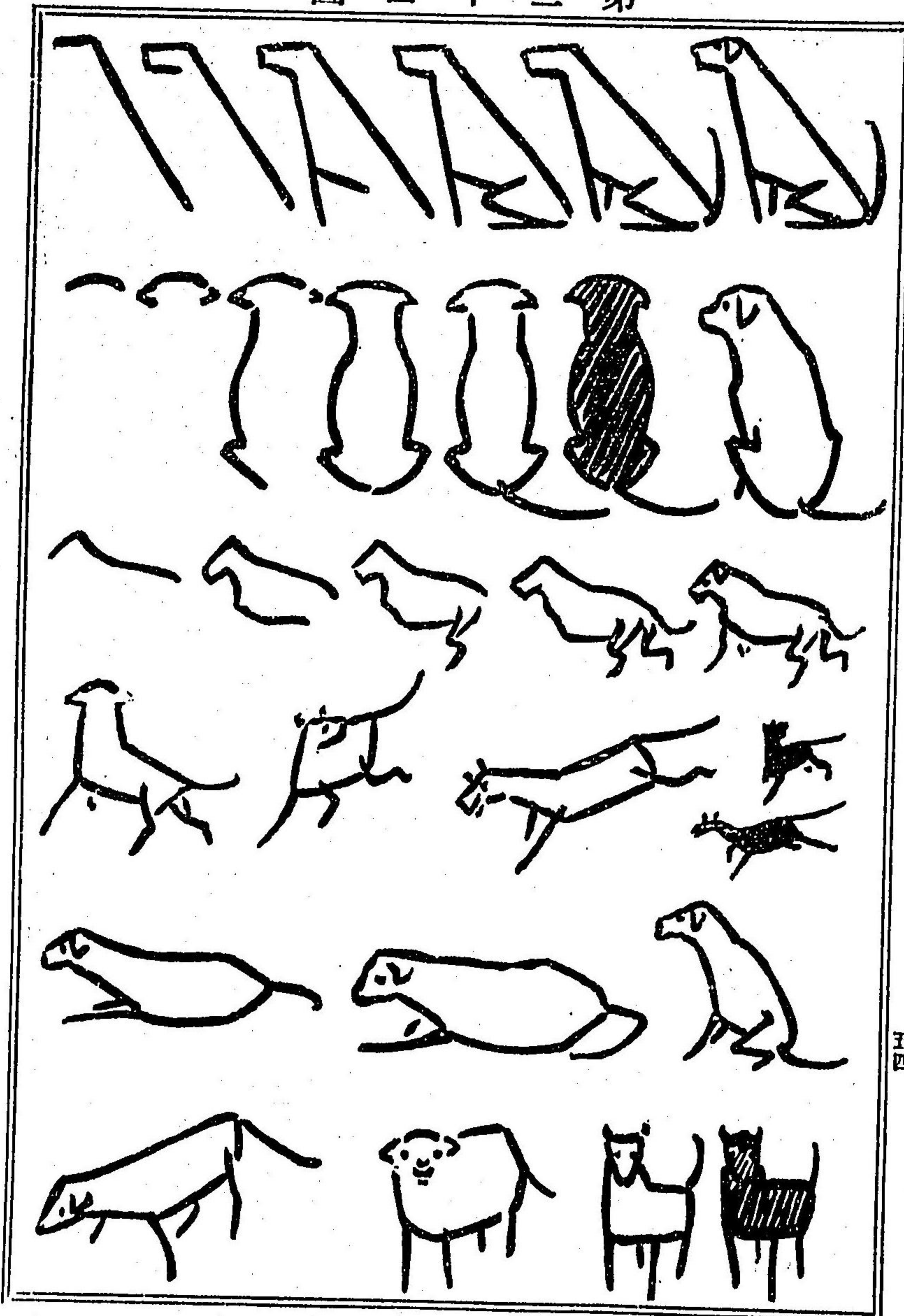
圖 五 十 二 第



第 二 節 各 種 狗 法

五 四

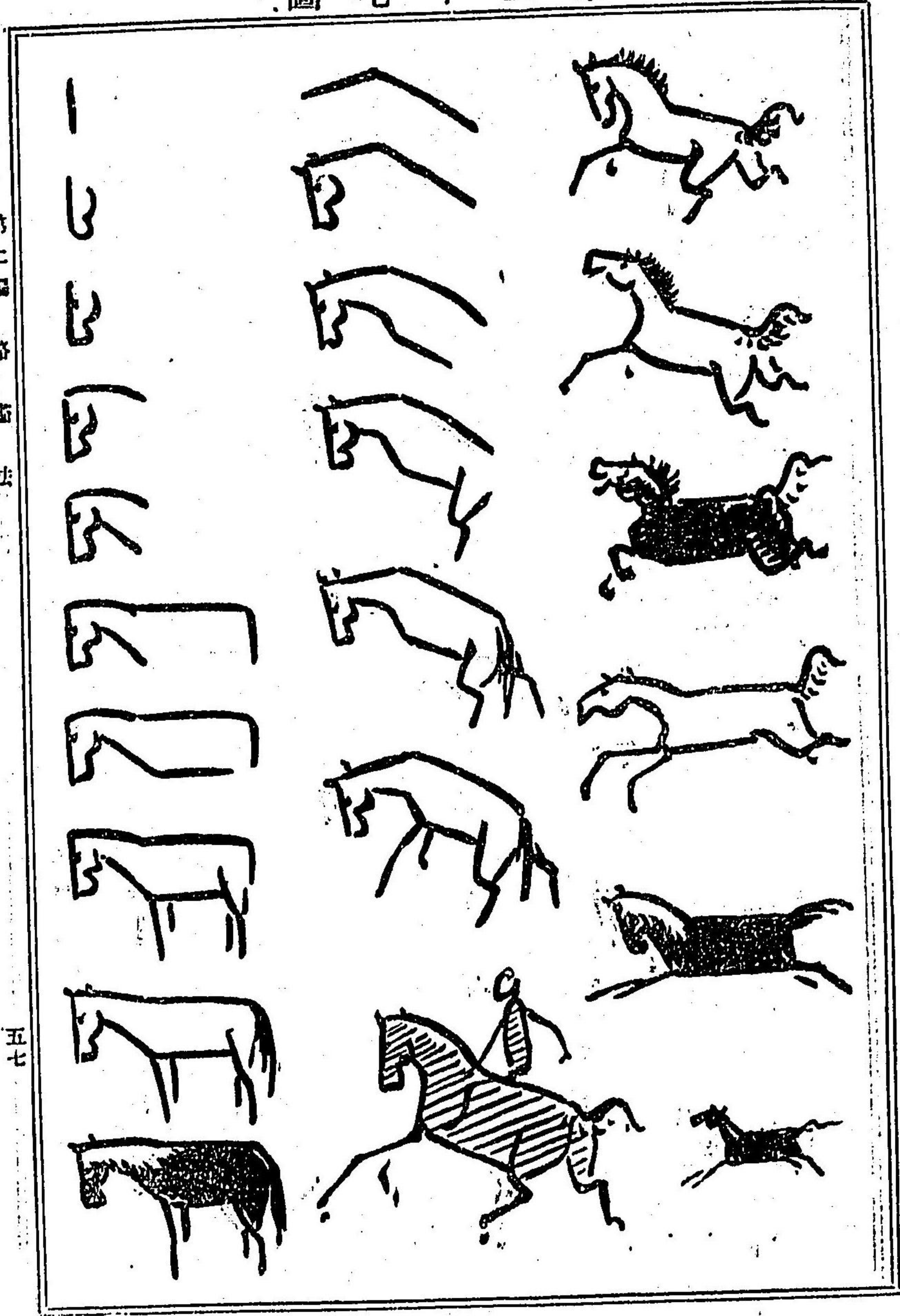
圖 四 十 二 第



五 四



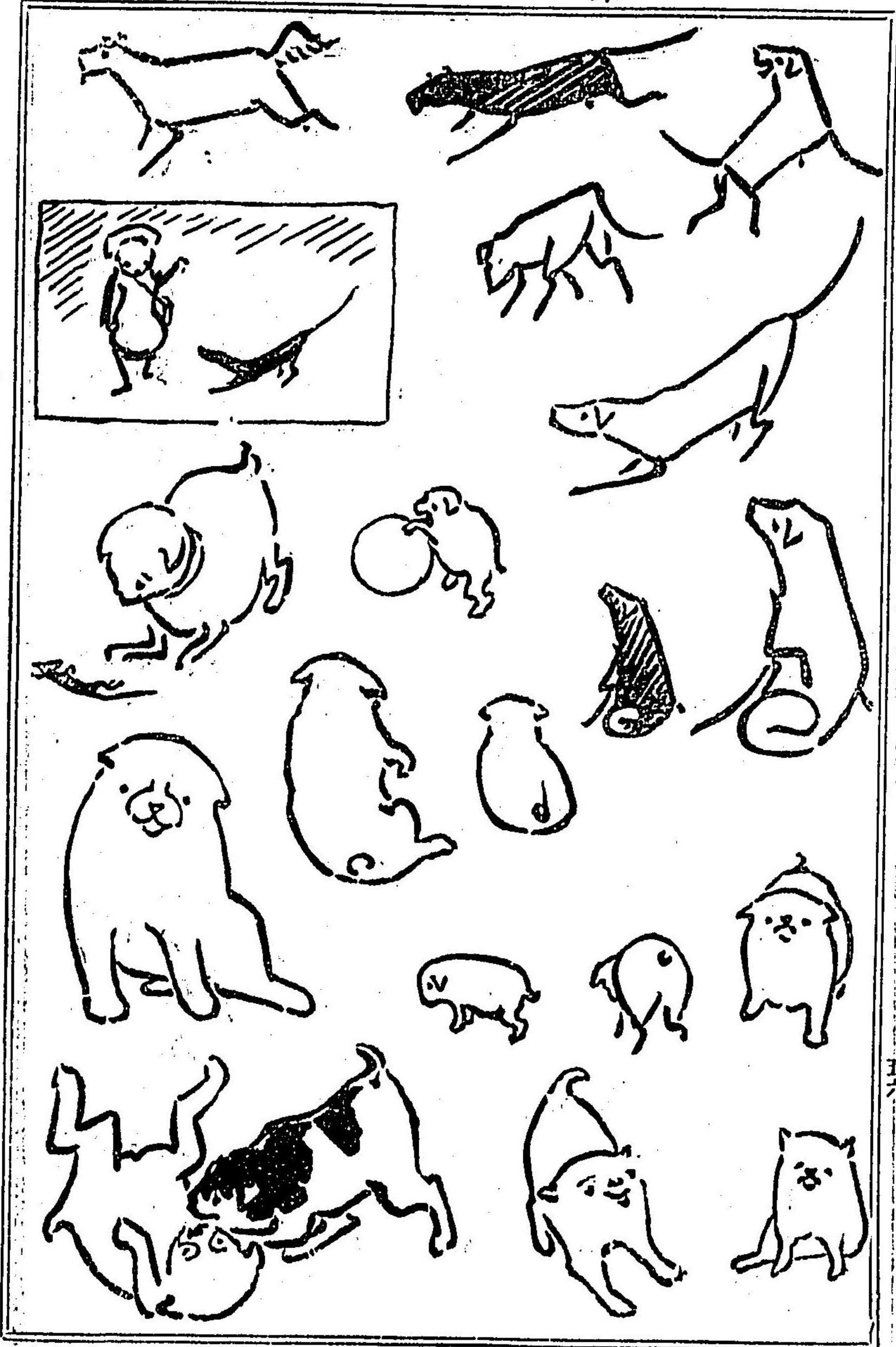
圖七十二第



第二編 略 畫 法

五七

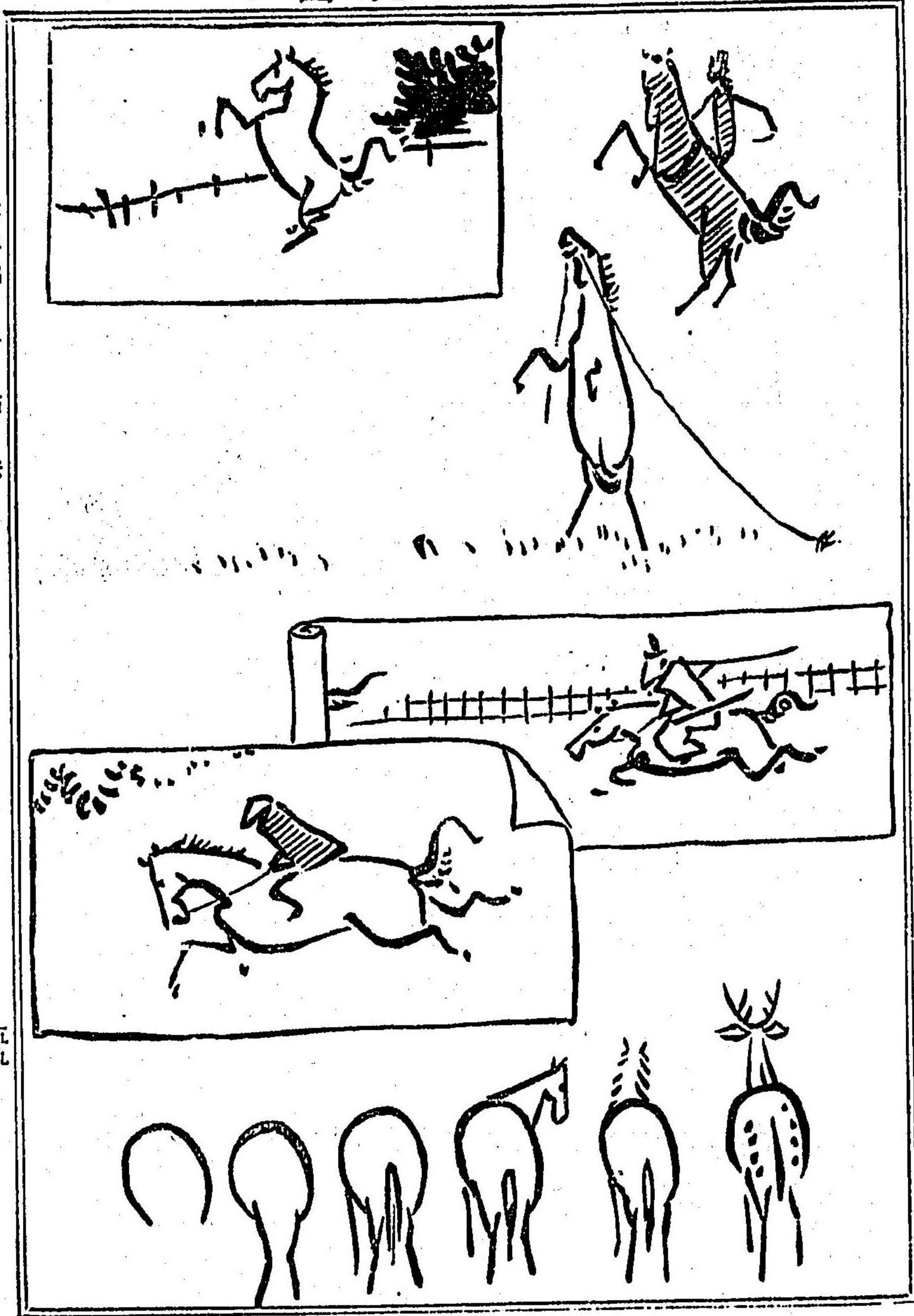
圖六十二第



五六



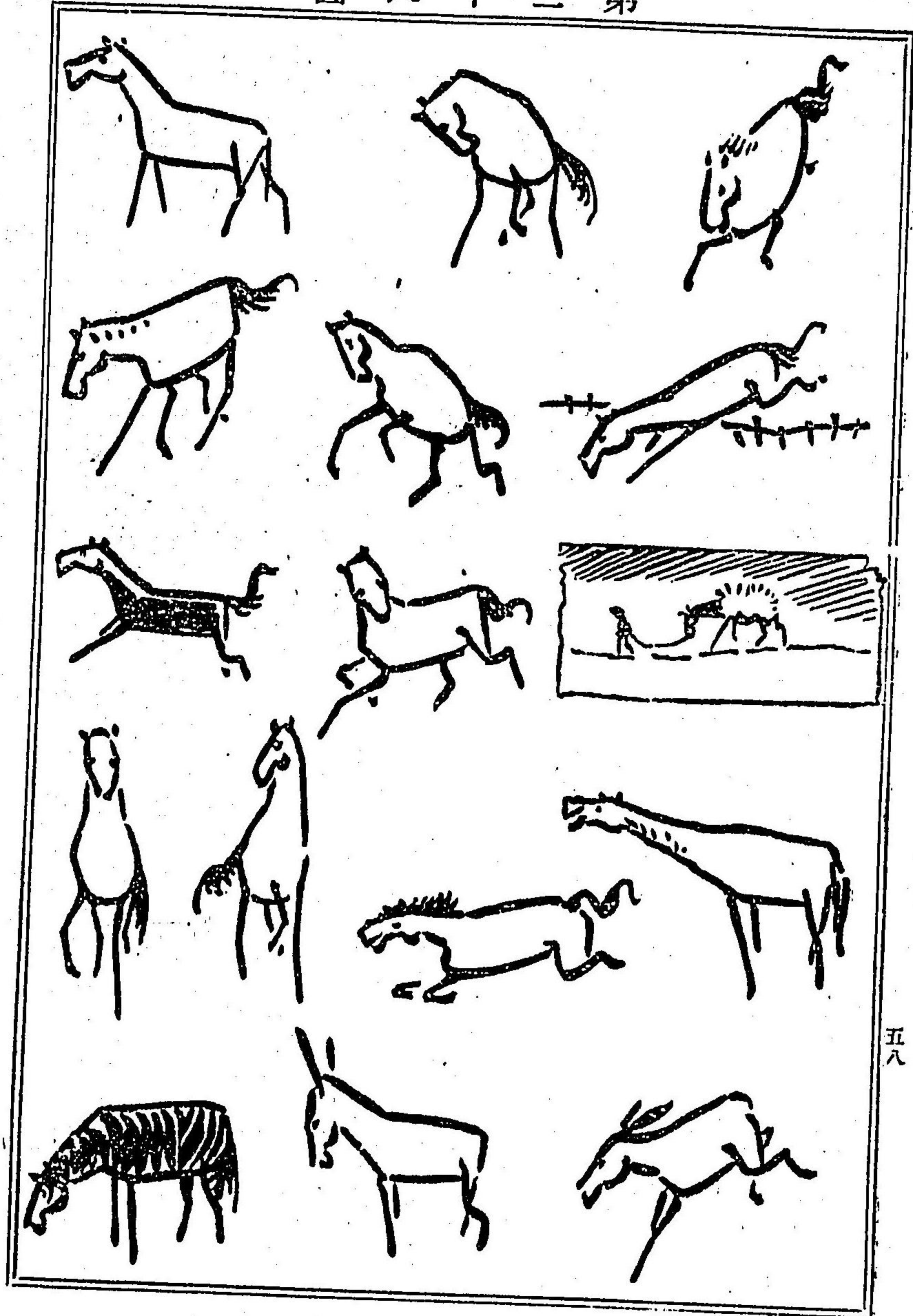
圖九十二第



第二編 略 畫 法

五九

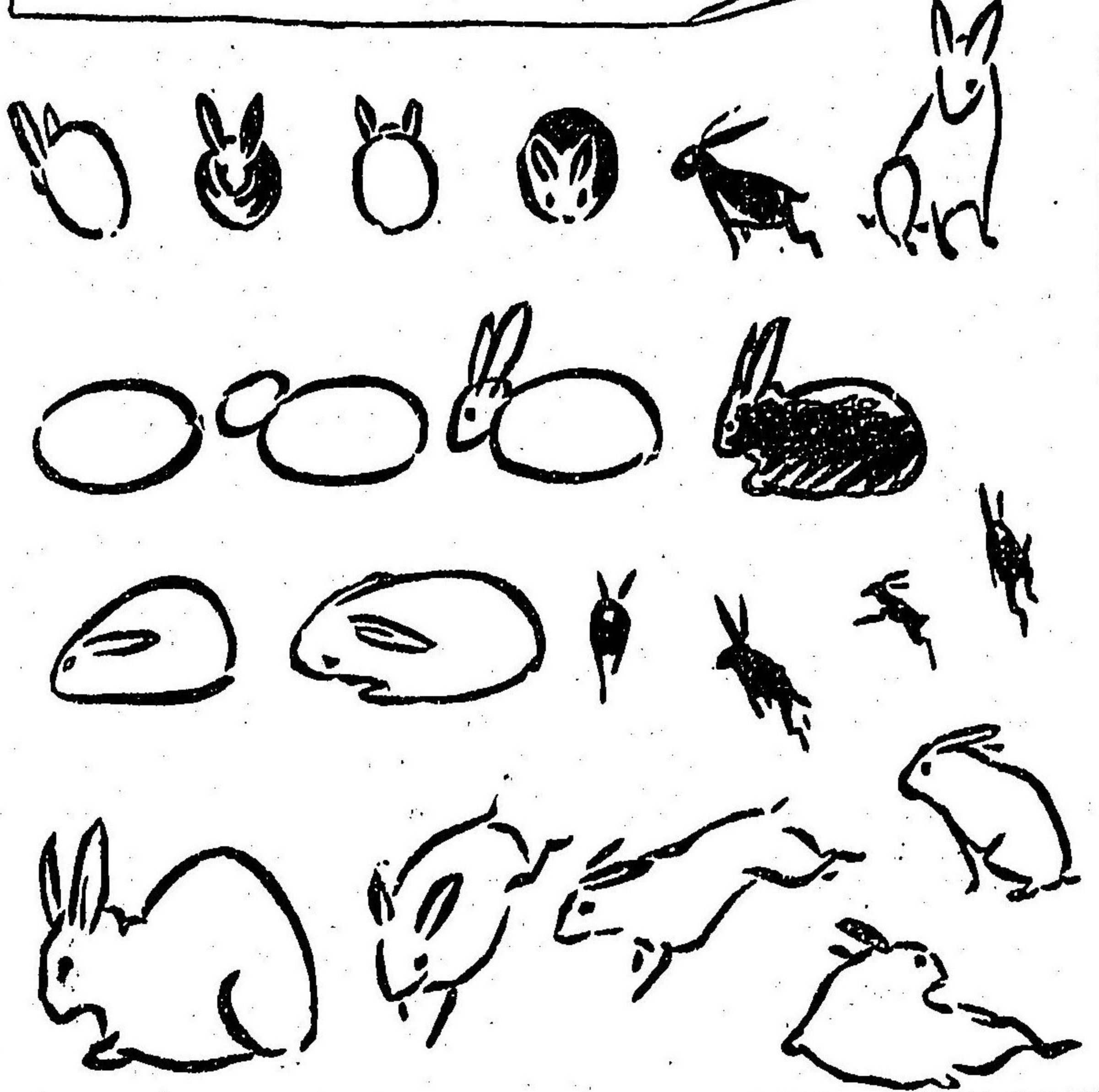
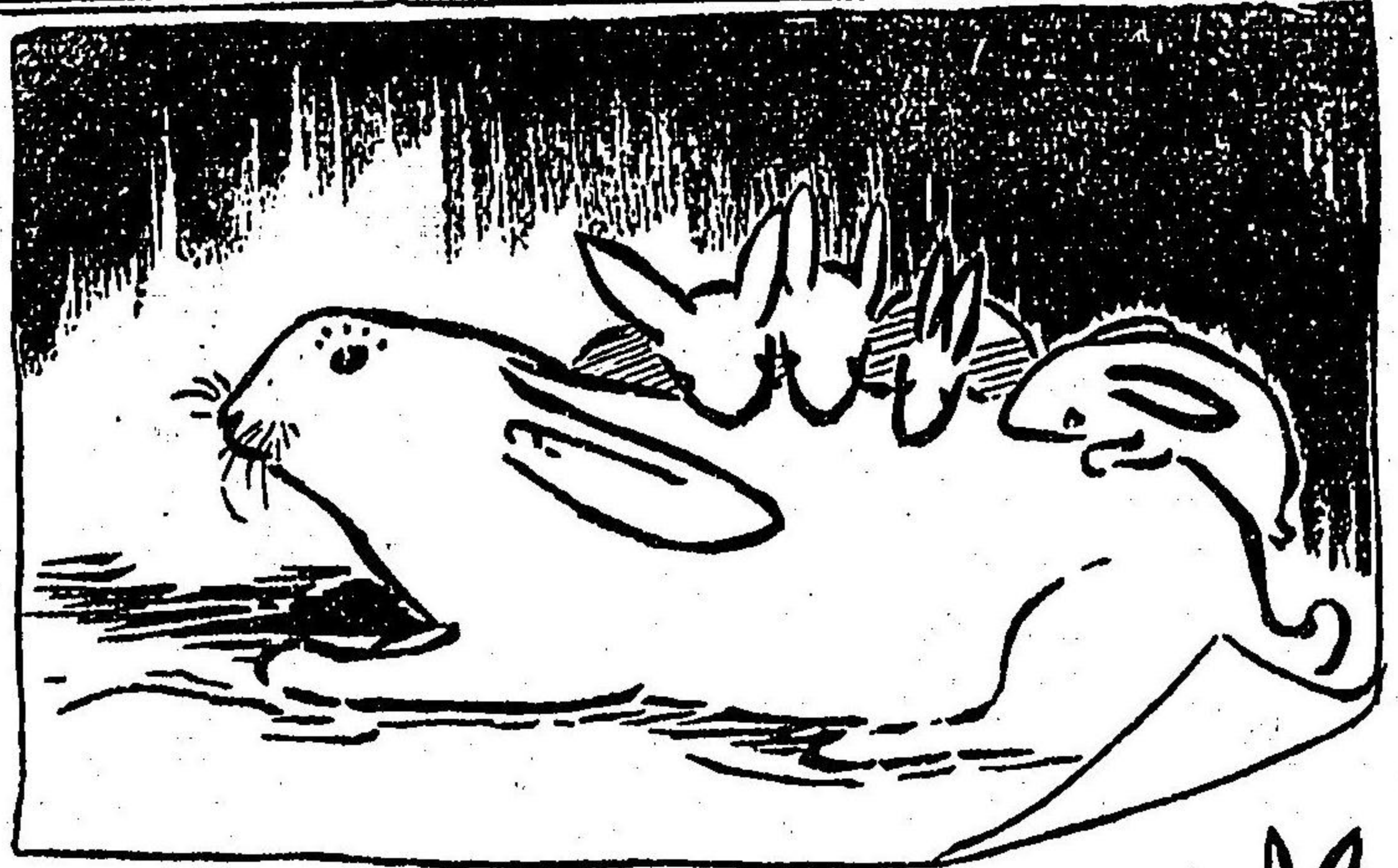
圖八十二第



五八

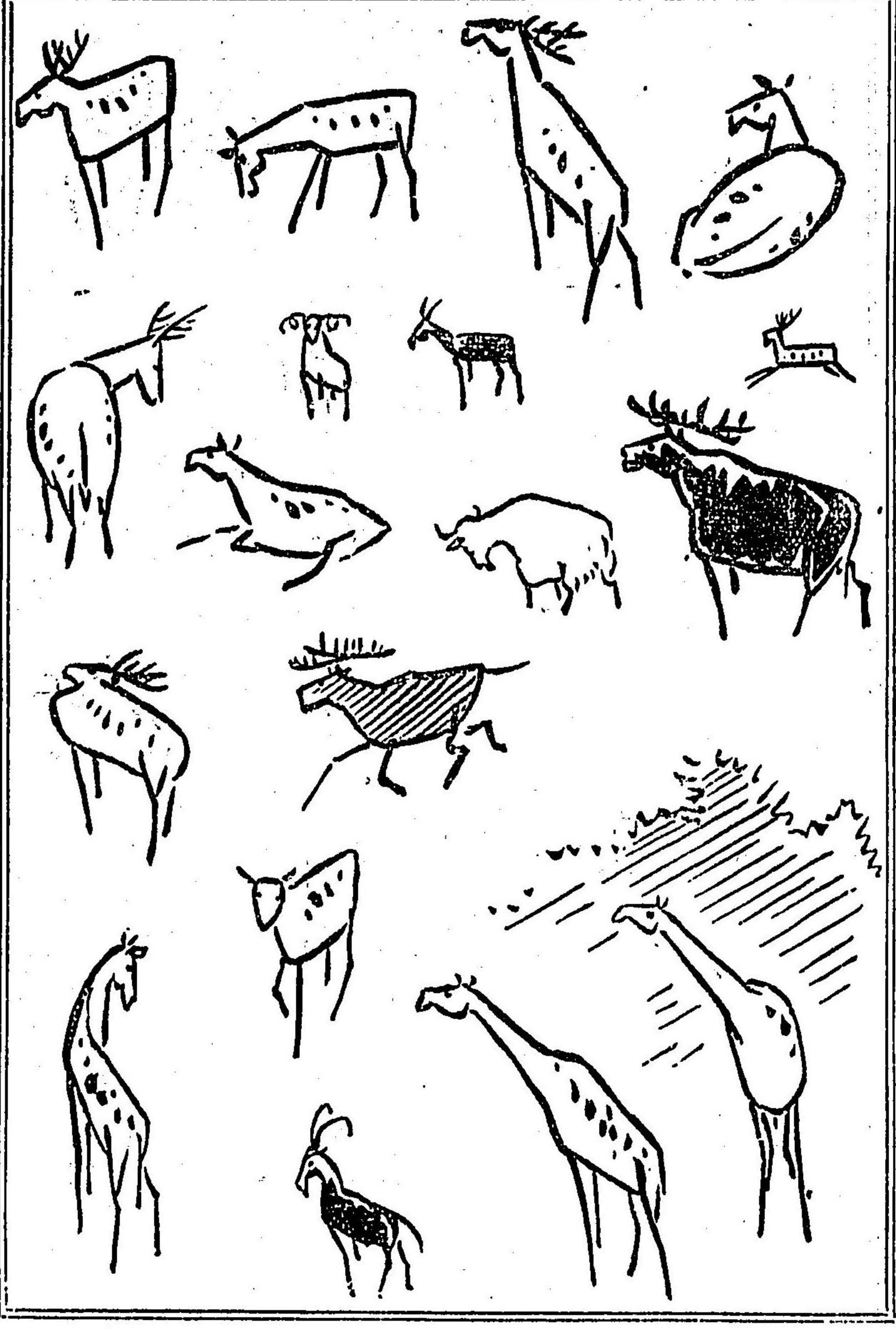


圖一十三第



第二編 略 圖 註

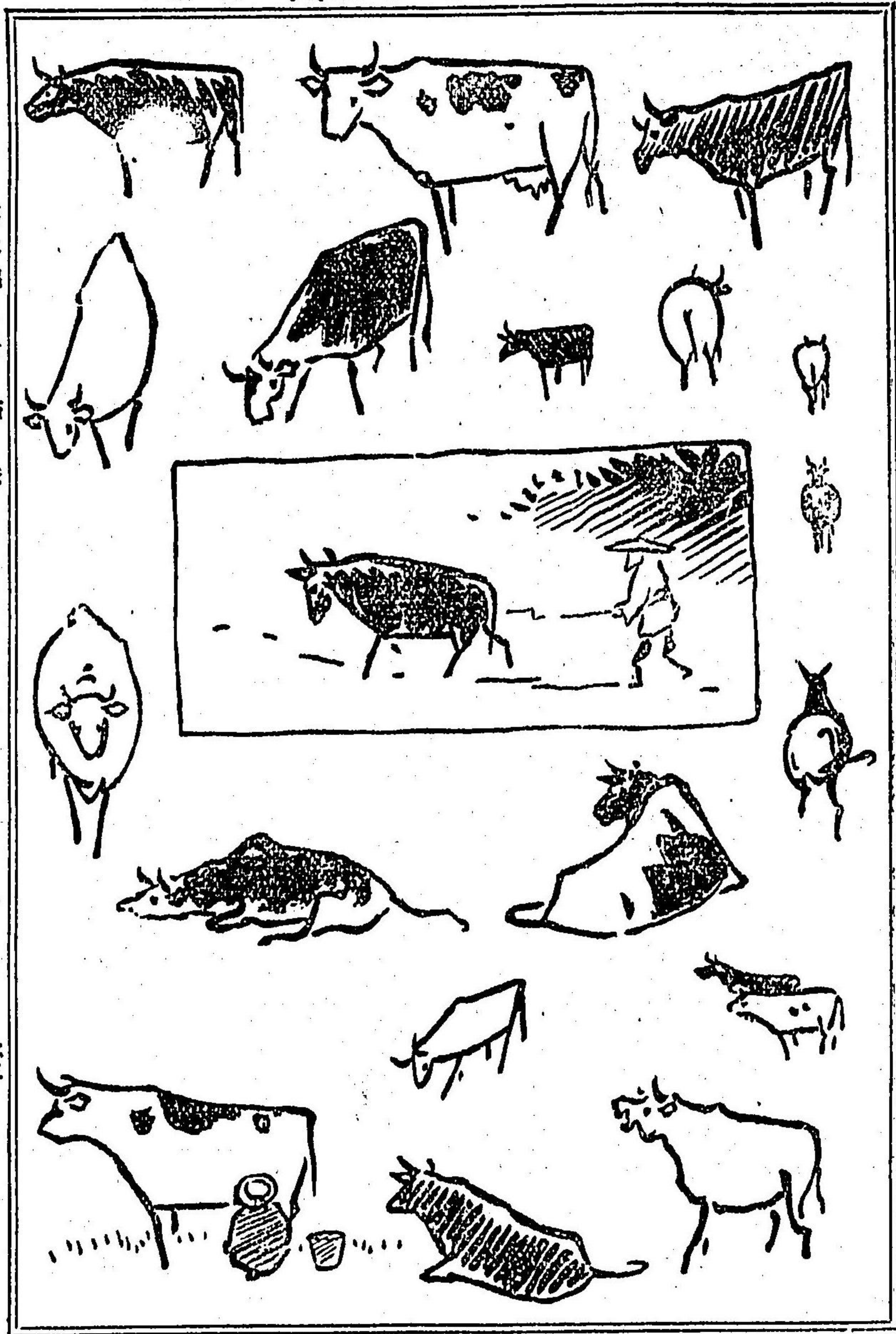
圖十三第



10



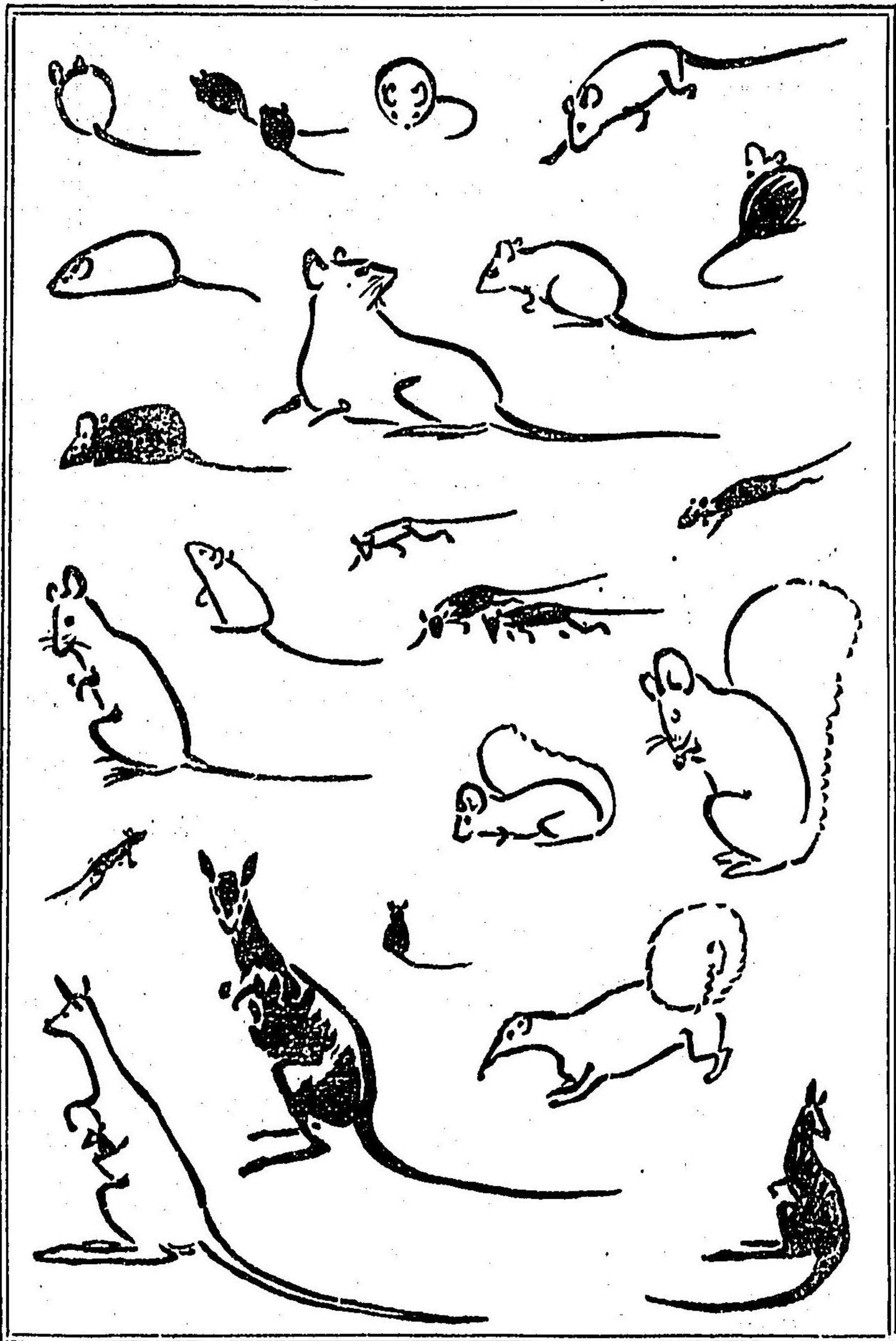
圖三十三第



第二編 略 畫 法

六三

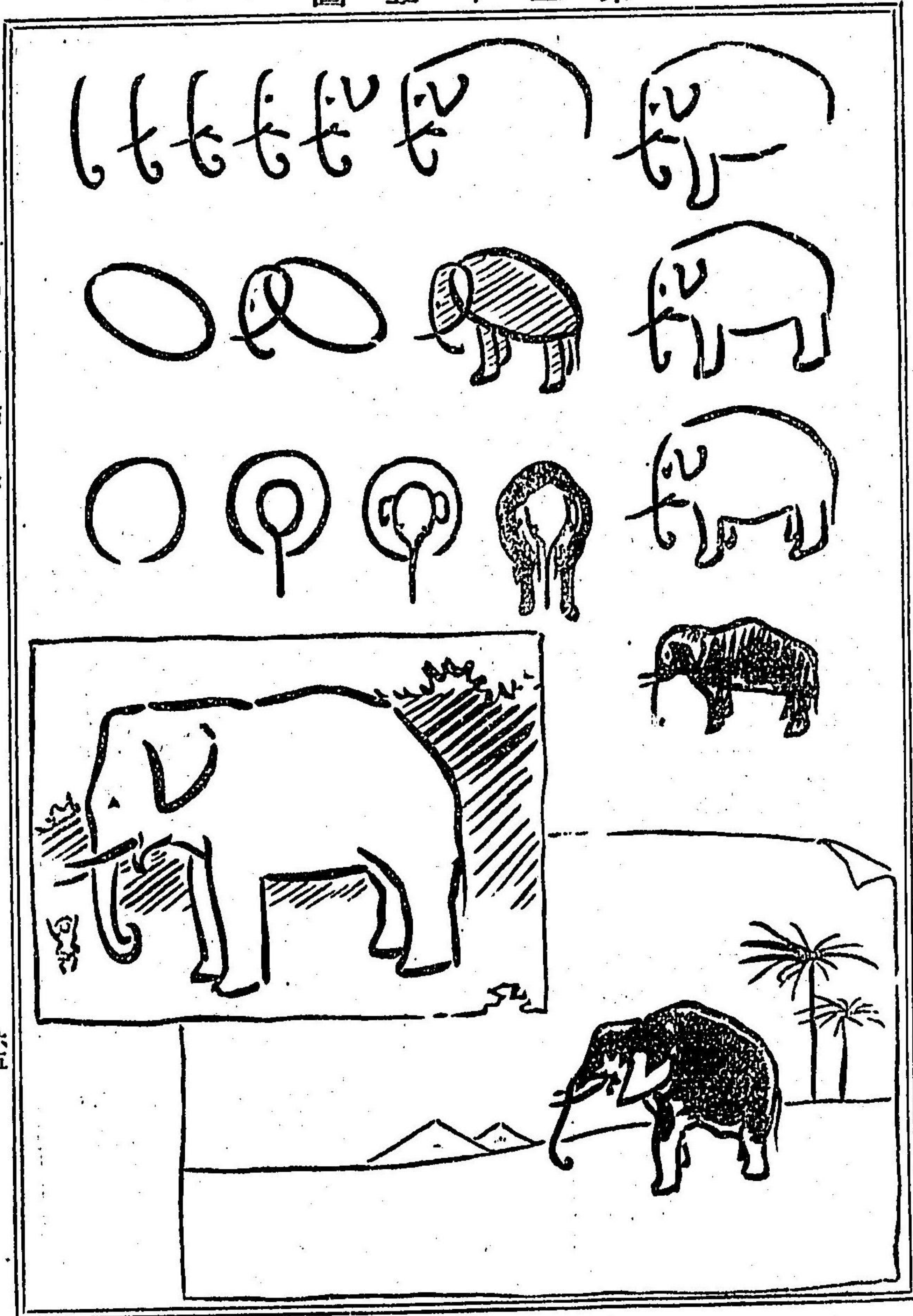
圖二十三第



六三



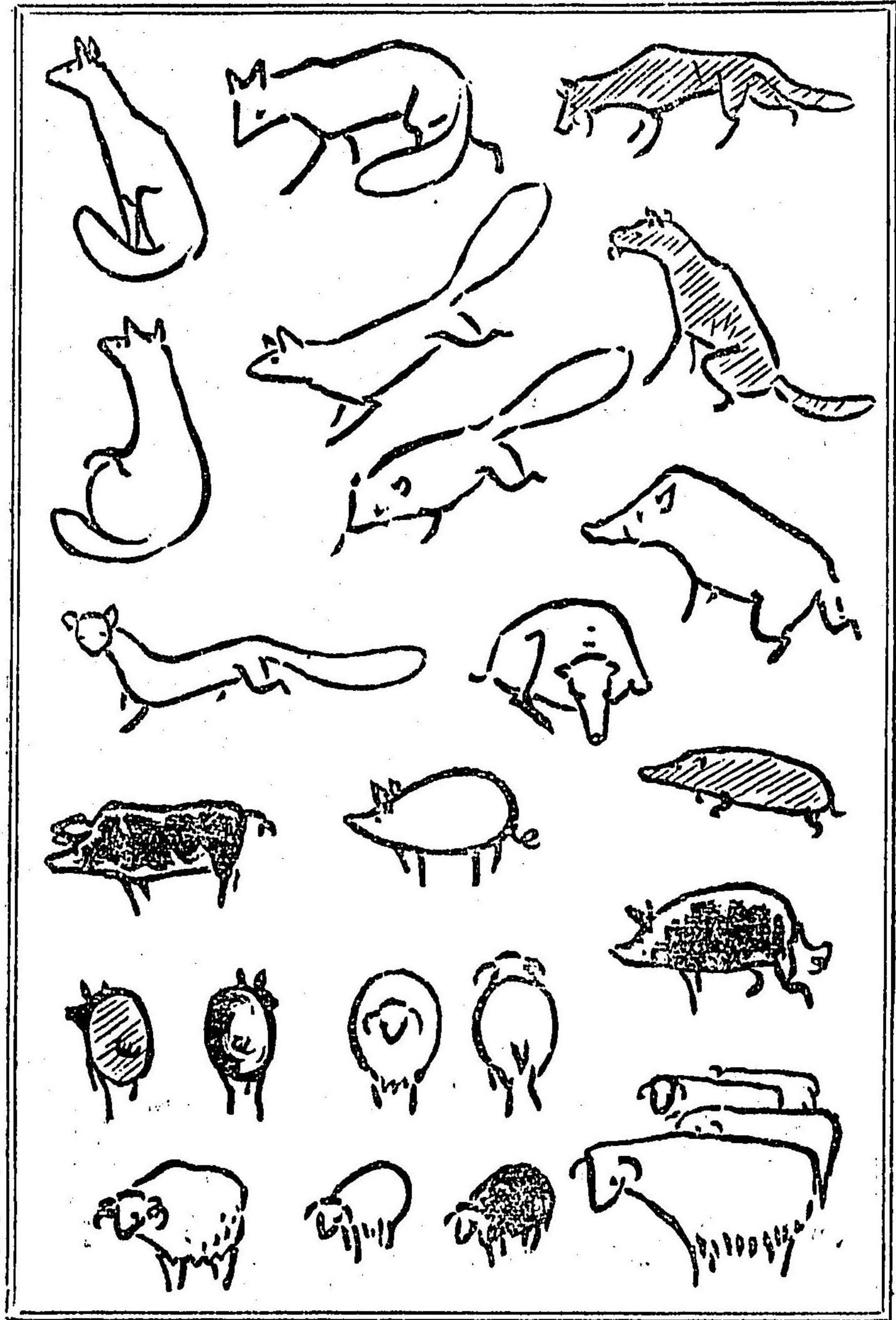
圖五十三第



第二編 略 圖 法

六五

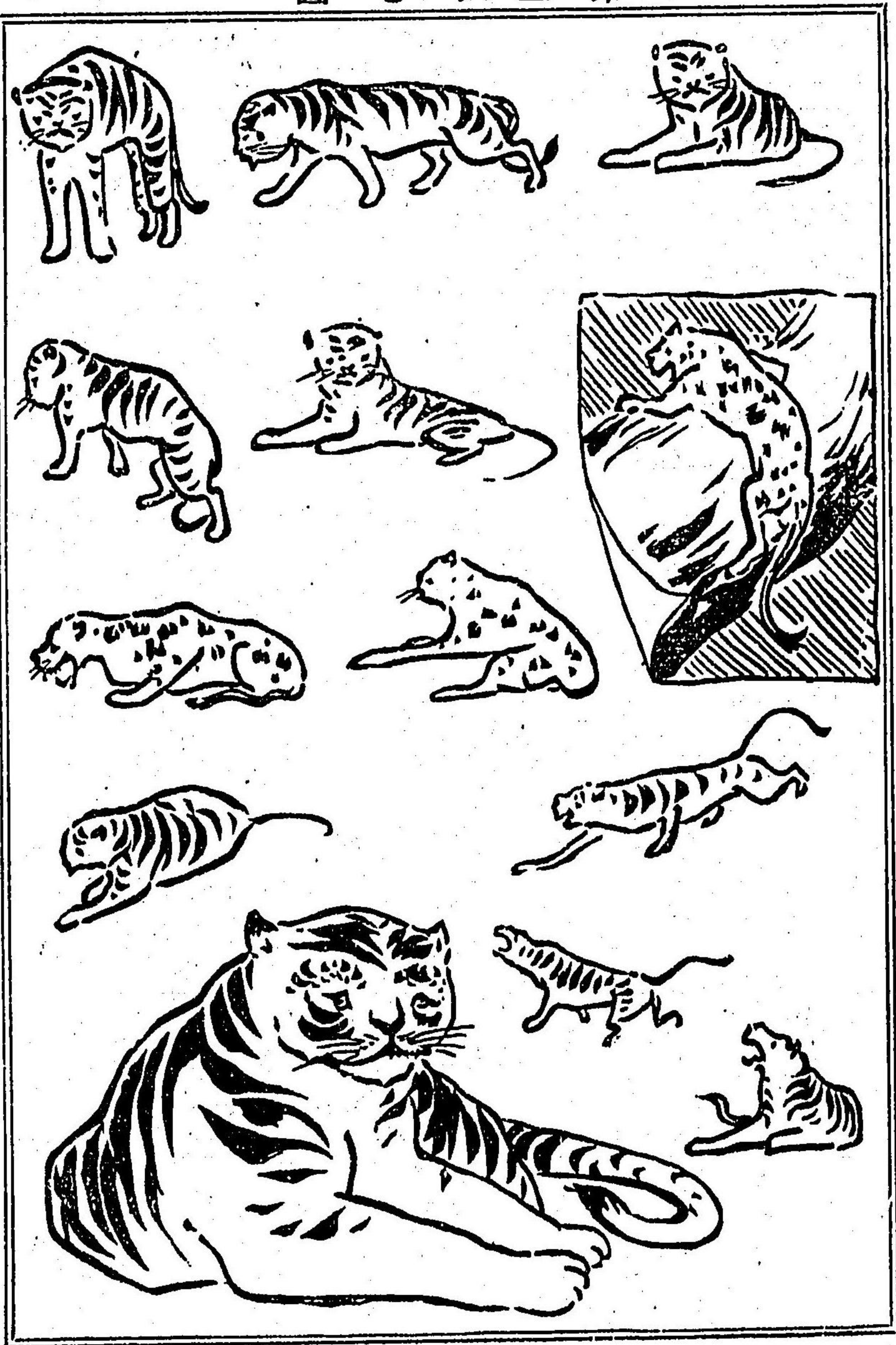
圖四十三第



六四



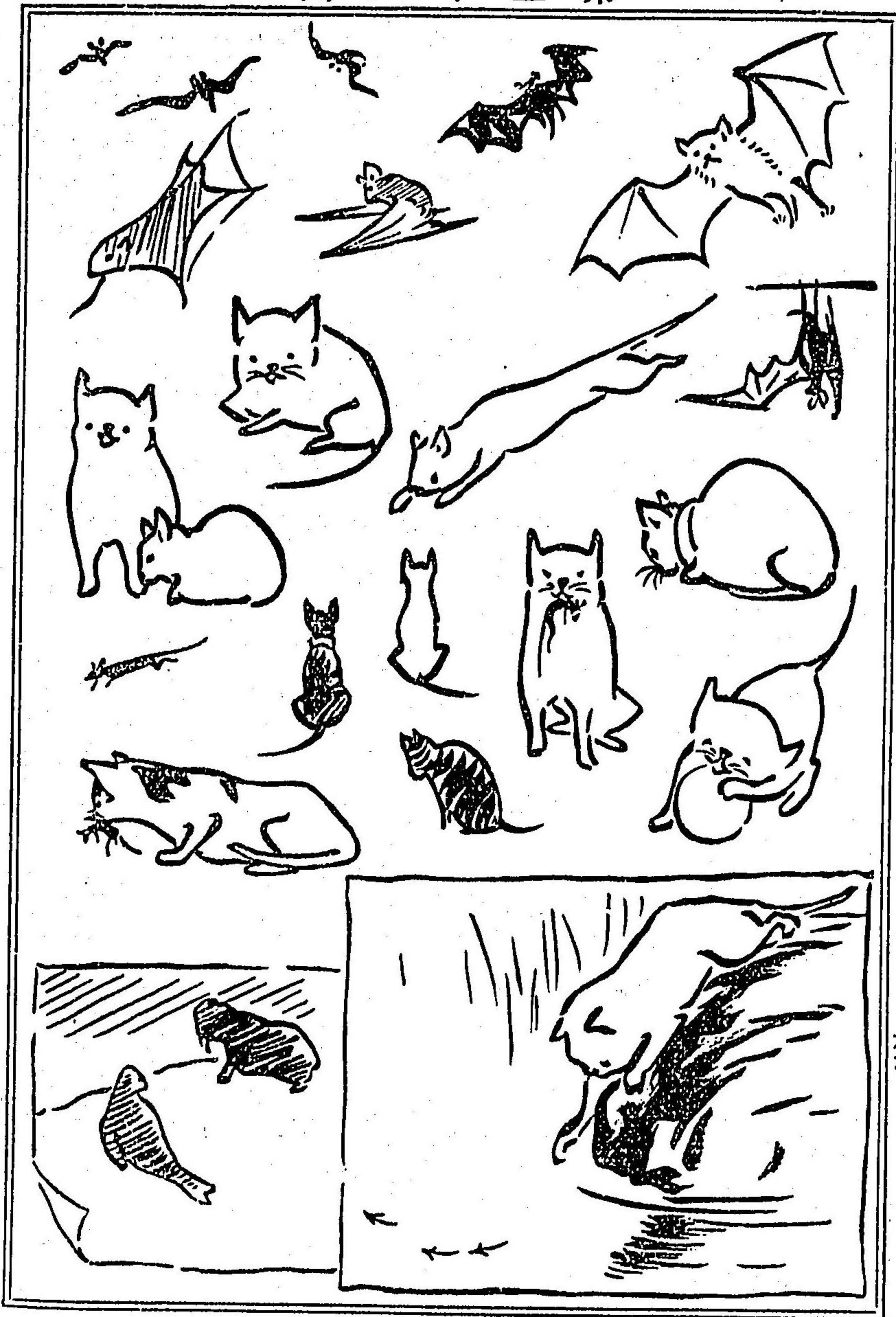
圖七十三第



第二編 略 畫 法

六七

圖六十三第



六八

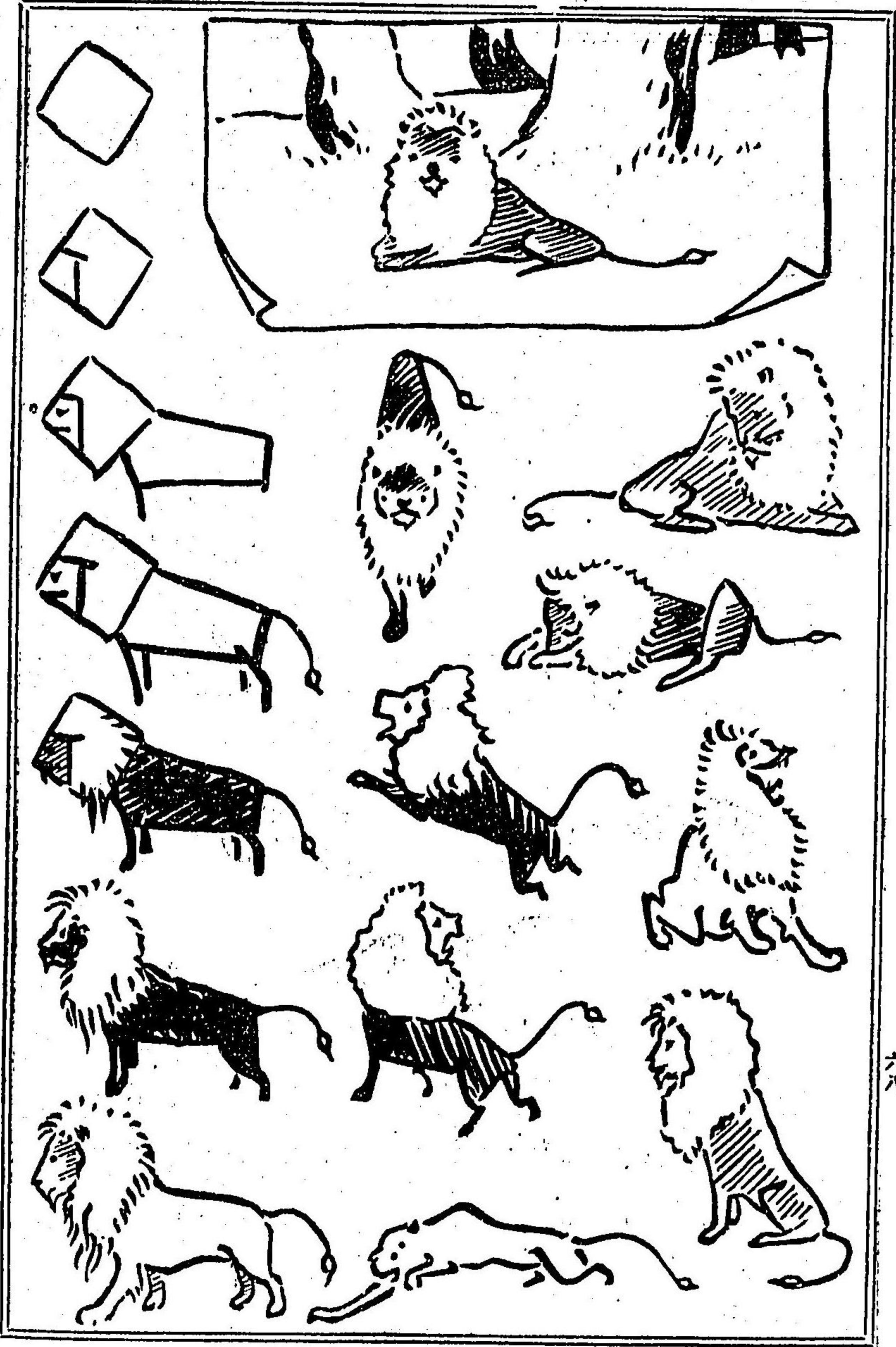


圖九十三第



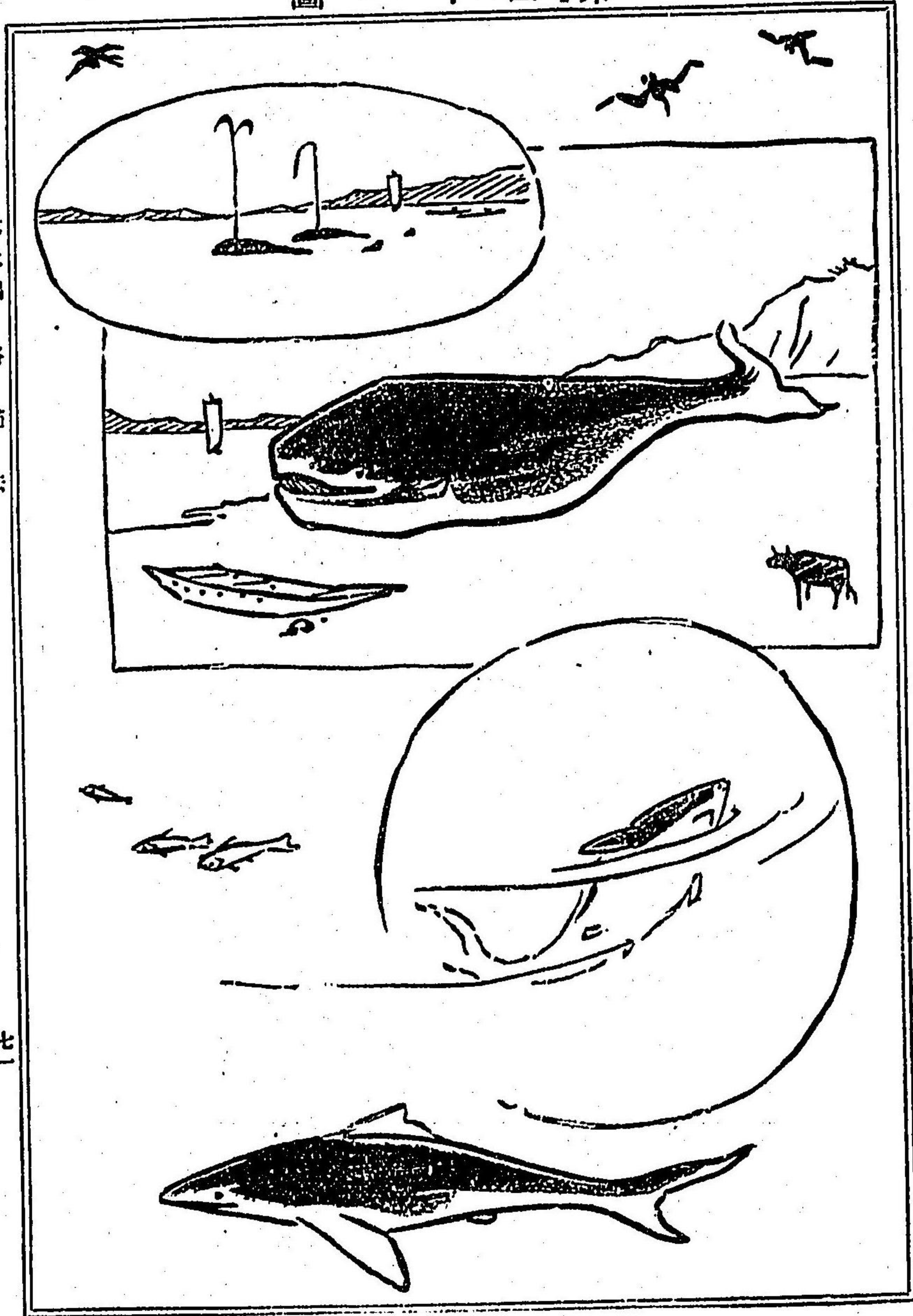
第二編 略 畫 法

圖八十三第





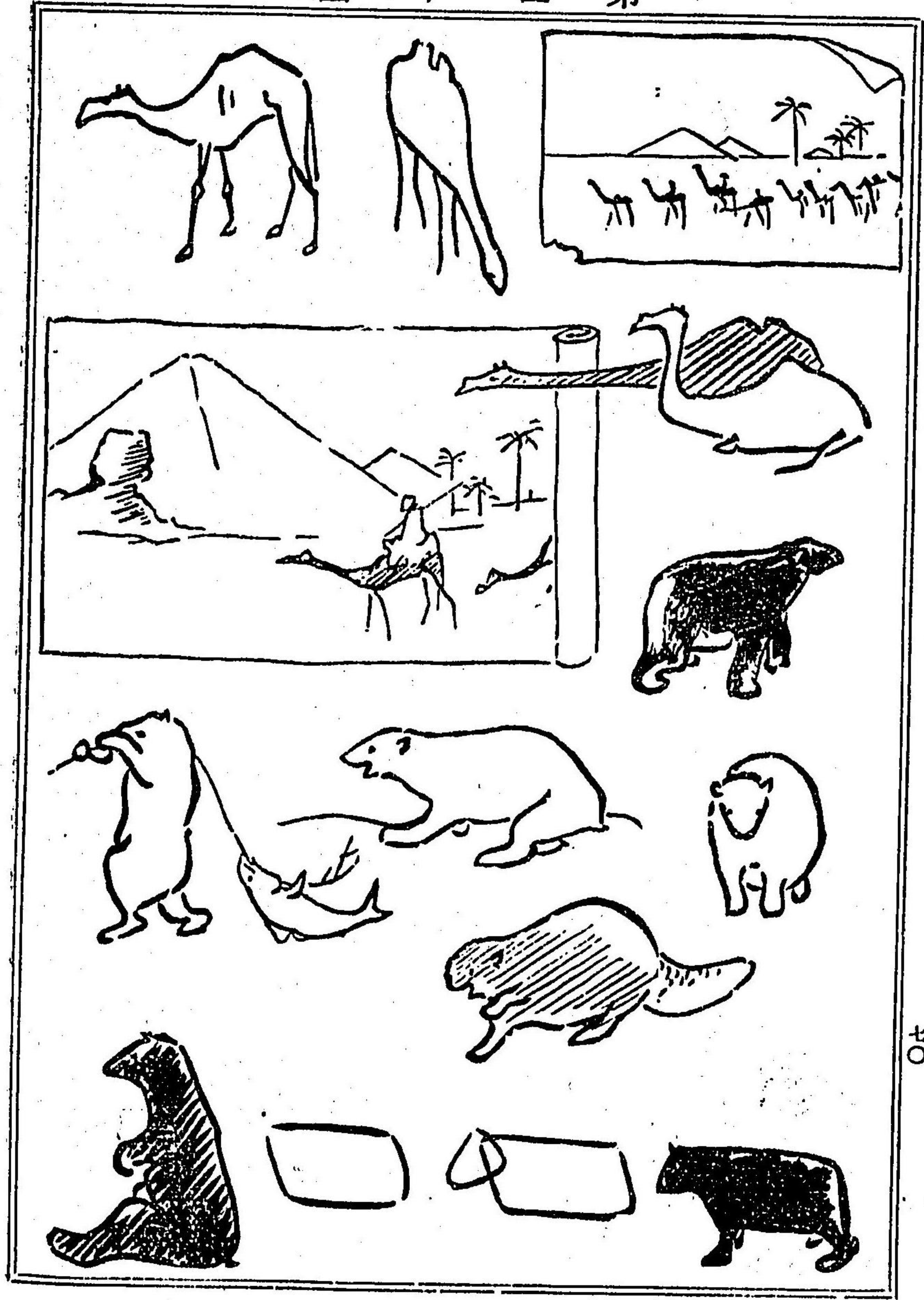
圖一十四第



第二編 略 畫 法

17

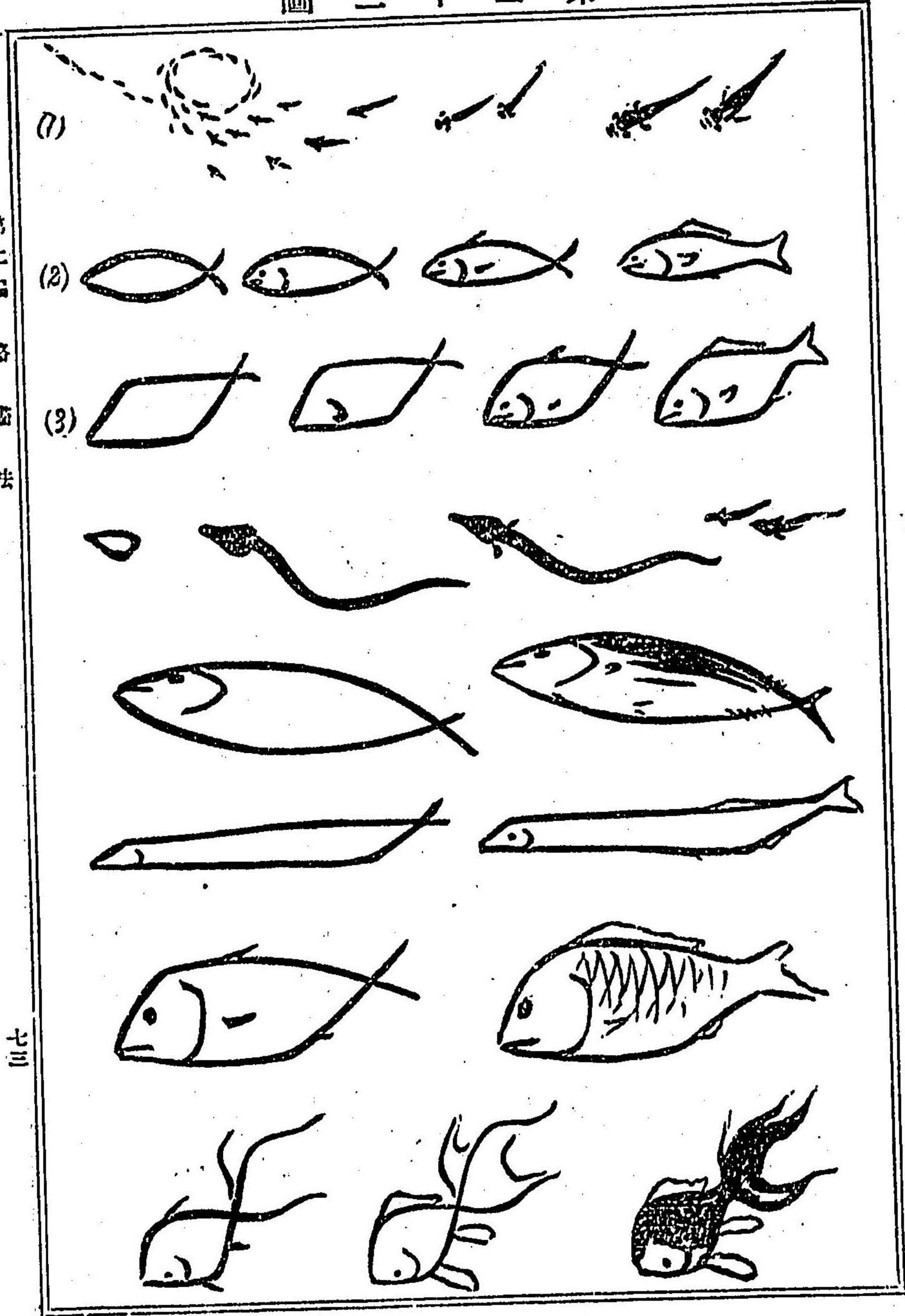
圖十四第



18



圖二十四第



第二編 略 法

三七

第三 魚

第四十二圖

魚類の原型 魚類は其原型として三種を見出だす。第一は線及點より。第二は二邊凸弧形より。第三は菱形よりするのである。鰻の如きは(1)により鱗は(2)により、白魚鯛及金魚は(3)に據つて描く。

第四十三圖

金魚 鯉 鮒 香魚 鱈 鯛 鰻

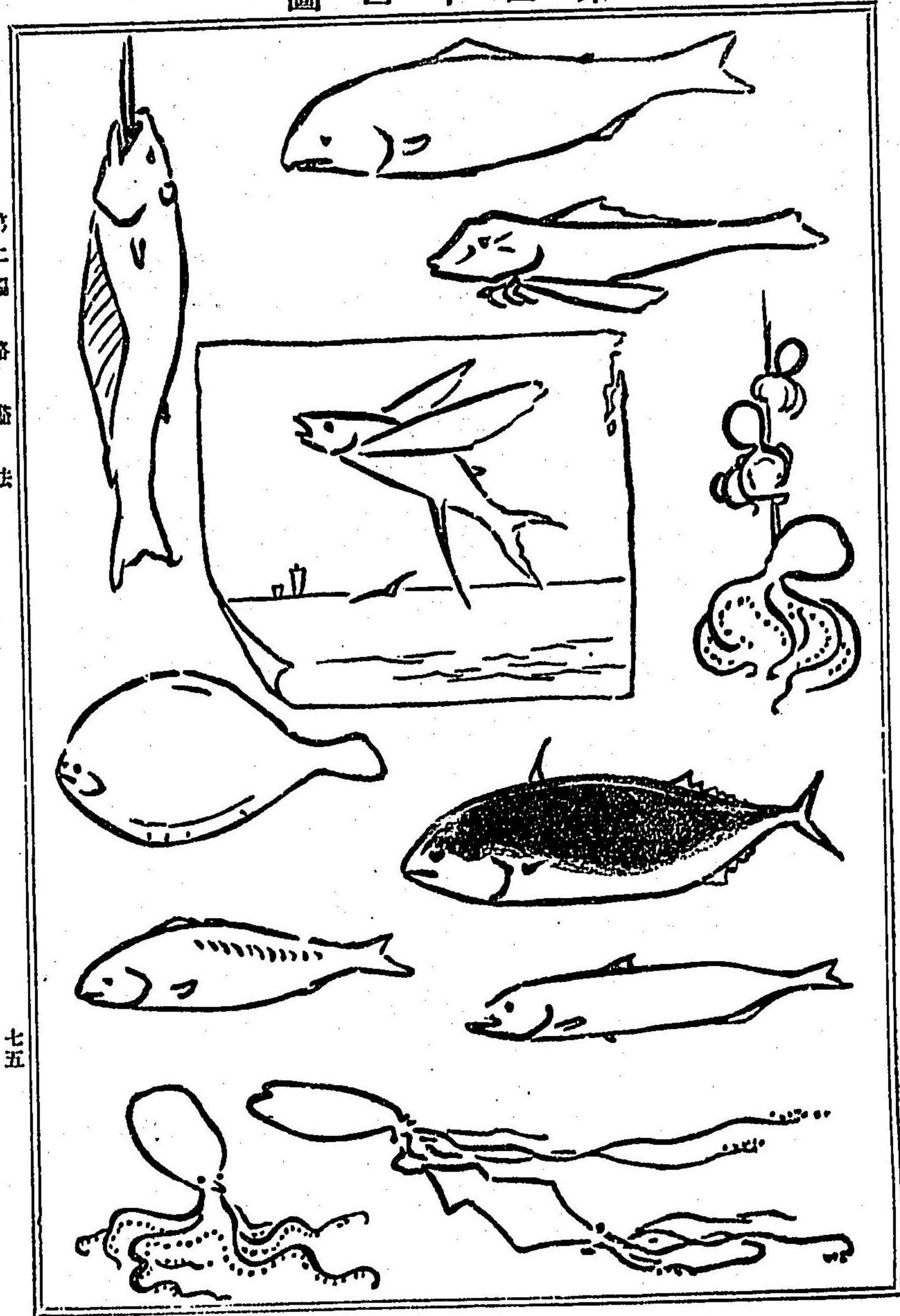
第四十四圖

鮭 ホーボーマグロ 比目魚 飛魚 鱈 鱈 章魚 魚子カ

三七



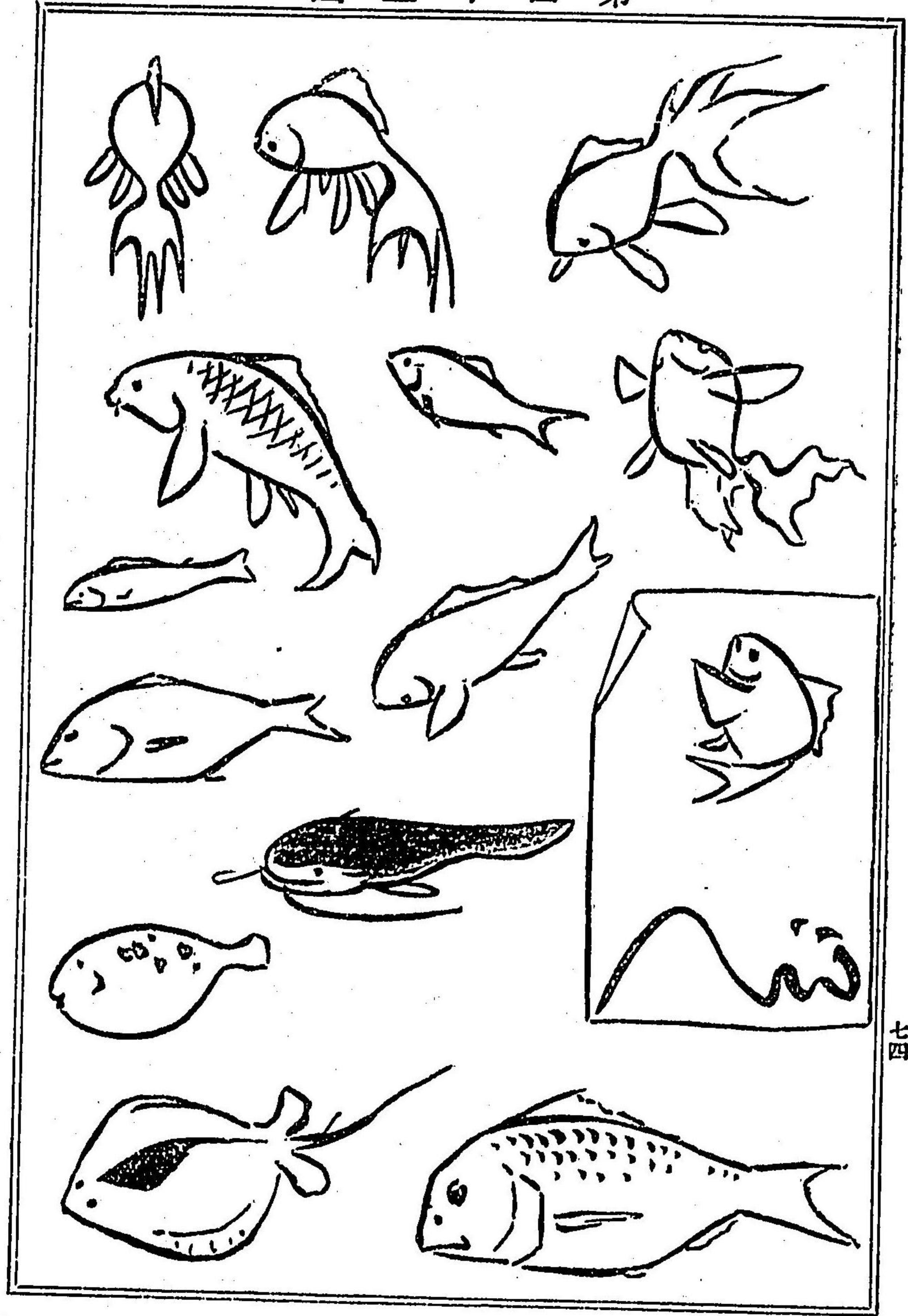
圖四十四第



第二編 魚 法

七五

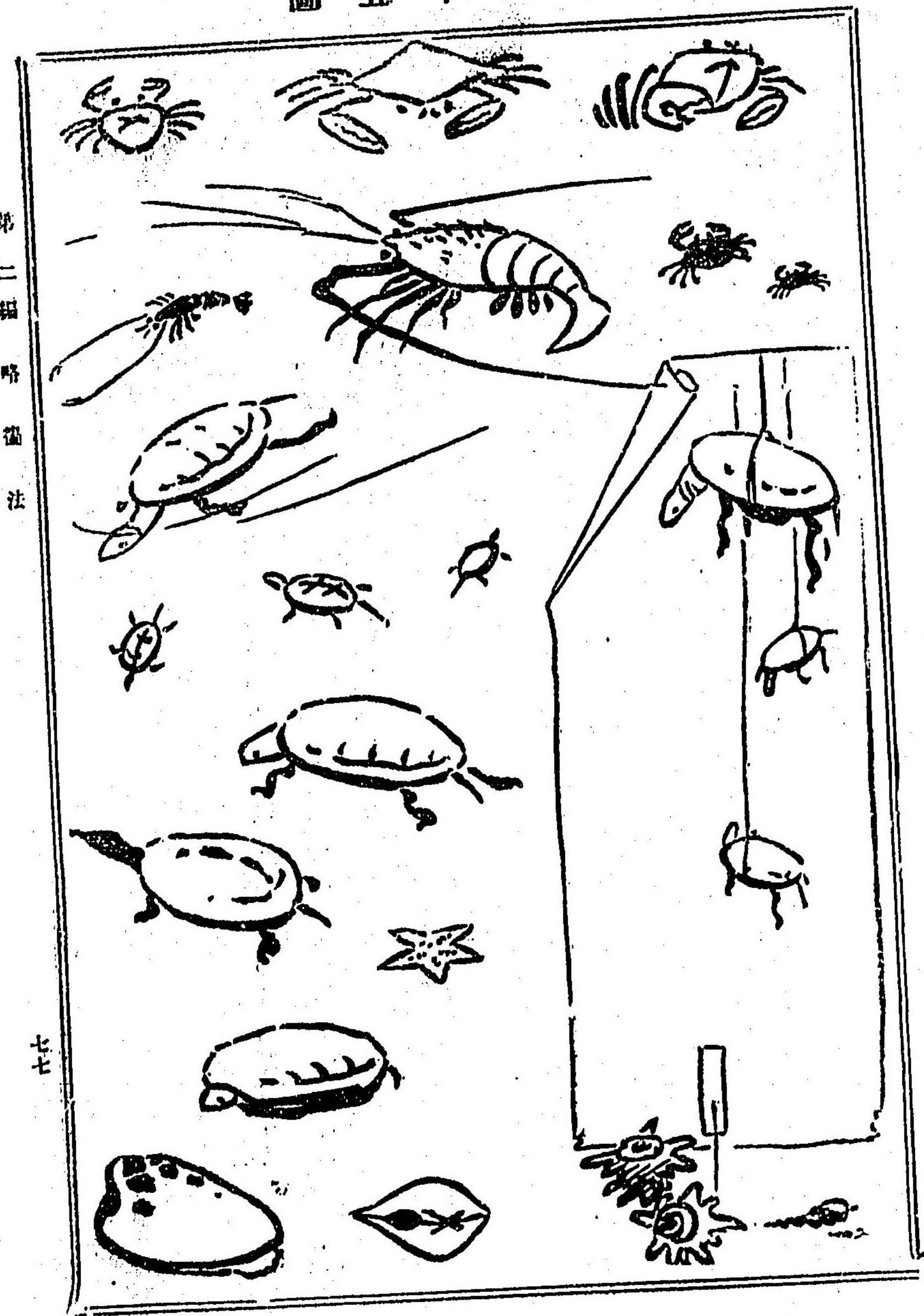
圖三十四第



七四



第四十五圖



第二編 略 法

七七

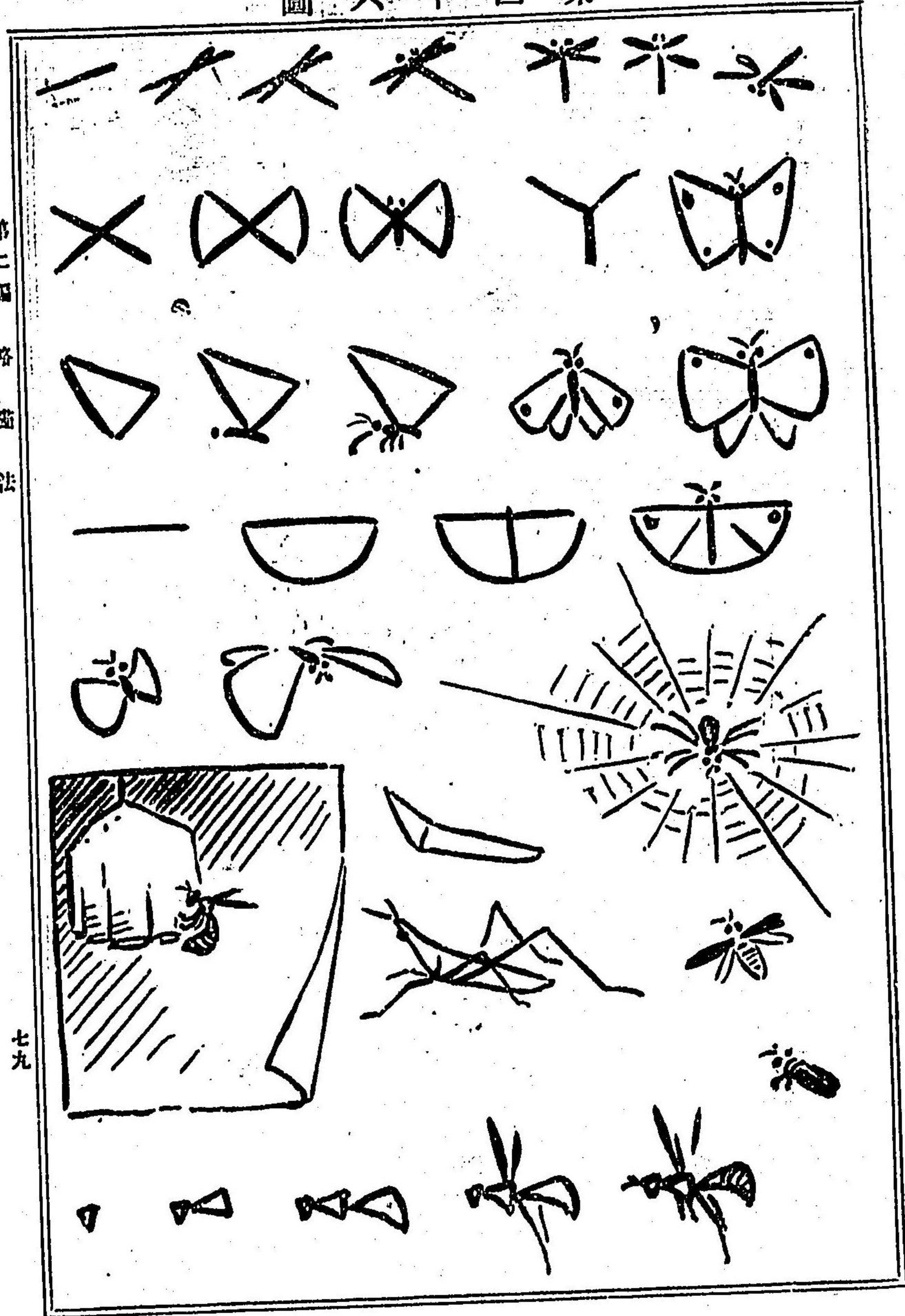
第四十五圖

介甲類 此種は、其形を概括すべきものを見出だすことが出来ないから、其各個につき出来得る限りの減筆を試みたばかりである。

七六



第四十六圖



第二編 略・描法

七九

第四 蟲

第四十六圖

蟲類 此種も亦原型を定むることの出来ないのであるから、唯出来得る範圍で、略筆を試みたに過ぎないのである。若し強て基本形を見出ださうと思ふならば、數多の部分に別つの繁を學ばねばならない。

第四十七圖

蟬・甲蟲・螳螂・蝸牛・イモリ・ヤモリ・鱒魚・蛇・蟻・蠶

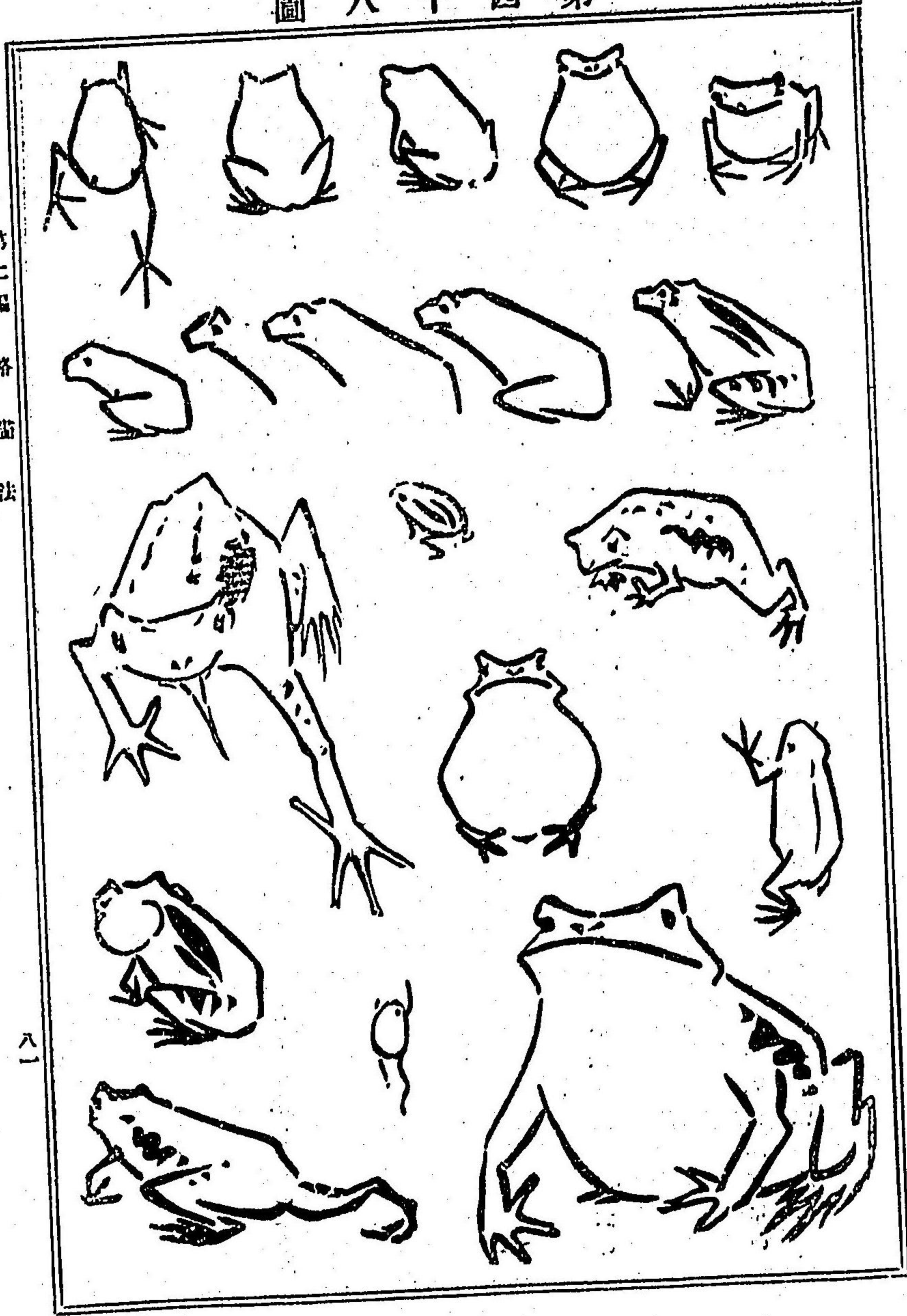
第四十八圖

蛙・雨蛙・ヒキ

七八

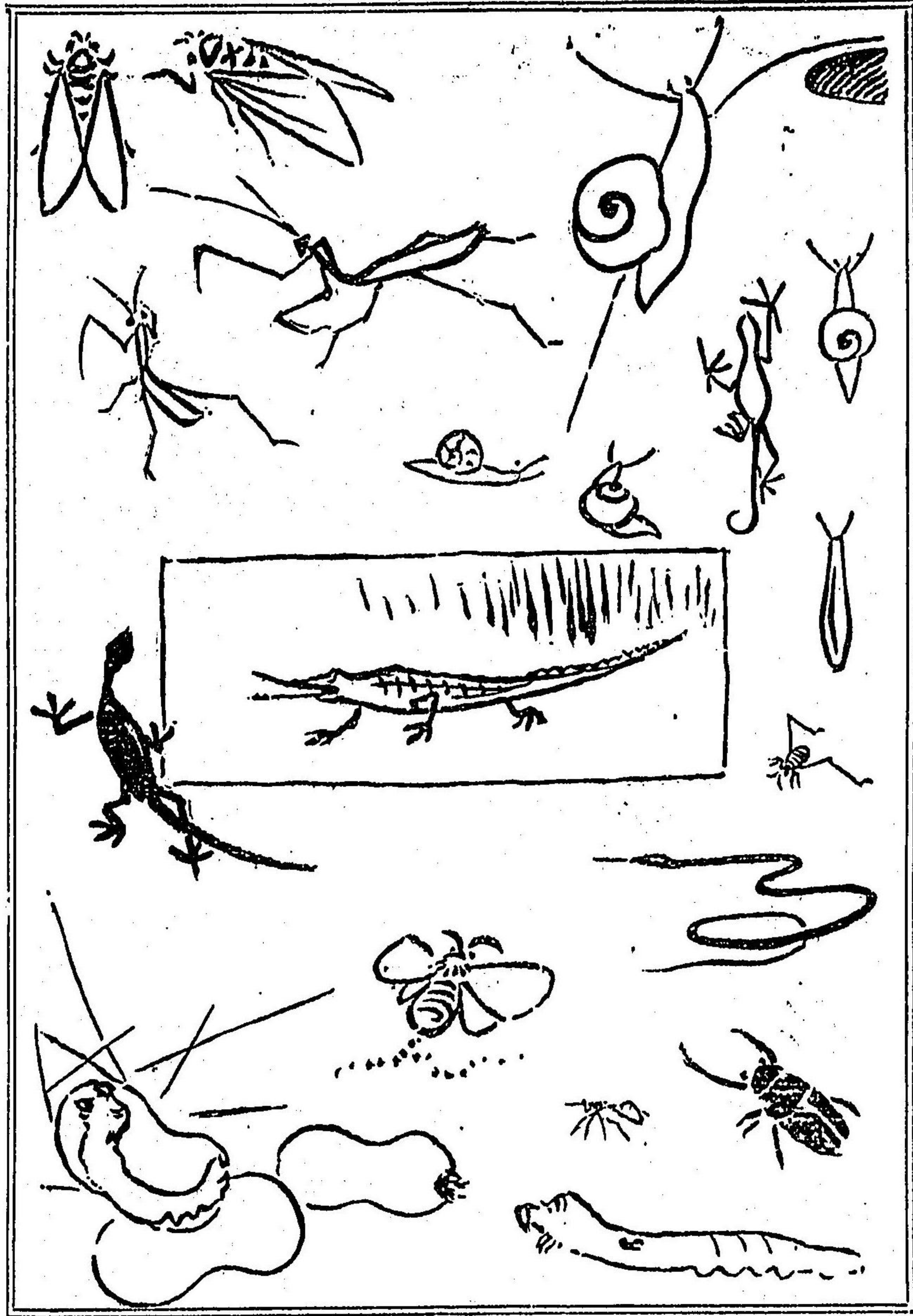


圖八十四第



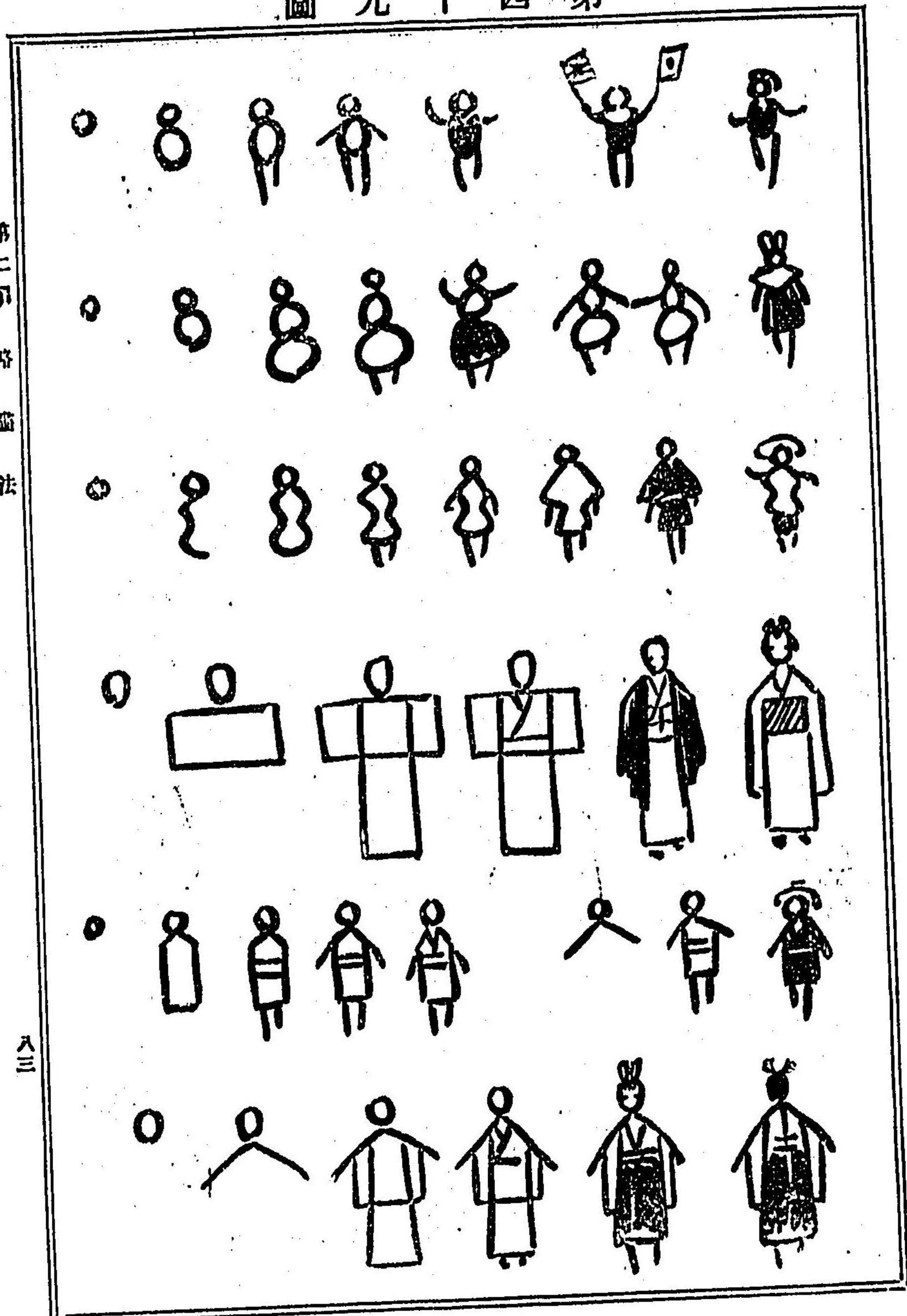
第二編 略 畫 法

圖七十四第





第 四 十 九 圖



第二頁 寫 法

八三

第五 人

第 四 十 九 圖

人 物 (其 一) 正 面 及 背 面 向 幼 兒 及 び 和 裝 人 物 の 構 成 と 其 順 序 と を 示 し た の で 其

冗 餘 は 消 し 去 る か 又 は 塗 抹 す る の が よ い。

注 意 人 物 の 身 長 及 び 其 部 分 の 割 合 は 大 要 此 れ を 次 の 如 く 定 む。

一 幼 兒 の 身 長 は 顔 の 約 四 倍。

二 兒 童 は 約 五 倍 乃 至 六 倍。

三 大 人 は 約 七 倍 乃 至 八 九 倍 と す。

第 五 十 圖

人 物 (其 二) 正 面 及 背 面 向 重 に 洋 裝 男 女 の 構 成 及 其 描 畫 順 序 を 示 し 和 裝 男 女 の

背 面 の 姿 を 交 えて あ る。

第 五 十 一 圖

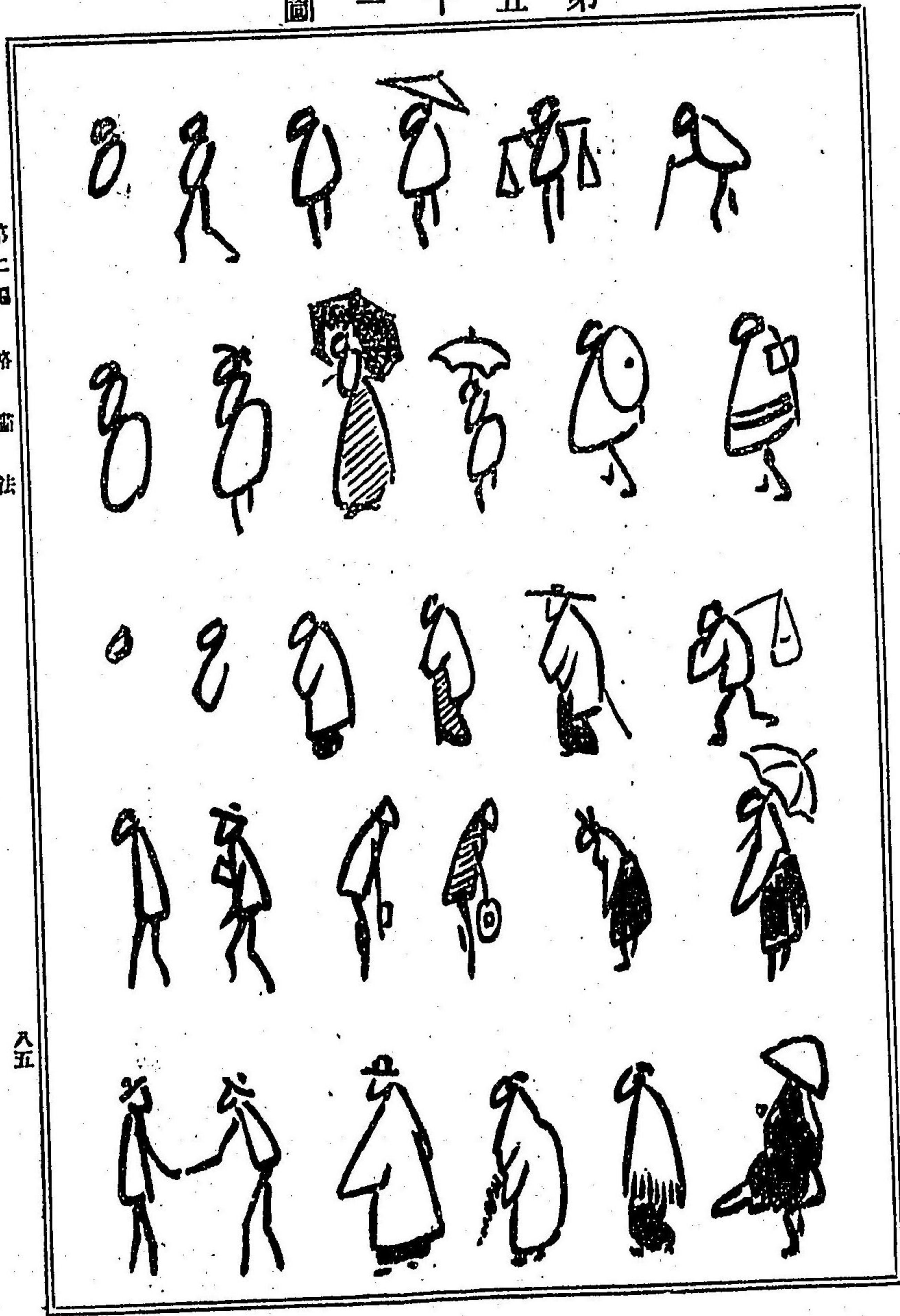
人 物 (其 三) 側 面 向 本 圖 は 側 面 向 に あ る 單 簡 な 人 物 を 唯 雜 然 と 集 め た に 過 ぎ な い

の だ る が 學 ぶ 人 は 此 れ に 依 て 各 種 の 服 裝 に あ る 人 物 が 種 々 の 動 作 に 従 ぶ 有 様 を 想 像 し 描 畫 す る こ と を 試 む る が よ い。

八二



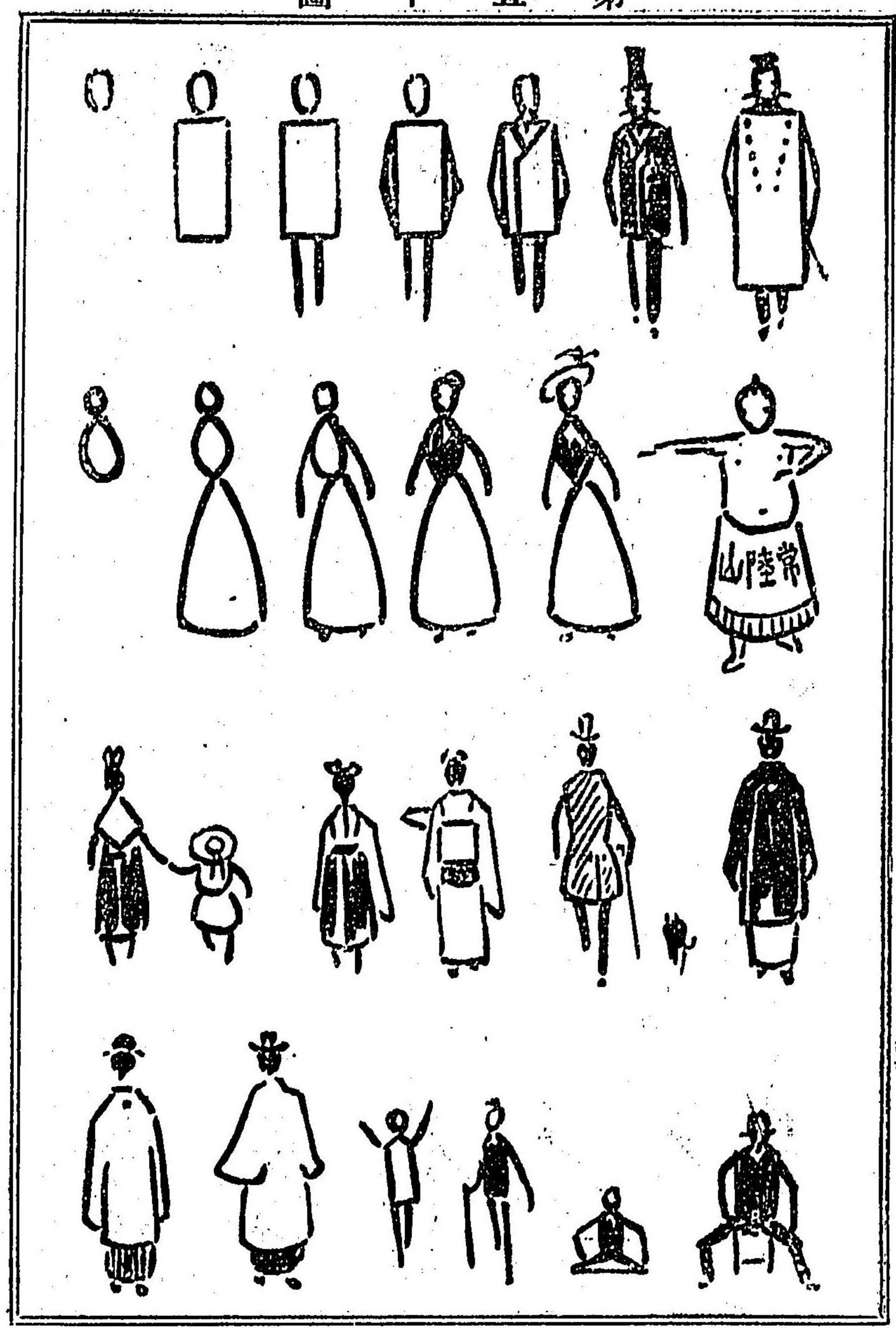
圖一十五第



第二種 略 畫 法

八五

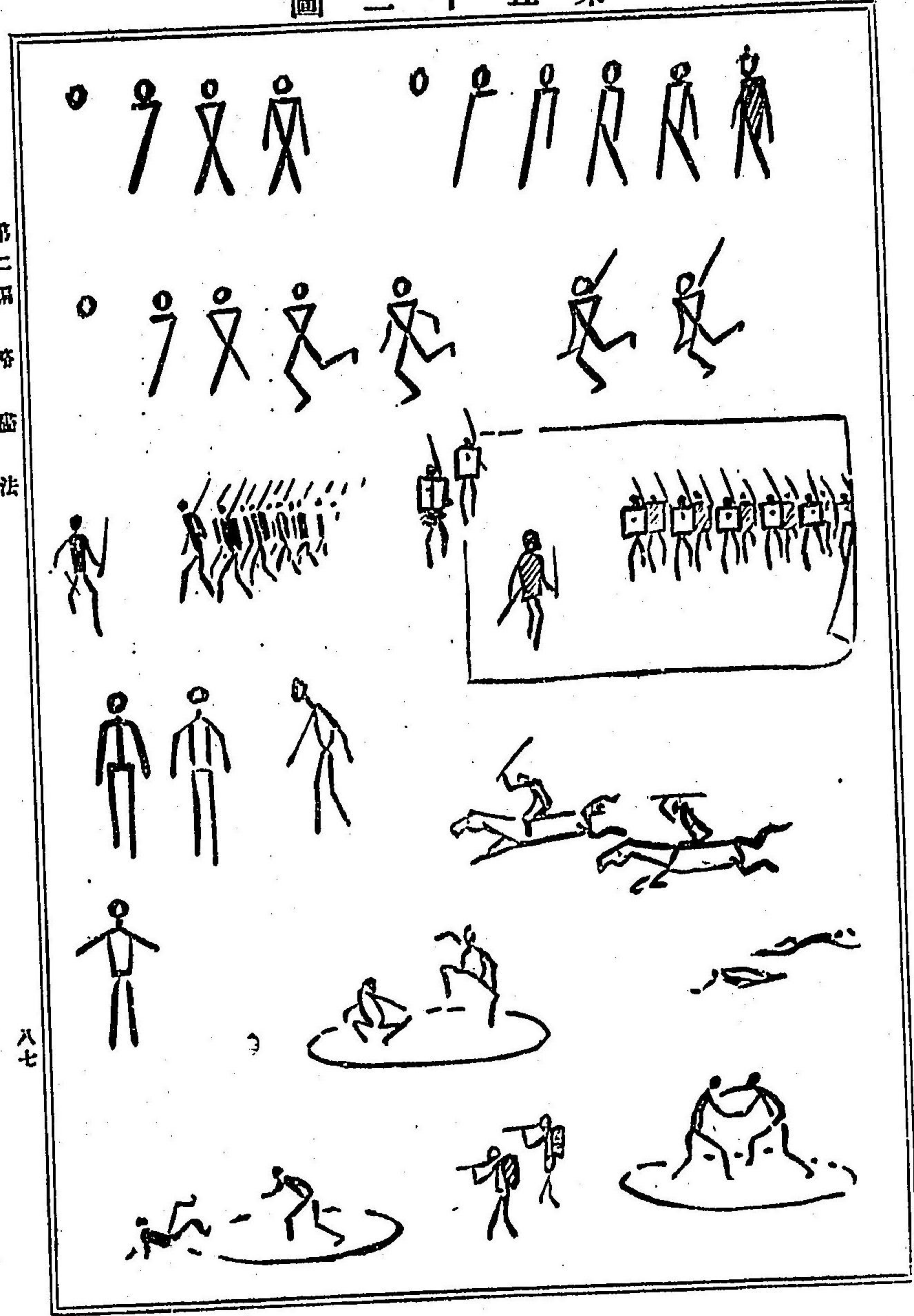
圖十五第



八四



第五十二圖



第二編 略 畫 法

八七

第五十二圖

人物(其四) 最略畫式。これは、洋裝男子の最略畫、若しくは裸體に適用すべきもので、實に人物の原型なのである。それで、此原型を自分が、要する姿態に描き、これに肉を添えて、力士とし、若しくは衣を纏はせ、甲冑を被らせて、所要の人物畫を得るのである。

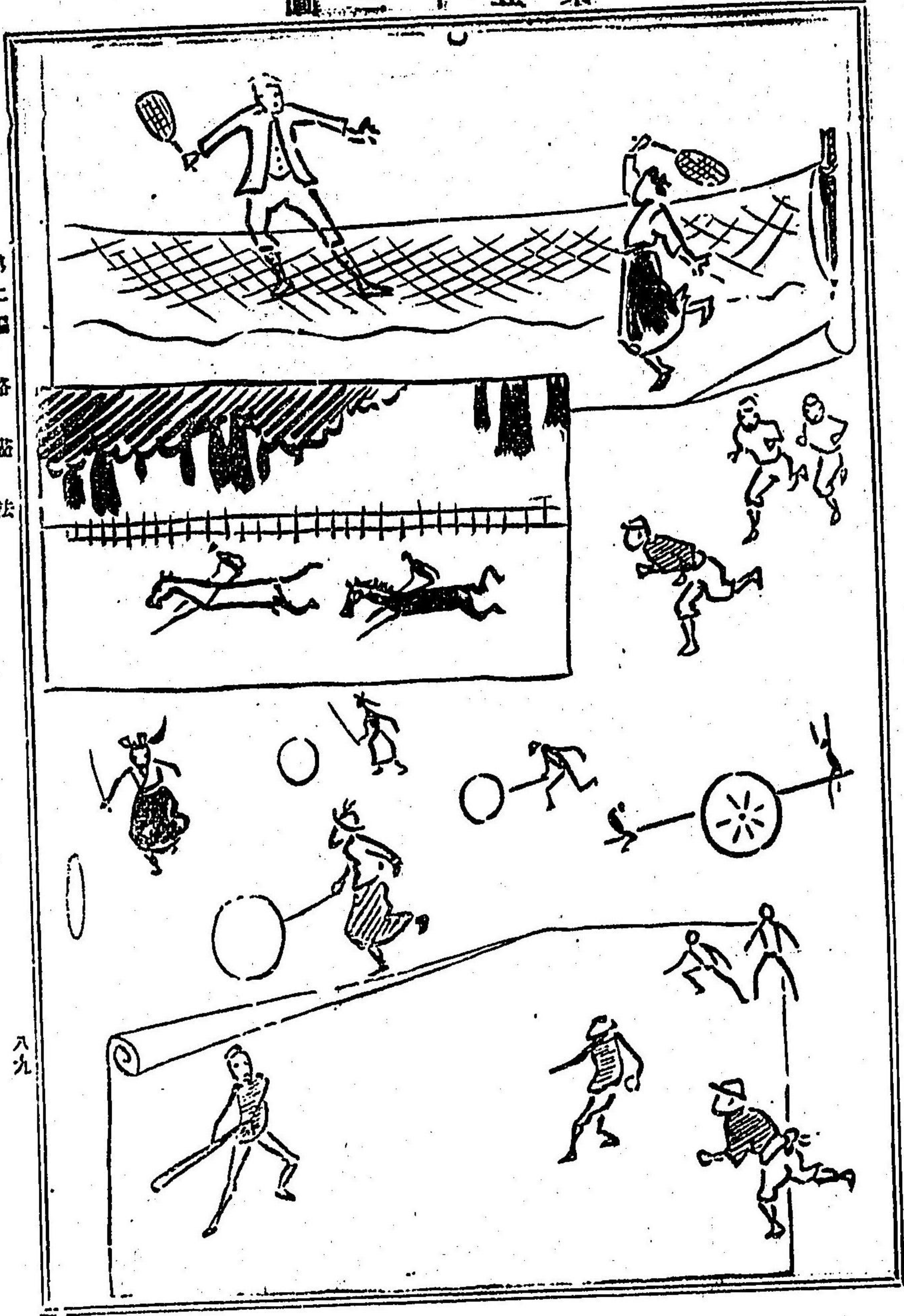
此畫式は、人物の集合せる場合、又は活動せる状態を描く場合に、最も便利なので、即運動會の有様とか、遊戯體操等の有様とか、街路雜沓の光景とかを、描くに極めて簡便な様式である。

人物は、其最も遠距離にあるものは、點を以て表はし、漸次近づくに從ひて、其縦線を増し、次に頭と胴とを區分し、次に脚部を認め、最後に手を見るのである。顔面に、就きてのことは、第六十圖を參看すればよい。

八六



圖三十五第



第二編 略 法

八九

古今の雛及神武推古藤原戰國德川時代の人物。

- 第五十三圖 人物(其五)
- 第五十四圖 人物(其六)
- 第五十五圖 人物(其七)
- 第五十六圖 人物(其八)
- 第五十七圖 人物(其九)
- 第五十八圖 人物(其十)
- 第五十九圖 人物(其十二)







圖七十五第



第二編 略 畫 法

九三

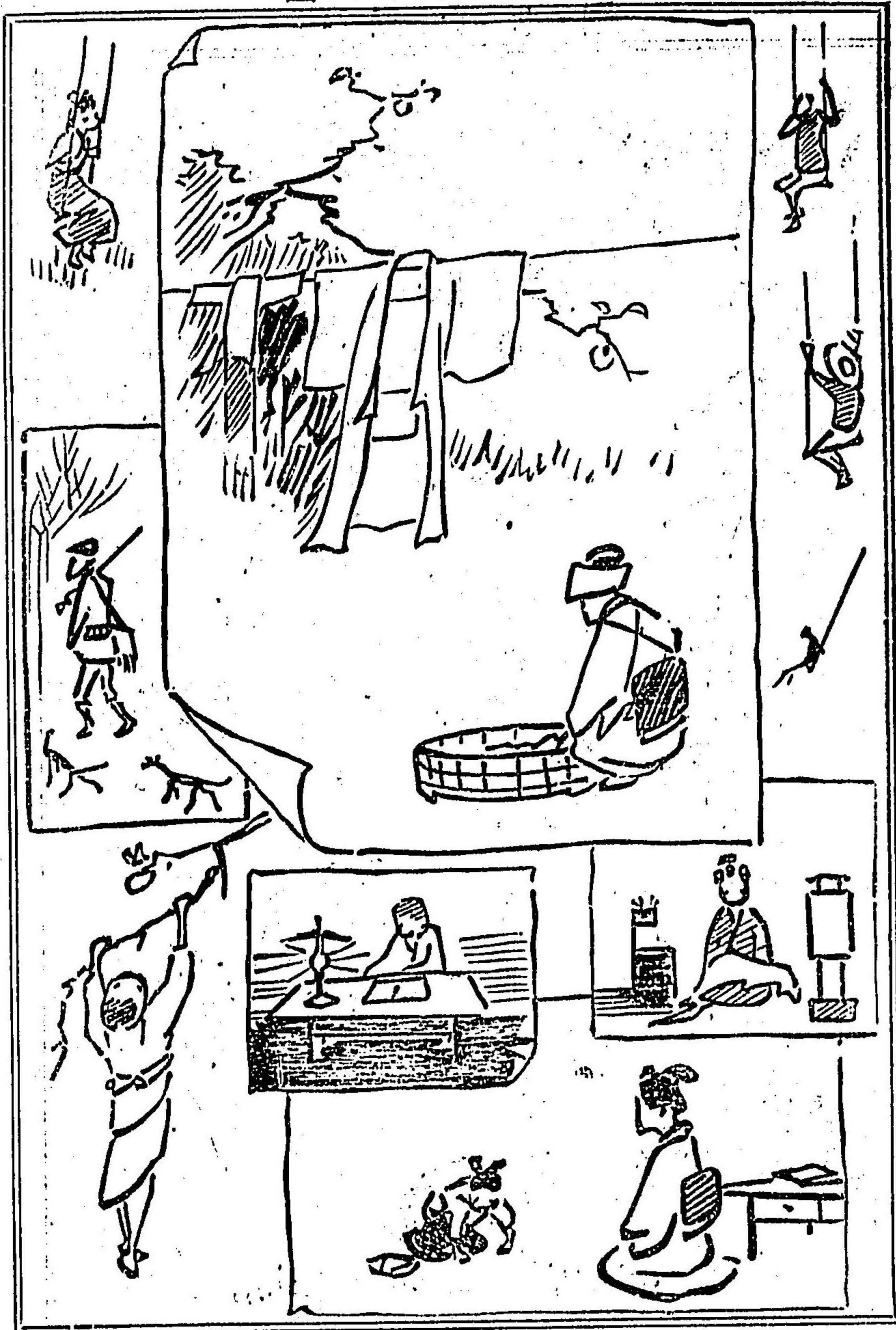
圖六十五第



九二

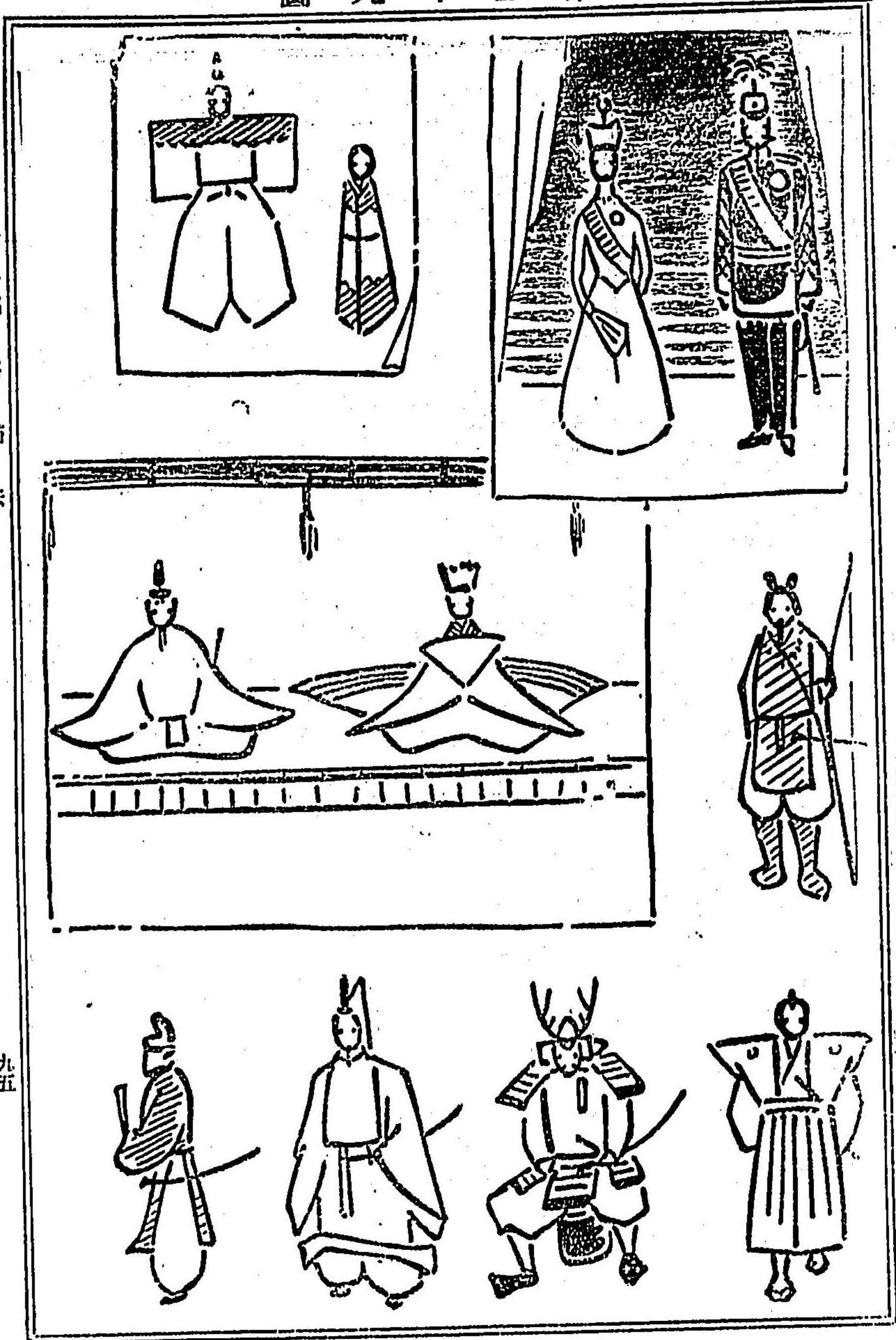


圖八十五第



九四

圖九十五第

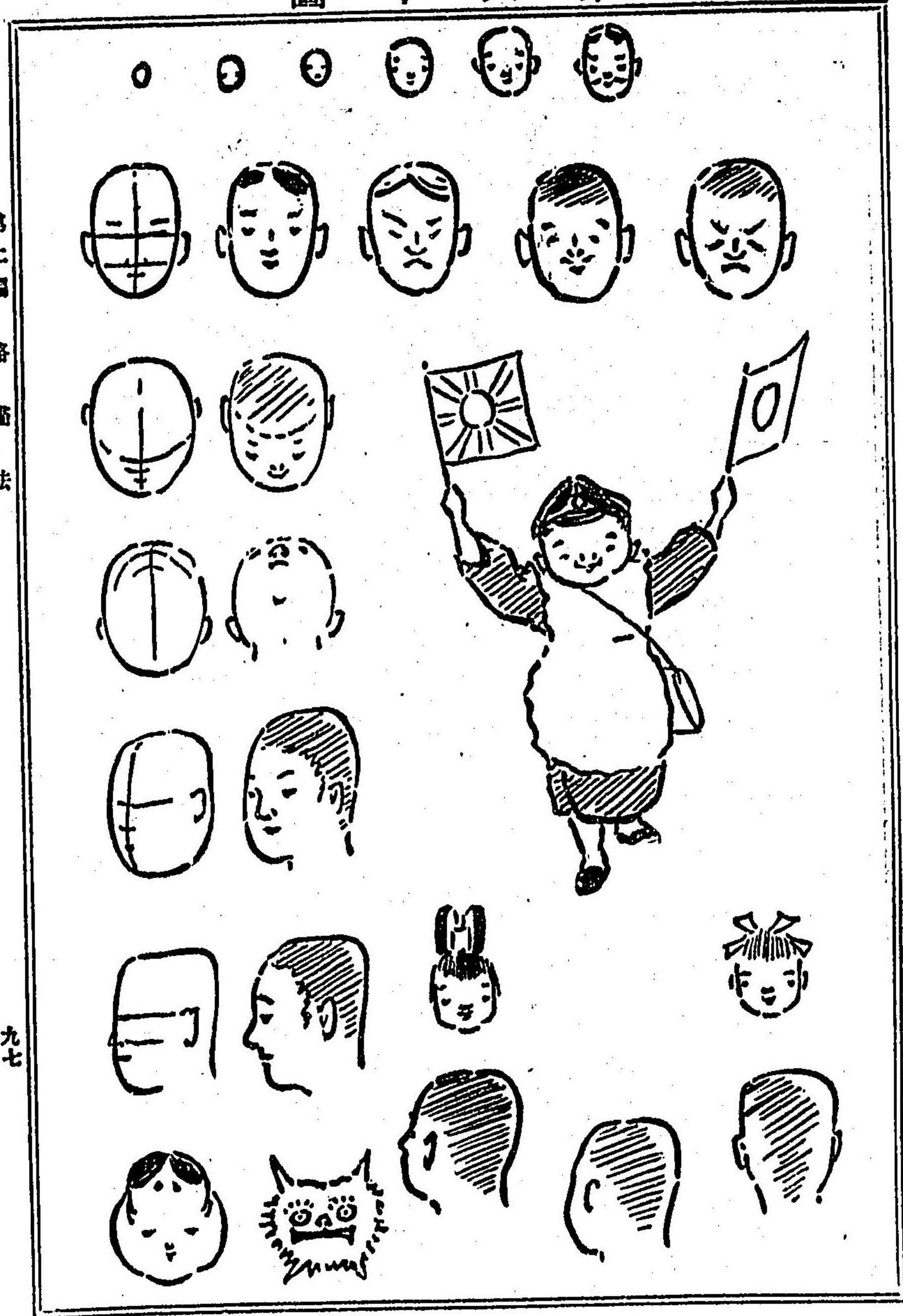


第二編 略 描 法

九五



第六十圖



第六十圖

人物(其十二) 顔の描き方 愛らしき、兒童の顔は、兩眼の間を廣くして、口と鼻に鼻に近よらしめ、老人は兩眼を鼻に近づけ、口を遠ざけ、額に二三の横皺を描き加ふるのである。

顔を描くには、鼻口右眼左眼眉輪廓耳の順序による。

遠き人物及小さき畧畫式人物の顔は、全く白くし、漸次近づくか、大きくなるに従ひ、眼と口との三點を、次に鼻眉又は髭を認むるのである。



第六十一圖



第二編 時 畫 法

九八

第六十一圖

人<sup>〇</sup>物<sup>〇</sup>(其十三) 男<sup>〇</sup> 兒<sup>〇</sup> 凡そ、畫は、或る一圖を學習したならば、之れを種々と變化して、練習することが、必要である。本圖は、其例を示し、且又稍複雑なる畫の略じ方をも、自得せしめやうと言ふ目的である。



圖二十六第



第六十二圖

人物(其十四)女 兒 本圖は前圖と同じ目的で、挿入したので、背面のものは、  
 之れを正面に描き試み、又筆數の多きものは、如何にこれを省略して、塗板畫などに、  
 應用し得るものであるかの例を示したのである。



## 第六 器具

### (附) 濃淡法及描寫法

#### 第六十三圖

器具の描法 兒童若しくは一般人士の爲めに、自分は、單簡なる器具の描法を示したいと云ふ考から、次の三圖式を決定したが、これは態と透視畫法の理を採用しなかつた。其故は、吾々ですらも、兩眼にて近く小器物を視るに、逆も透視畫法の結果を認め得ないのであるから、兒童の爲めにする模本、若しくは看取寫生は、この投影畫的描法に據らしめた方が、平易で、しかも實用には、適切であることを信じてある。

第一圖式(又正面式) 水平に器物の正面若しくは側面を直視したるもの。

第二圖式(又平面式) 垂直に器物を下瞰したるもの。

第三圖式(又傾斜式) 水平若しくは、垂直でなく、斜に器物を視たるもの。

比較的厚さを多く有するもの、又は高さあるものは、第一圖式に據るべきである。

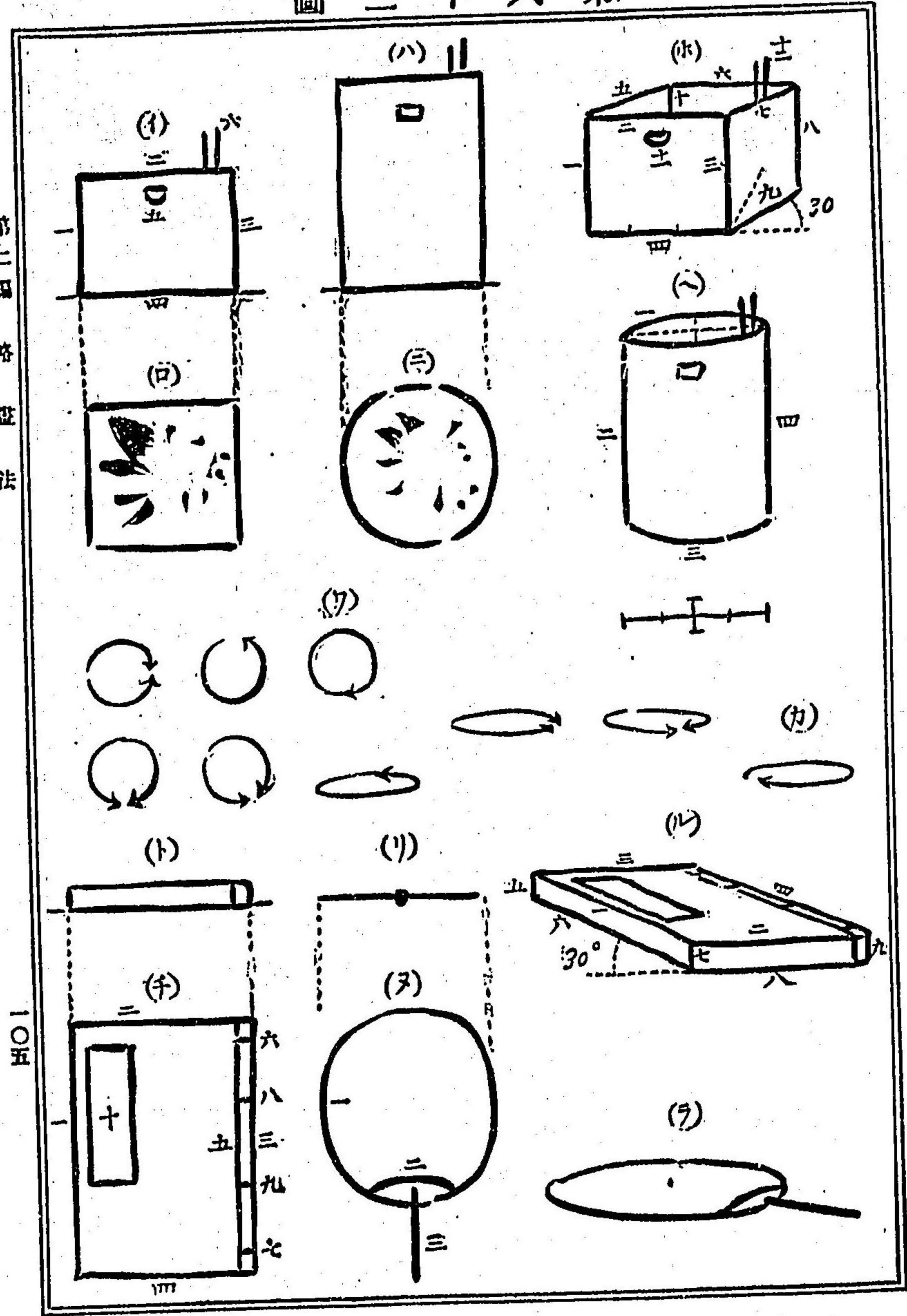
が厚さの少なきもの、若しくは扁平的の物は、第二圖式によらなければならぬ。例へば火鉢を第一圖式によりて描く時は、(イ)の如く、其火鉢であることが、能くわかるけれども、これを(ロ)の如く、第二圖式に據るときは、其何たるかを知るに、困るのである。又書籍及團扇を描くに、第一圖式に據る時は、(リ)の如く、其何であるかを辨にすることは出来ぬが、第二圖式に據れば、(チ)の如く、確に其物を認め得るのである。

第二圖式に據れる(イ)の火鉢は、何れが角形で、何れが圓形なるかは、不明瞭である。又第二圖式に據りたる(チ)の書籍及團扇は、未だ平面に位置しあるものと、云ふことを得ないので、約言すれば、第一第二の圖式は、どちらも充分ではない。そこで角火鉢は(ホ)の如く、圓火鉢は(ヘ)の如く表はし、書籍及團扇は(ル)及(ヲ)の如くに描くことが必要である。此(ホ)等の如き様式を第三圖式といふ。

(ホ)といふ角火鉢に於て、五・七・九の三線は、互に平行で水平線と三十度以下の角を爲し、實長の三分の二程に、短縮しあるものと定められたのである。勿論、此角及線は、己が眼の位置によりて、大小長短はあるが、可成美的の形に便宜決定したのである。本箱又は机等を指物師に眺へんには、此圖式に依れる、下圖を示すべきである。



圖三十六第



(へ)の圓火鉢の楕圓は、視線傾斜の度によりて差はあるが、これも其最も美的形相を得んが爲めに、短徑は長徑の四分の一以下でなければならぬと定めた。



### 第六十四圖

前圖の法式によりて、机本箱等を描き試みたのである。

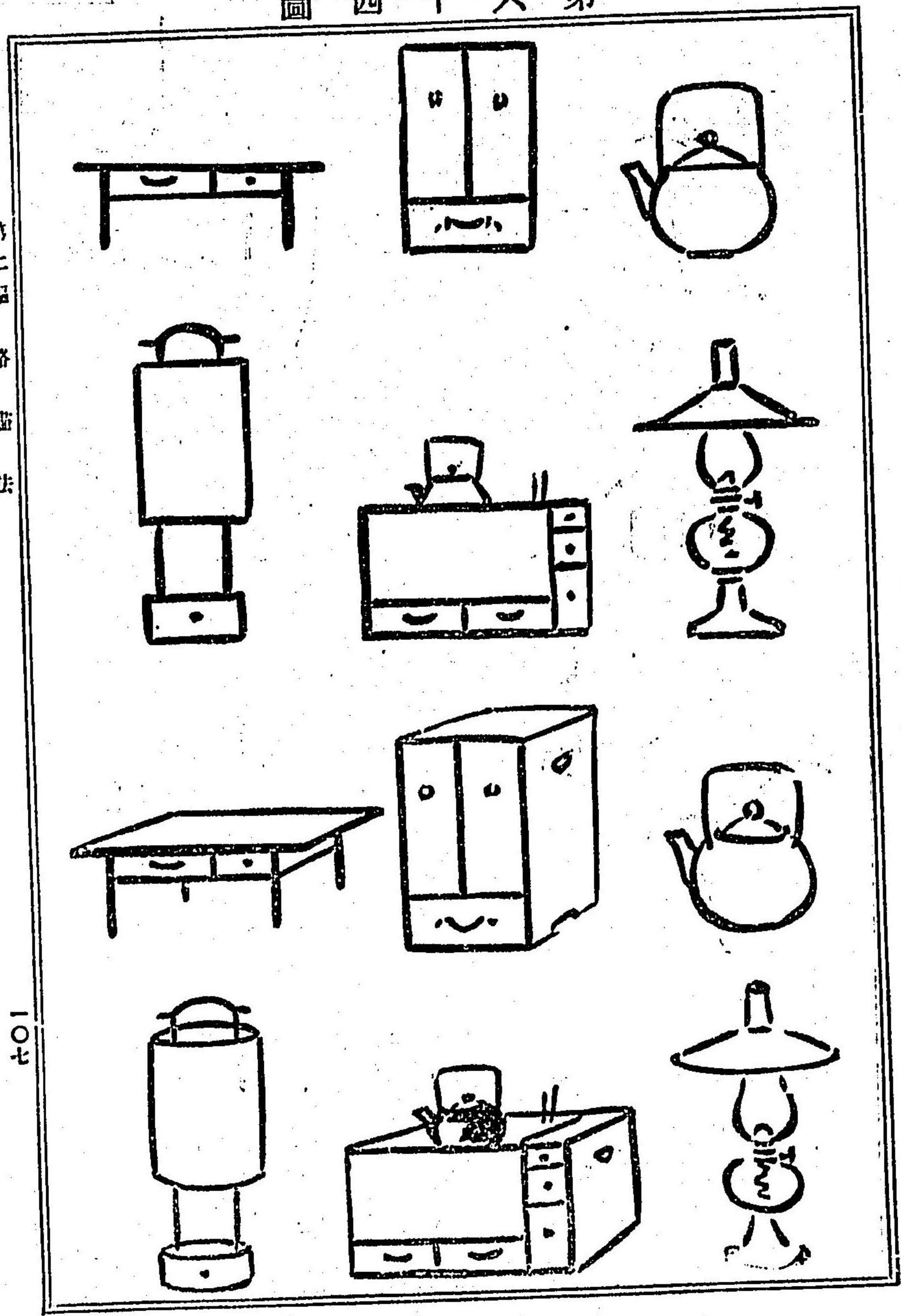
### 第六十五圖

己が眼より、低く置かれたものは、紙面の上方を空しくして下方に描き、高く釣されたものは、上部に描くべきである。

(二)の草履と(へ)の下駄とは、俱に平常見下ろされるものであるから、平面的に描いて見たが、其區別が甚だ明瞭でない。之れは、是非(ホ)(ト)の如く、傾斜式で表はさねばならぬ。

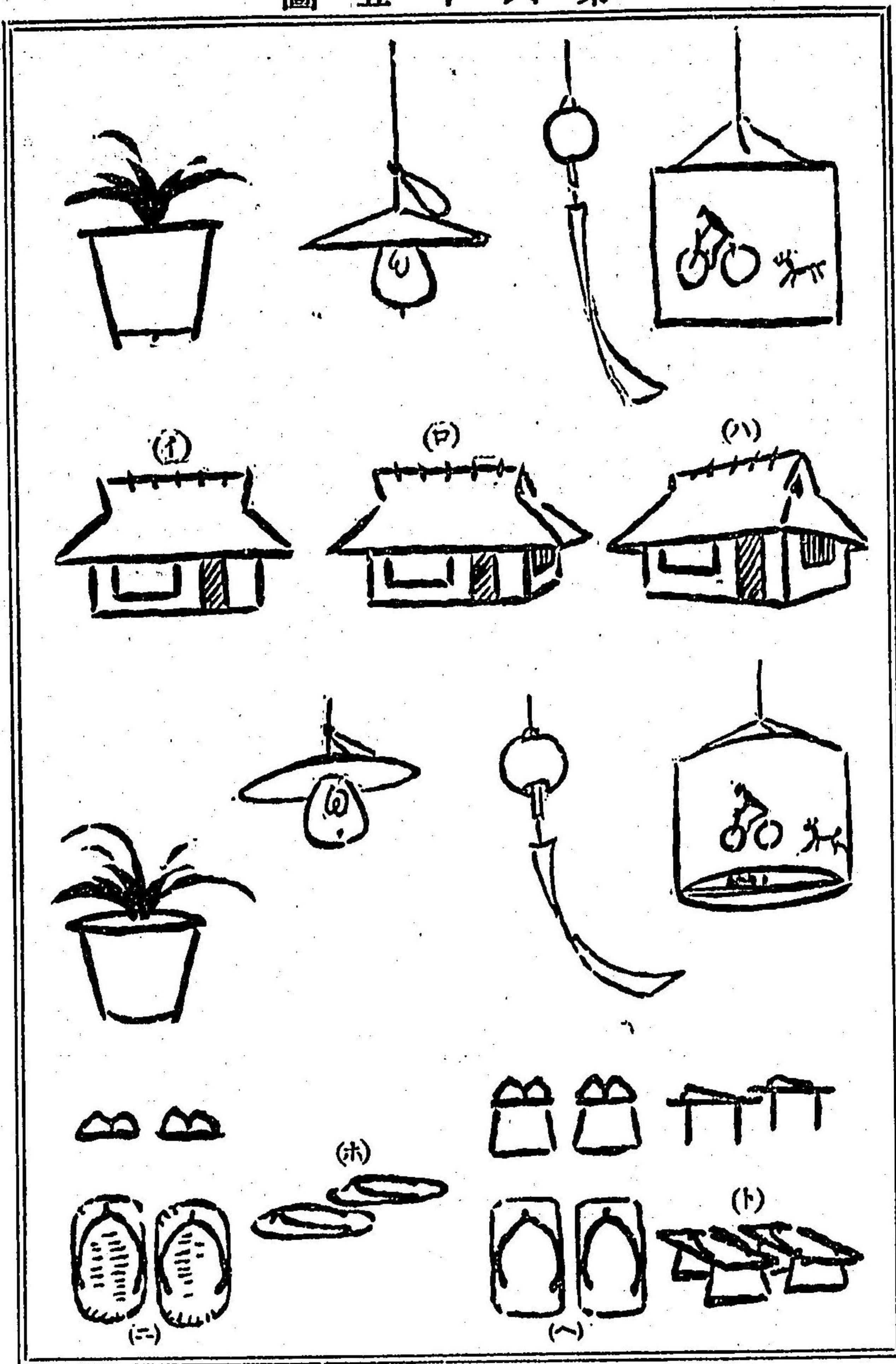
家屋は、(イ)の如く描けば既に十分である。これを一層明瞭にせんとして、第三圖式によれば、(ロ)の如くなるが、これは却つて感服しない。何とならば、此の如き大なるものに向つて、遠近法の考なしに、小器物を描くと同様の筆法では、行かぬのであるから、宜しく(ハ)の如くにならねばならぬ。  
併し(口)の如き形式も、全く棄つべきものではない。第九十二圖の(四)の如く、學校又は、會社等の構内を、説明的に、描かんとするならば、是非此形式に據らなければならぬのである。

第六十四圖





第六十五圖



102

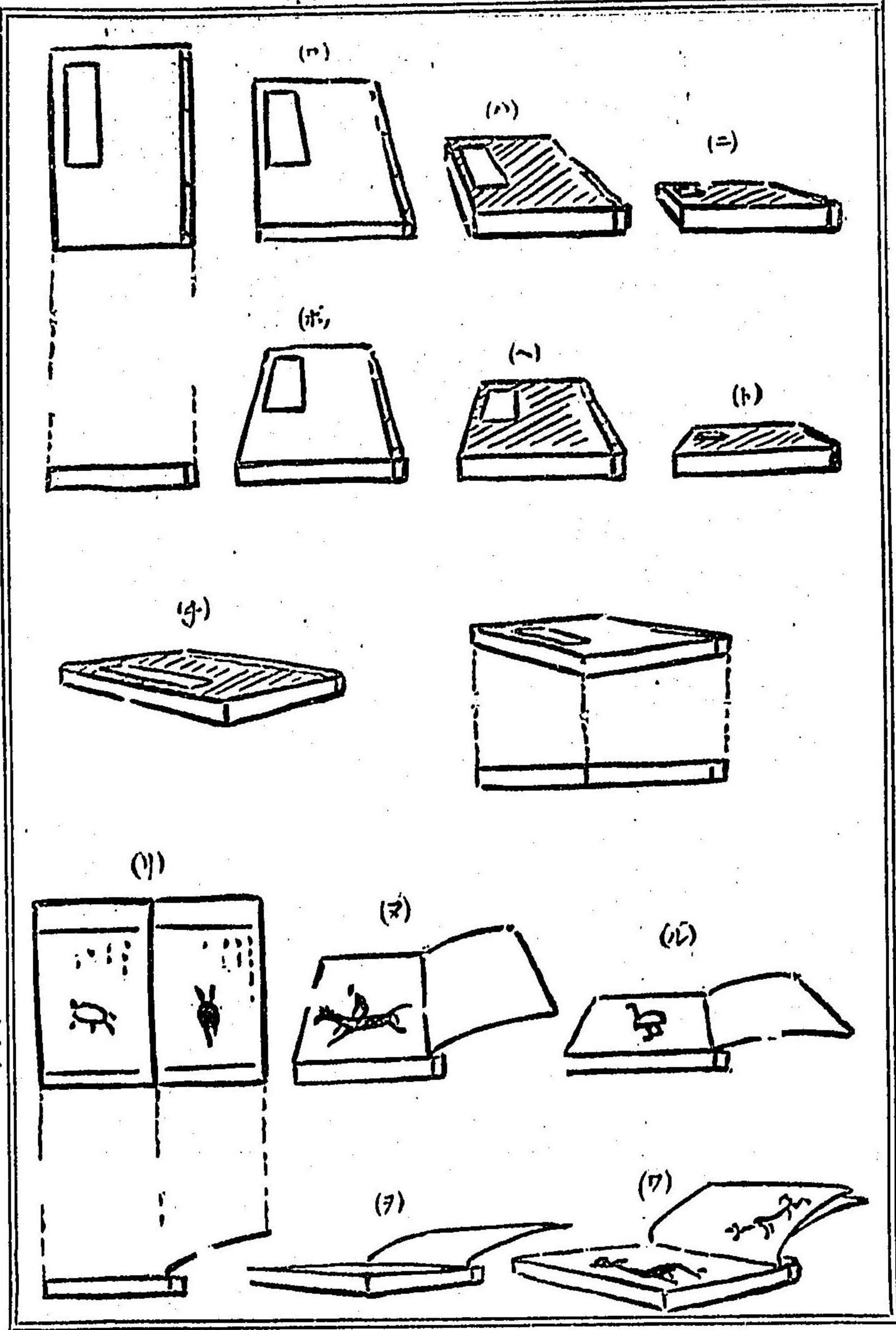
第六十六圖

同一のものでも、これを視る眼の位置によりて種々の形に見ゆるのである。それ、尙進んで畫の智識を得んとする人は、先づ器物の描法に、今一層進んだ方法のあることを知らねばならぬ。即或る距離から、或る物を視る時は、同一物體の同寸法の所も、己れから遠いものは、近いものより短く見え、奥の方へ退去する線は、大變に縮まるものであることを知らねばならぬ。これは、如何に小さきものに於ても、存在する自然の理である。吾人は、常に大なるものに於ては、これを認むるが、小なるものに於て、認め兼ねると云ふのは、吾人が兩眼を、具有するからである。若し片眼にて、己れから距離を異にする、等大の二物の寸法を、尺度によりて測り比ぶるならば、儘にその差を認め得るであらう。それは、長さ五寸のものが、五寸退去すれば、七分を減縮するといふ、驚くべき割合である。我が國從來の畫が、一向これに頓着しなかつたのは、餘りに大膽ではないか。本圖は、書籍について、其研究をしたのである。

或る人は、寫生は實物を見た儘を、描けばそれで宜いのであるから、一の書物にしても、時に机の上に、又時に脚の下にあるのだから、其寫生の結果が、平面的の圖にな



圖 六 十 六 第

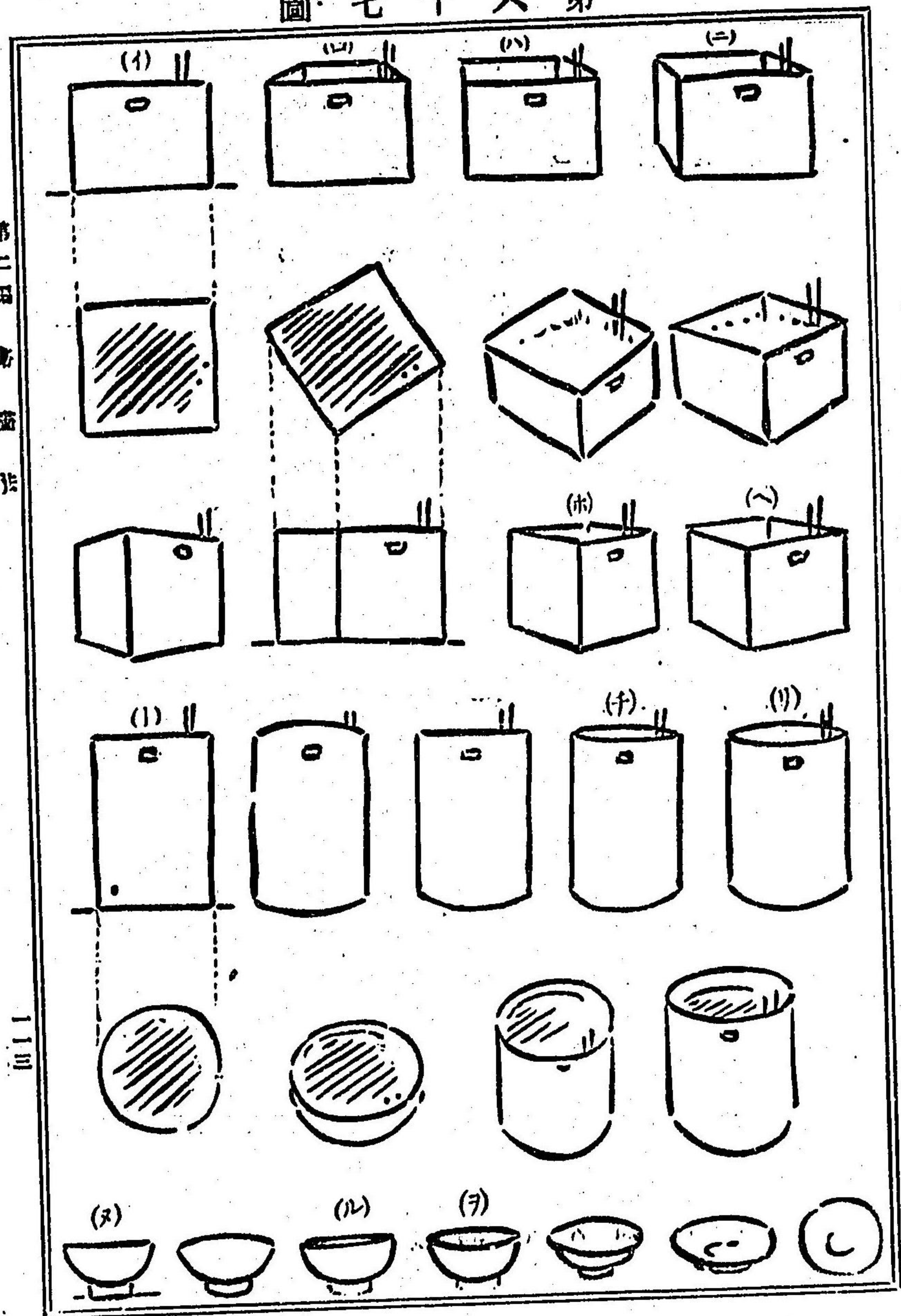


らうと、正面的にならうと、それは、愛ふる所でないといふが、自分は、全然不同意である。

本圖は眼の位置によりて、書籍の形が種々に見ゆる所を示したのであるが、其中自ら美なる形と、然らざるものとあるであらう。自分は寫生其他に於て、勉めて、其善美なる形相を捉へて、之れを寫し又描きたいと思ふ。本圖中先づ善美なるものは、(ハ)、(ニ)、(ト)、(チ)、(ル)、(ヲ)、(ワ)等であらう。つまり、厚さの少ないものは、眼を低くして視れば善美の形を得るといふことになるのである。



圖・七十六第



第六十七圖

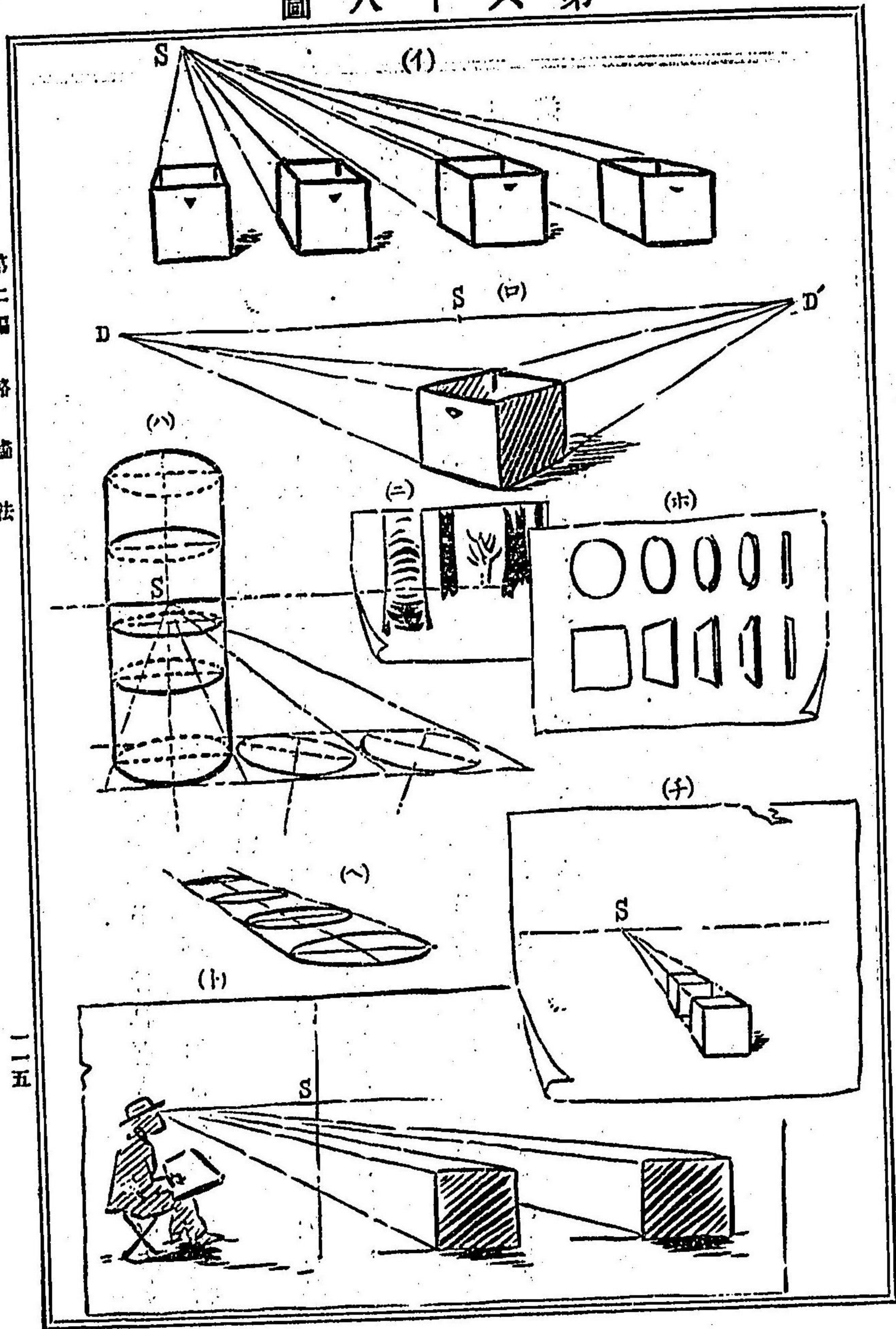
本圖は大に厚さを有するもの、即高さある器物につき、前圖と同様の研究をしたので、角火鉢の畫としては、(ロ) (ニ) (ホ) (ヘ) 圓火鉢では、(チ) (リ) 茶碗では、(ル) (ヲ) が最も良き形であらう。

學ぶ者は、此等若しくは他の實物について、其善美なる形相は、已が眼を如何の高に置き、如何程の距離にあつて、視るのが適當であらうかを、實際に研究しなければならぬ。

如何に手腕ある人でも、茶碗を見下した其圓形、或はそれに近き形に濃淡、或は陰影を施して、茶碗らしく見せやうとしても、それは困難である。畫は眼に映じた儘を描けば宜い。といふと、如何にも平易に聞ゆるが、實は、出來難い事業なのである。そして自分は、物を観るに須く畫的になければならぬ、といふことを斷言して憚らなす。



第 八 十 六 圖



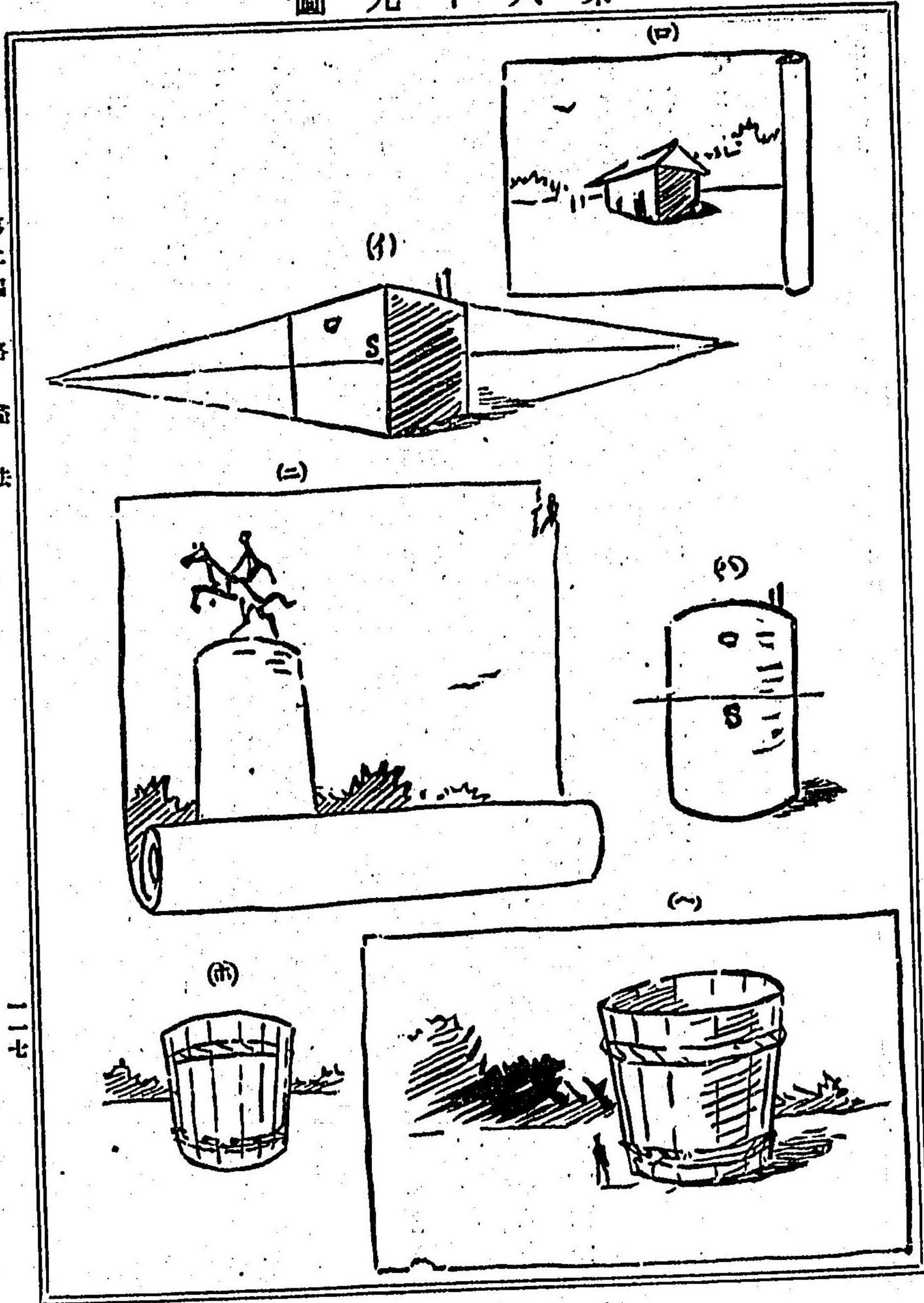
第 六 十 八 圖

吾人は幸にして兩眼を具へて居る。しかも時に片眼者を羨むものは、他てはな  
い、前にも述べた通り、吾人が物體の正しき形を見る事が出来ないのは、全く兩眼  
を有するからである。て物の透視畫的觀察は、是非片眼てしなればならぬ。而  
して習ひ性を養ふことは、必要なことである。

(イ)は角火鉢の位置によりて、眼に映ずる形の種々あるとを示し、(ロ)は其向きを變  
じたのであるが、其正當に描かれたる者は、其平面に平行せる多くの線を、已れより  
遠く延長するならば、左へする者と、右へする者とは、各別に一箇に集合すべく、其二  
點を連絡した線は、必ず水平にして、眼の位置は、其線の二等分點に、一致するのであ  
る。此形は一般畫として、大に用ひらるる者で、變化に富める美なる形相である。  
(ハ)は圓柱を各所に於て、平面に平行に切斷し、眼の位置によりて、其圓形が楕圓に  
見ゆる度合を示したのである。而して正面より、右若しくは左に偏するときは、其  
楕圓は、傾斜するものである。又(ヘ)は等圓による楕圓が漸次退却したる結果を表  
はし、(チ)は(ト)に於ける、寫生の結果を示したのである。



圖九十六第



第六十九圖

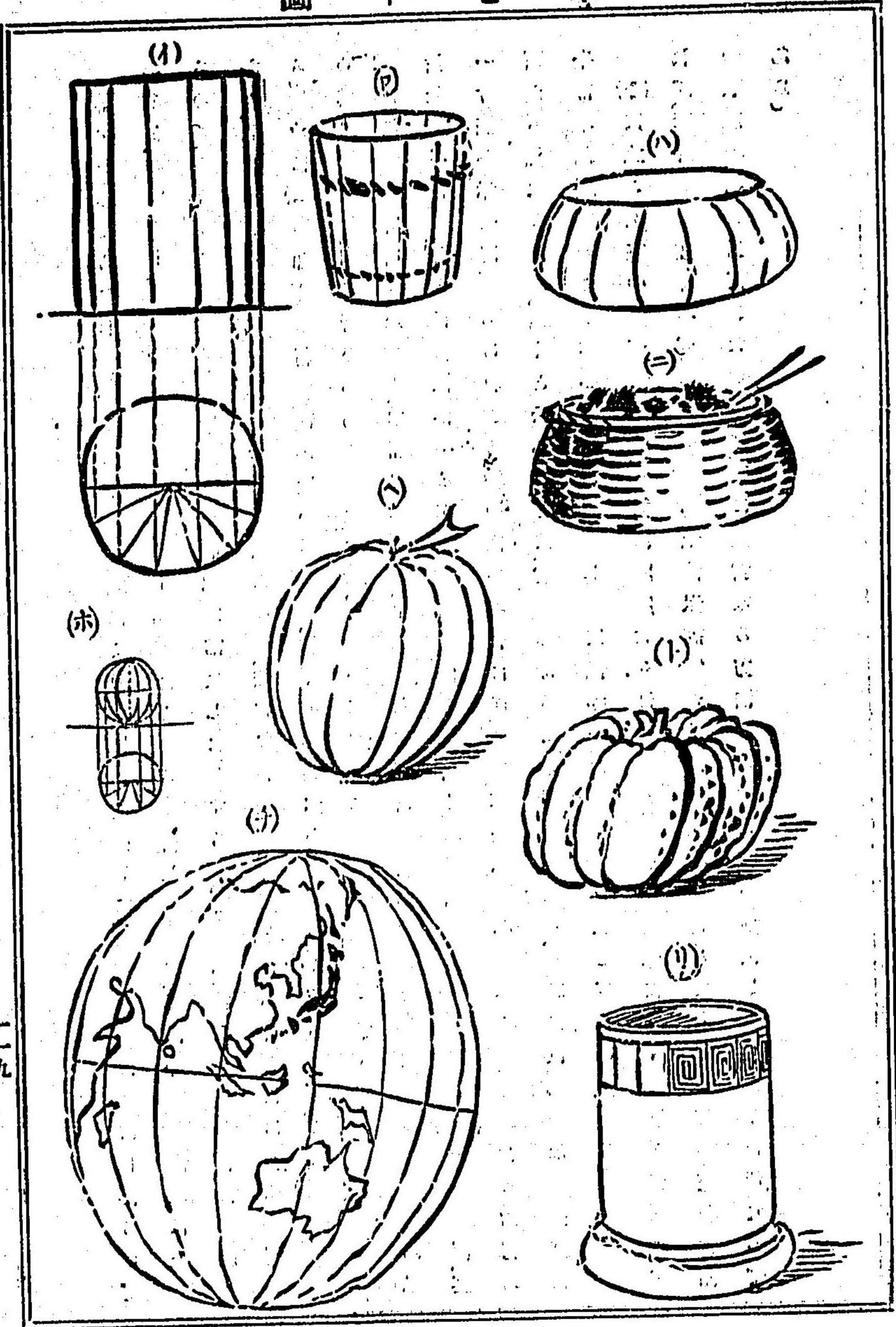
眼の位置の如何によりて、角火鉢は、(イ)の如き形を得る。けれども之は、通常あり得ないのであるから、兒童に教ふる必要はない様であるが、(ロ)の如き大なる建造物などを描くには、是非此形式に依らなければならぬ。

又圓火鉢は、其側面の中央に着目するならば、(ハ)の如き形を得るのであるが、これも前と同様に高大な銅像の圓座、若しくは極大なる桶等に於て、始めて認め得る形式なのである。

ここに一つ注意すべきは、桶を描きて、其極めて大なることを、兒童に認識せしめんとするに當り、(ホ)の如きものを以てすることは、不適當である。宜しく(ヘ)の如く描いて、之れに比較單位を添へるゝが良からうと思ふ。



第七十圖



第七十圖

桶の板目、炭籠の籠目、及筆筒の雷紋織き等を適當に描かんとするには、(イ)の法則に據らねばならぬ。即、圓柱の正平兩面圖を描き、其平面圖の圓の前半部を、或る數に等分し、其各分點から、垂直線を、正面圖に向つて、引き上げるのである。之に依つて、同寸法の板が左、或は右に至るに隨ふて、如何なる比例に縮小して、圓筒面を圓んで居るかを、知り得るであらう。

又、西瓜とか、地球とかの、縦條、即、經線様の線を、描かんとするには、(ホ)の法則により、正面圖の圓徑上に、比例分點を得て、これを兩極に、弧線を以て、連結するのである。

此等區分の描法が、適當に出來たならば、濃淡を施さないうて、其曲面體であることが、認め得らるのであるから、決して忽にするにはならぬ。而して、他の方面からは、これが濃淡を施すの一要領なのである。

板目、又は西瓜の縦條の如きは、中央部より漸次左方、右方に及ぼすのが、運筆順序である。



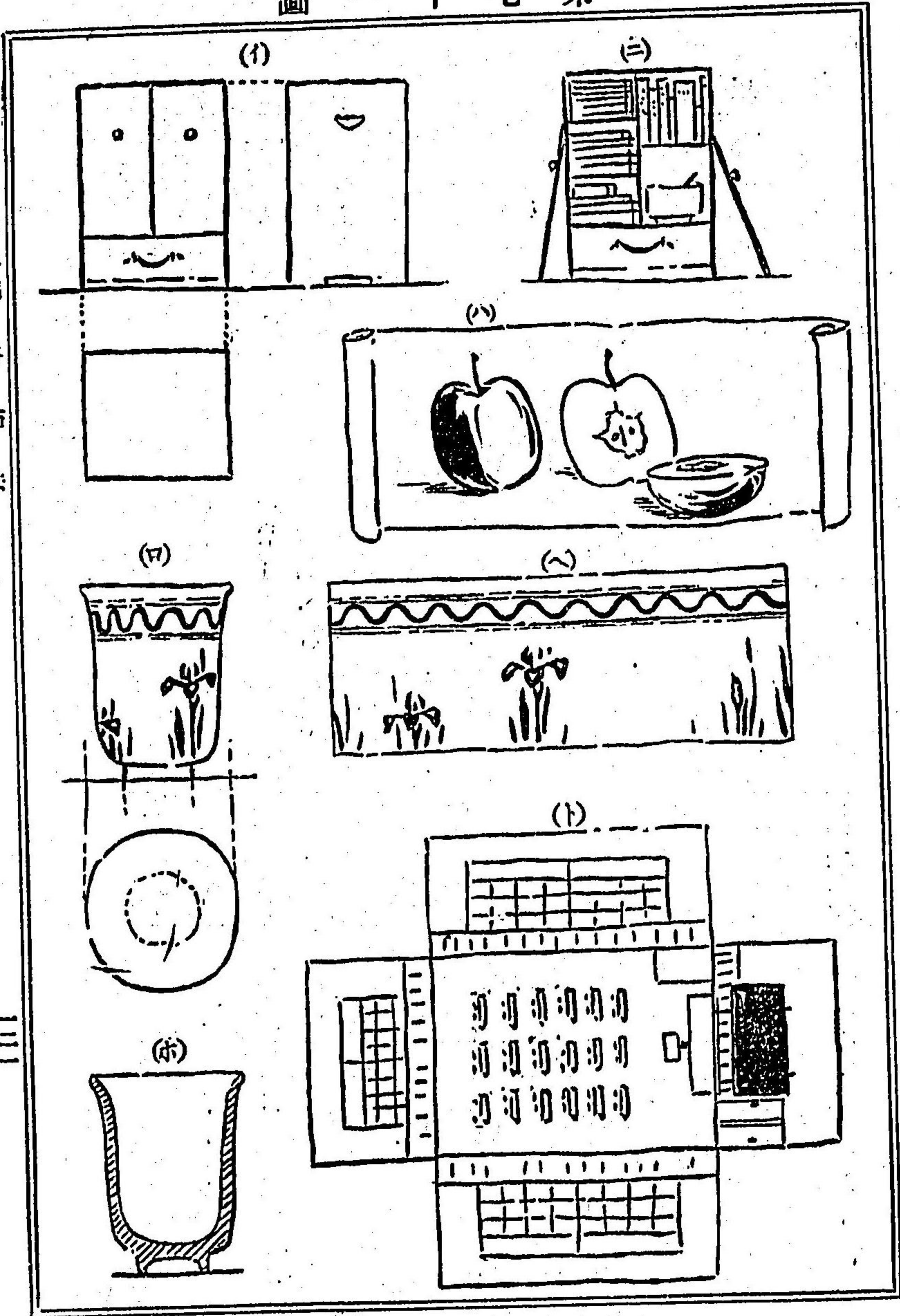
第七十一圖

器物の形は、第六十三圖の三種の圖式によりて、極めて簡単に、又實用的に表はし得るのであるが、時に或は、(イ)の如く側面圖を要する場合もある。併し此等は、單に外形の陰影に止まるので、假令ば林檎の外形を、極めて精細に寫生したとするも、これを裁斷して、其内部の組織をも、悉知するのでなければ、未だ林檎に就て、確實な智識を得たといふことは出来ぬのである。故に(ニ)の如く、本箱の蓋を除いた所を、描くの必要がある。即、本箱を眺ふるに當り、其柵の構造に就て、別に好みがある時などは、大に此圖法の必要を感ずるのである。

又湯呑の研究に於ても、本箱と同様に、縦截した其断面を描かなければならぬこともある。猶此湯呑は、其外部に模様があるが、これが帯模様の如くに繰返しから、出来たものならば、其一分劃を示せば、足るけれども、繪模様の場合には、其全部を示す必要がある、けれども四方八面から見たものを、描くと云ふことは、複雑極まることであるから、其時には、(ハ)の如くに傍面全部を剖展することが必要である。其巾は湯呑の口徑の三倍強とするのである。

(ト)は或る教室の圖で、四壁は、四方に開展せられ、都合五面を以て表出されて居るが、猶要すれば、天井をも描くのである。我が土佐派畫家が、常に天井を除去して、女御などの室内生活の状態を、描き出だした如きは、實に至當なる方法で、歐米人等の嘆賞して、措かない所なのである。

第七十一圖





第七十二圖

濃淡暈染法 濃淡暈染の法は、次の四則による。

- (一) 光線を受くる平面で、已れに正面する場合は、これを其儘にす。若し數面あつて、漸次背後に相重なるときは、第二面は、極めて淡き墨汁を、一面に塗抹し、漸次背後に至るに従ひ、其濃度を加へること。(イ)の如くである。
  - (二) 光線を受けない平面が、已れに正面するときは、全面を同一墨色にて濃く塗抹す。若し數面あるときは、遠ざかるに従ひ、漸次之れを淡くす。(ロ)の如し。
  - (三) 光線を受くる平面が、已れに或る角を爲す場合は、極めて淡き墨を以て、遠き方より、已れに近く暈す。若し數面ありて、各其角度を異にする場合は、其最も光線に面したるものを、最淡とす。(ハ)の如し。
  - (四) 光線を受けない平面で、已れに傾斜する場合は、已れに近き方より、濃墨を以て、遠き方へ暈す。若し數面ある時は、已れに最も近き者を最濃とす。(ニ)の如し。
- 以上の四則は、以て直に曲面に應用し得るのである。
- 圓柱及球が、光線を受くるときは、其半部は明に、他の半部は暗きこと、(チ)の如く

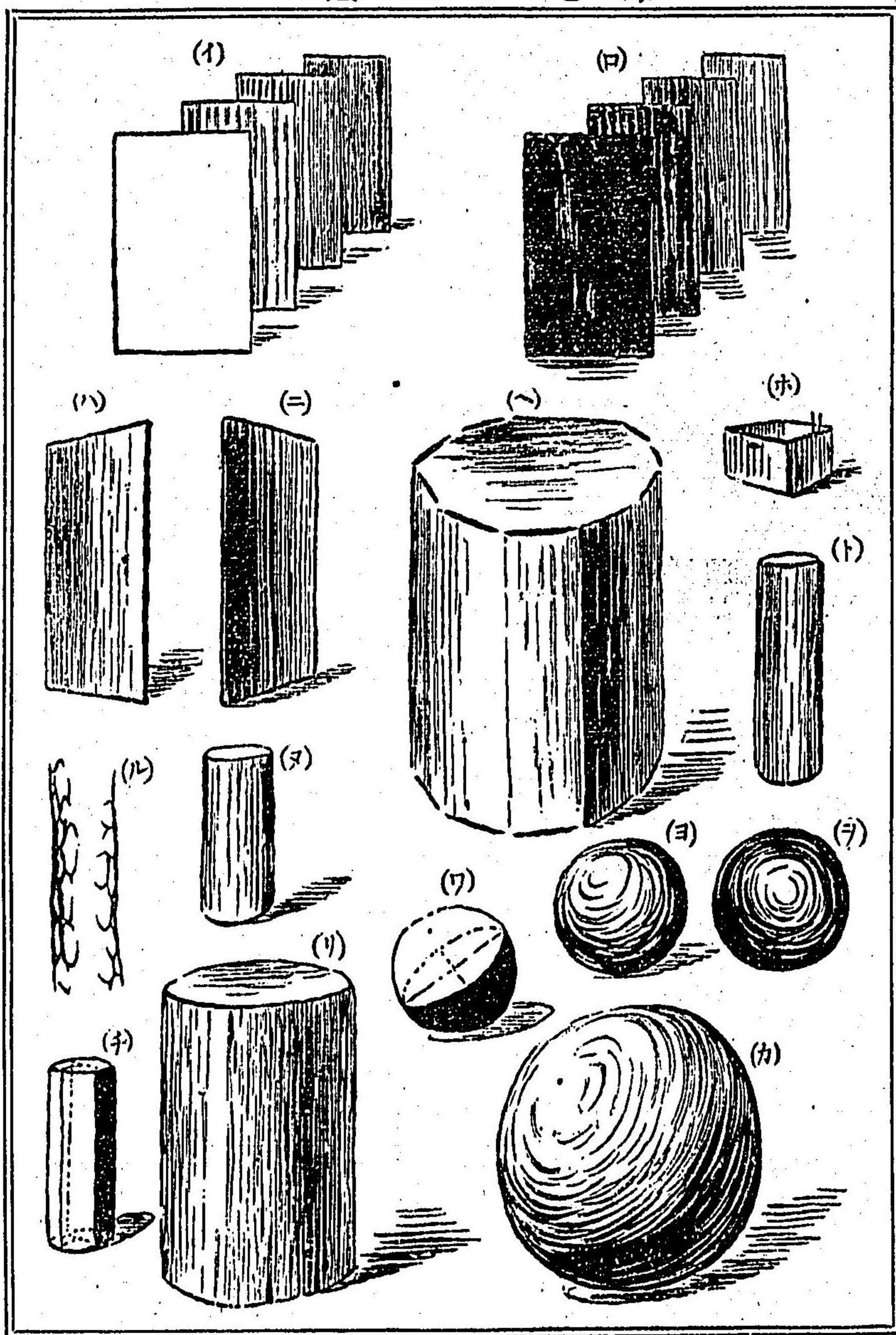
である。そこで明部は(一)(三)の法則により、暗部は(二)(四)により、暈染するならば、(リ)及(カ)を得るであらう。此兩圖に於て、最明部は(リ)に於ては線、(カ)に於ては點であり、最暗部は、何れも線である。此線が他面に投じて、其物の影となる。此影は、圖畫の上に餘り利益のないものであるから、西洋畫に於ても、特別の場合の外は、可成省略することを勉めて居る。併しこれによりて、物體の位置が、定まるのであるから、將來の我が國の圖畫は、是非此影を採用したいものである。

我が國從來の濃淡法は、(ト)及(ヲ)の如くて、云はば光線を、正面前より水平に受けたるもの様である。それで影は、全く顯はれなかつたものか、爲に其位置は、空中に在るもの様で、平面上に位置しあるものとは、思はれない。

そこで、初學者の爲に、(ヌ)(ヨ)の如き便法を定める。これは、圖畫の上に採用する光線、即左肩を越えて、斜に來る光線の、方向を少しく變移するならば、彼の最暗線は、殆ど輪廓に一致すべく、近よつて、其結果は、恰も(ヌ)(ヨ)の如くなるのである。而して影は、已れに近き方を濃くし、他方へ消失せしむるのである。彩色畫に於て、此影及び物體の暗所には、光線の黄に對し、帶青暗色を用ふるがよからう。



圖二十七第



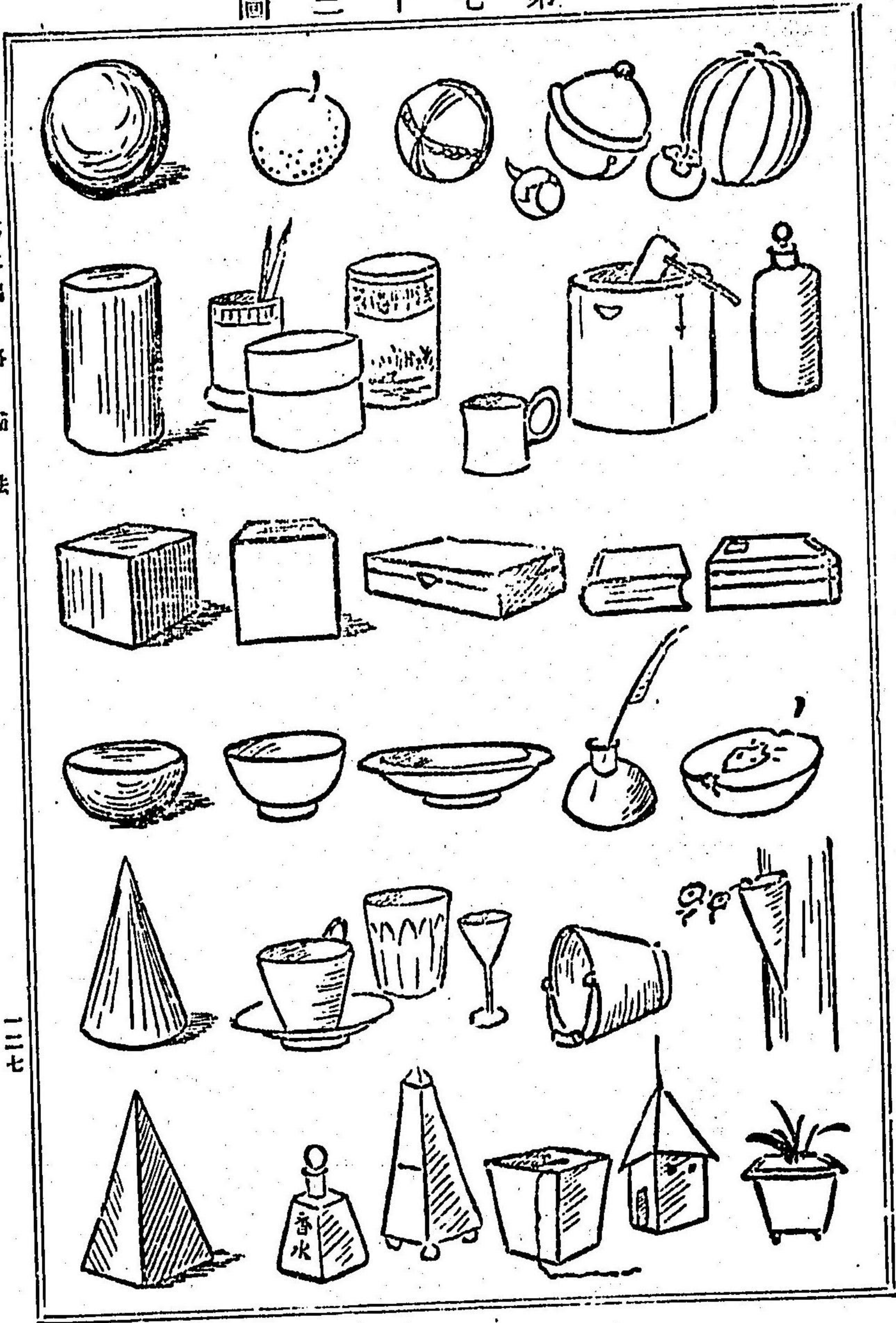
第七十三圖

寫生<sup>口</sup>の頃目、寫生といふことが、圖畫教授の主要手段である様に唱へられてから、誰人も之に力を注ぐ様になつて來たのは、其方法に至つては、皆々困つて居らるる様子であるから、其第一に面倒視せられて、しかも是非兒童に課さなければならぬ器物の描寫に就て少しく述べておく。

寫生とは、眼に視た様に描くといふ事であるから、各自が等しき材料を持ち得る場合はよいが、三四十名の生徒が、一つ若しくは二つの材料(四方から見ても其形の變はらぬ物は別として)に向つて、寫すといふ場合には、口のない土瓶を、描かなければならぬものや、口を正面に寫さればならぬ生徒が、出來るであらう。つまり、美は形相を撰んで、寫さすことが出來ないのみか、教師は、模範を示すに用り、且生徒の各成績を批評し、訂正するに、申々の手數と、技能を要することであらう。まして、此上に透視法的觀察の描寫を、強ゆるといふ事であれば、これ又申中の骨折で、萬全を認む教授が、或は徒勞に了らすまいかを、恐るるのである。それで自分は初歩の寫生は、看取と云ふ事にして、第六十三圖の、様式によりたいのである。左すれば、多くの成績には、勿論、巧拙はあるが、其形相は、大要一に歸するので、教授者、被教授者俱に利便を感ずるとであらう。次に一言して置くのは、器具の寫生と云へば、人は直に透視法の智識の必要を云ふが、此理法によつて、描出されたものは、吾人の眼に映じたものとは、殆ど別物の觀が



圖 三 十 七 第



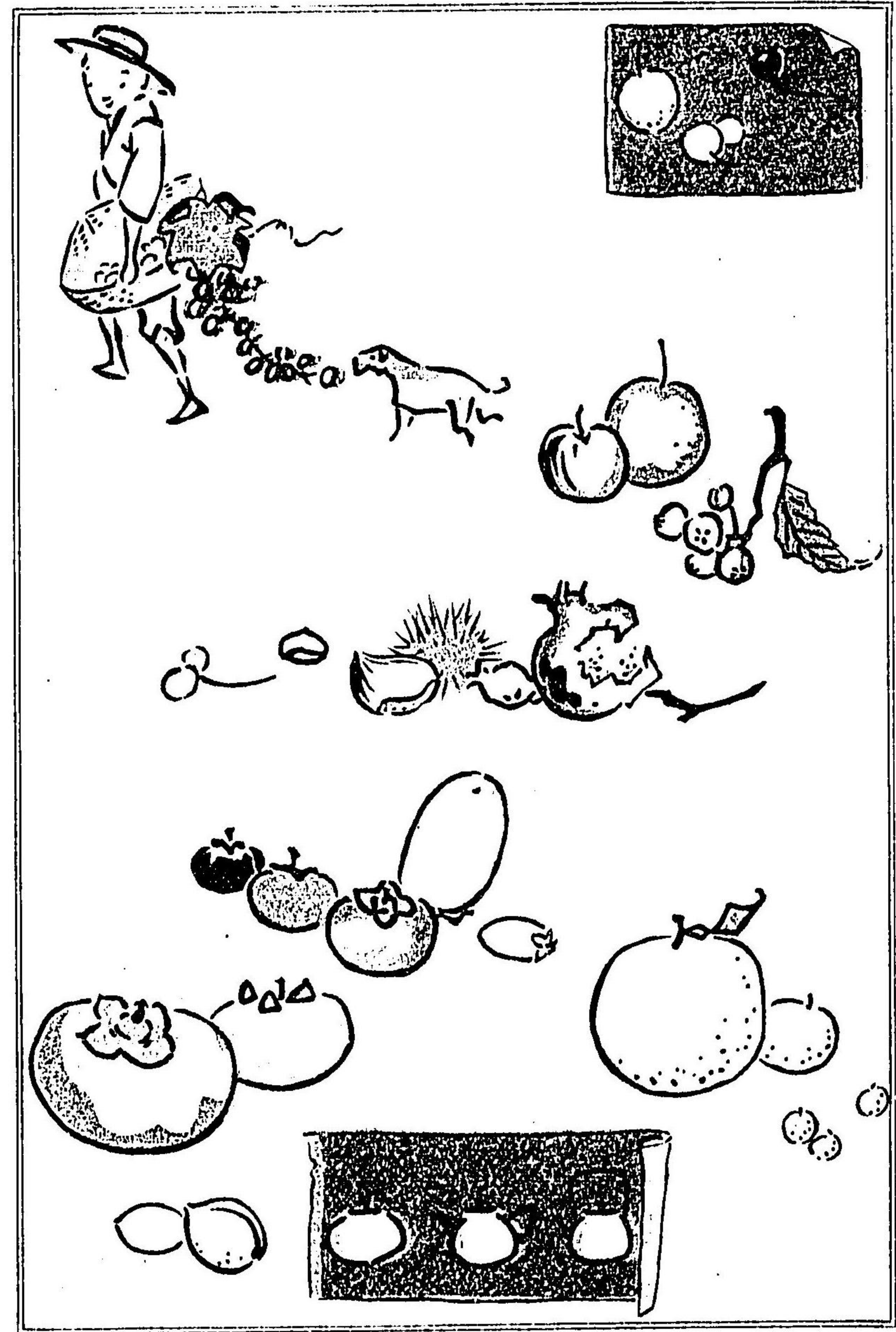
あるのである。自分は、これを畫とは認めない。強て云ふならば、片眼社會の畫と云ふものであらう。此理法を知るは、知らないには勝ることは。勿論であるが、随分誤解され易いものであるから、小器物などの描寫には、(況して小兒には)此理法の適用を云はぬがよからう。本圖は、幾何形跡の描寫と、その嚴密な濃淡法を授け、それに屬する種々の材料を撰み、練習せしむるといふ、一種の寫生法を、紹介したのである。

第七 果實及野菜

第七十四圖 果實。第七十五圖 野菜。第七十六圖 落葉。



圖四十七第



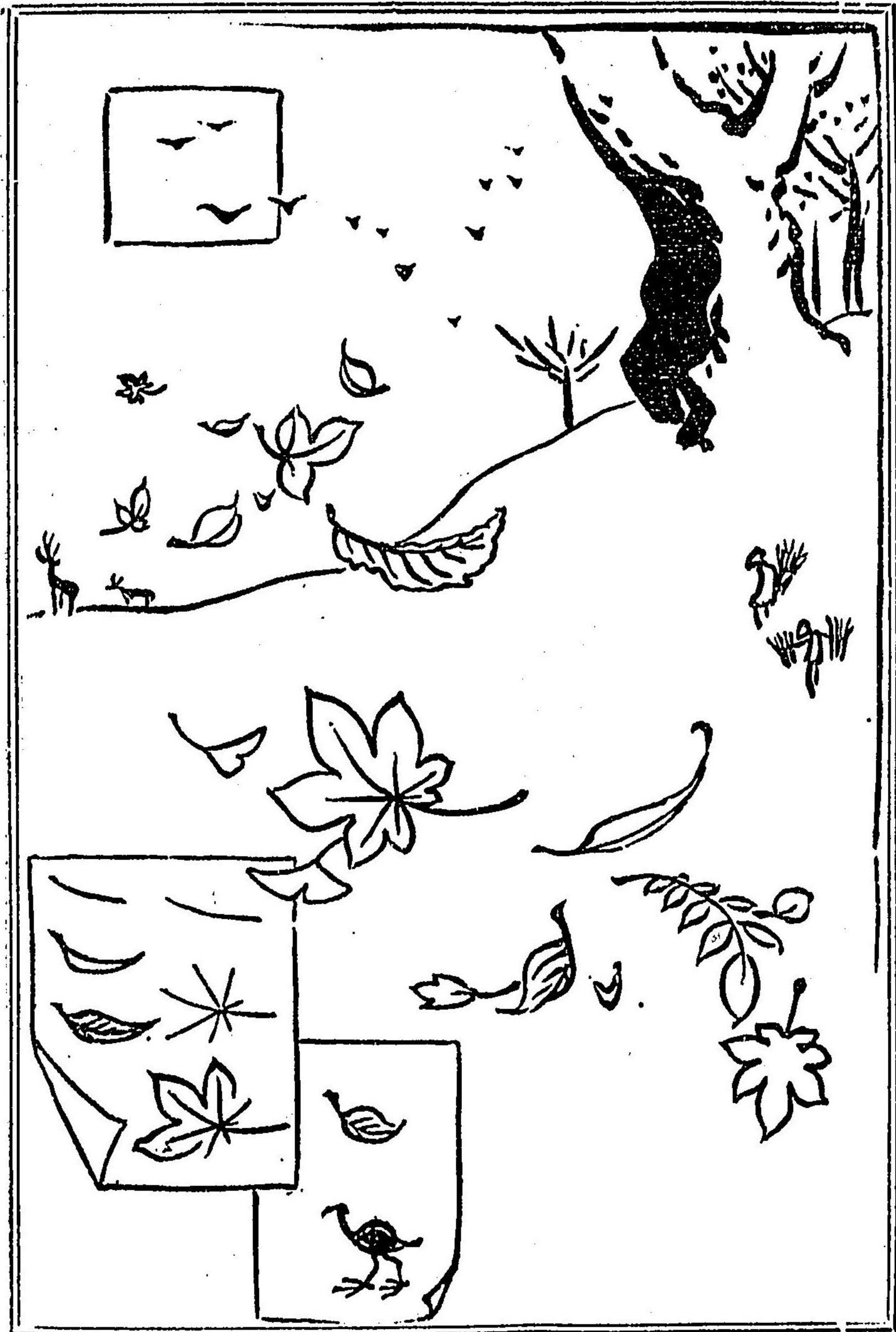


第七十五圖





圖六十七第



130

### 第八 花卉及樹石等

#### 第七十七圖

花口 (梅・櫻・福壽草・ヤブコージ・水仙・蒲公英・蓮花・草花) 花類は、色で没骨に描くのが、最も簡単な方法であるが、これは初心のものには、一寸出来兼ねるから、順序として、先づ實物を鉛筆にて看取り、平塗にそれぞれの色を抹らすのである。漸次熟練したならば、遠近に應じて色調を變えればならぬ。即近きは、眼に見た色と等しく、遠ざかるにつれ、漸次淡くするのである。併し色の遠近といふことは、單に其色が距離に應じて、薄らぐばかりをいふのではない、今一步進んで、空氣といふものを、忘れない様にし、遠かる程、漸次空氣の色、即背を加へなければならぬ。彼の遠山が青く見ゆるは、其例である。

花類の看取、又は寫生しては、隨に自然の美を愛する好習慣を、養ふとが出来るのであるから、無邪氣な兒童にも、唯、教室許りてなく、時に自然界へも導き出して、屢此練習をさせたいものである。

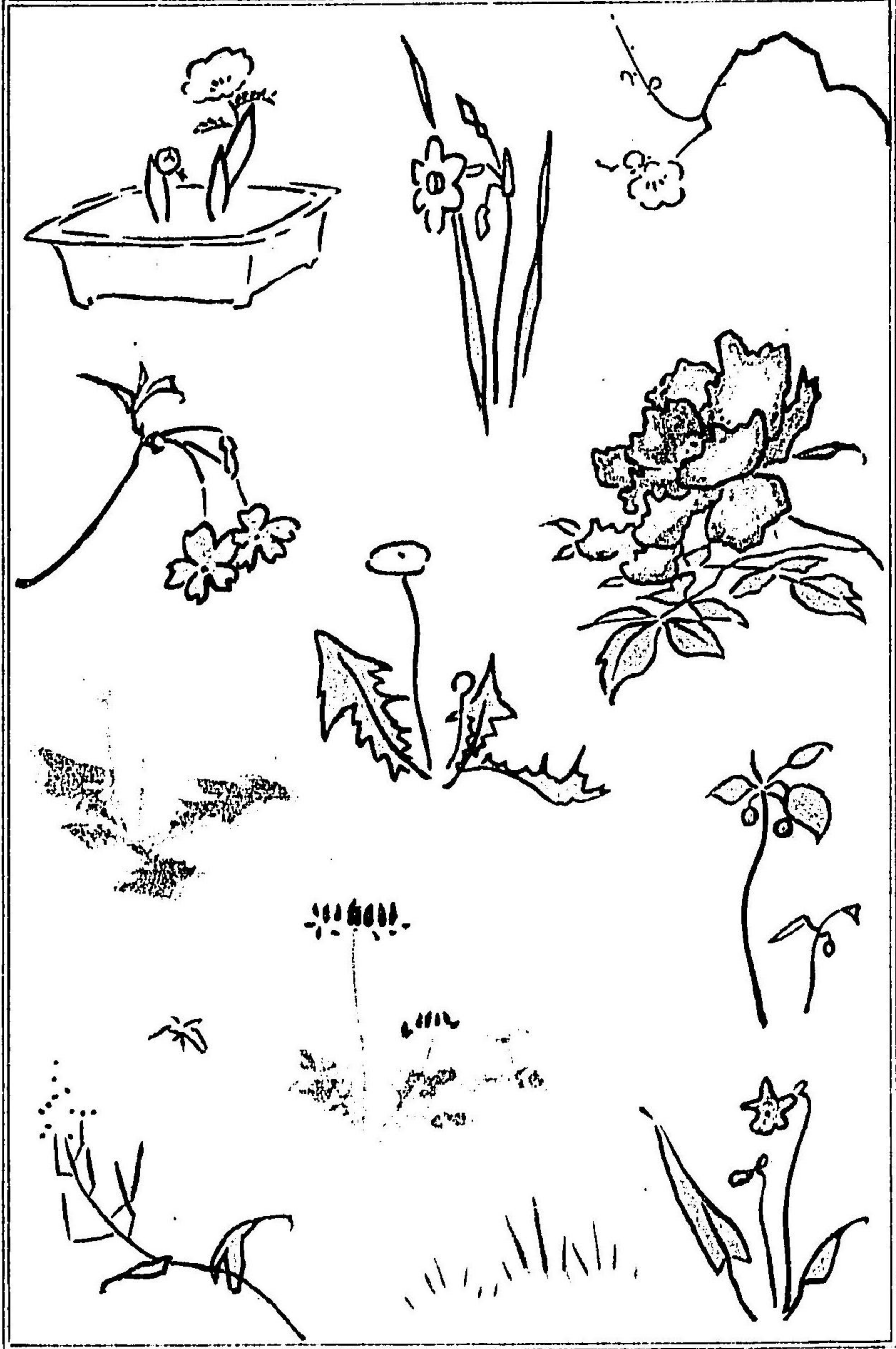
或る目的、例へば、模倣考案の資に供へんとする時の、花卉草木等の寫生は、極めて精細に解剖的に、又平面的に描畫せしむることが必要である。

第七十八圖 藤・芙蓉・ケシ・朝顔・豨顔・杜若・瓢。

第七十九圖 蓮・撫子・百合・秋海棠・女郎花・桔梗・萩・尾花・菊。



圖七十七第



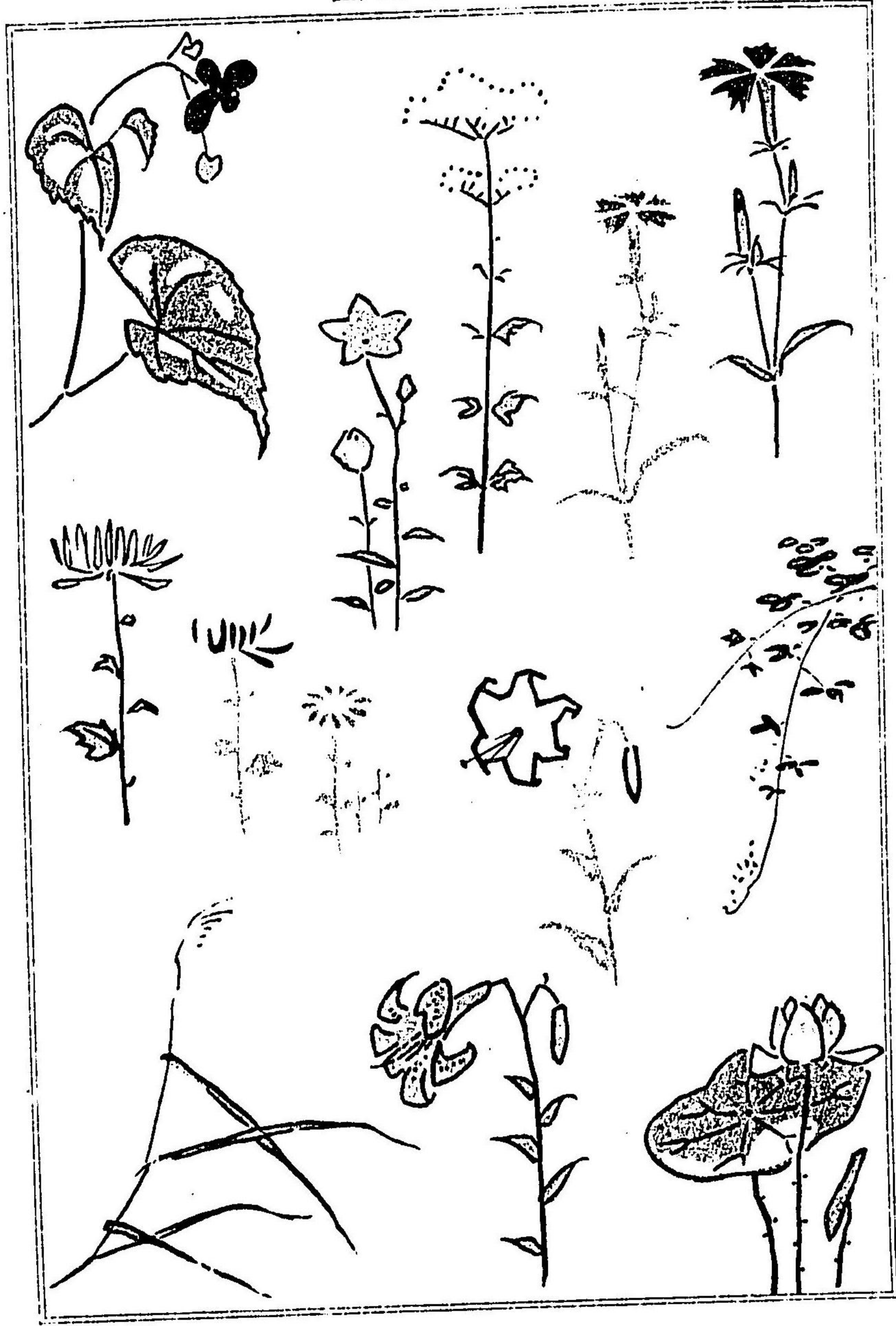


圖八十七第





圖九十七第





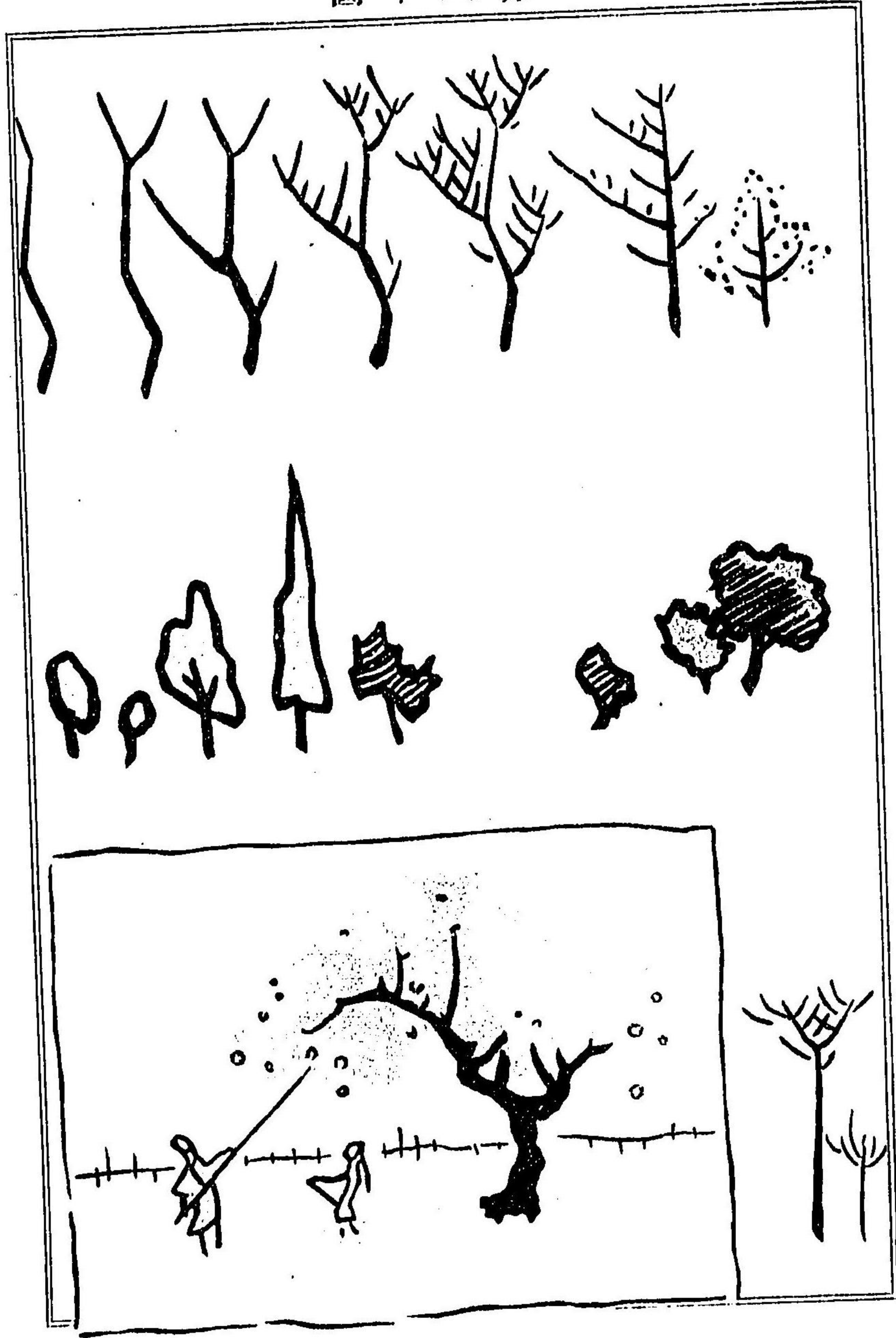
第八十圖

樹木 樹木は幹から始め、枝はその大なるものより、漸次小に及ぼすのであるが、夏の樹木、及遠い樹木は、葉の部を先きにして、幹を後にし、時に枝を省くこともある。果樹は、其實を最後に添ふるが順序であらう。

本圖の、樹葉の部に、斜線を施したのがあるが、これは、唯塗抹した意を表はしたものである。

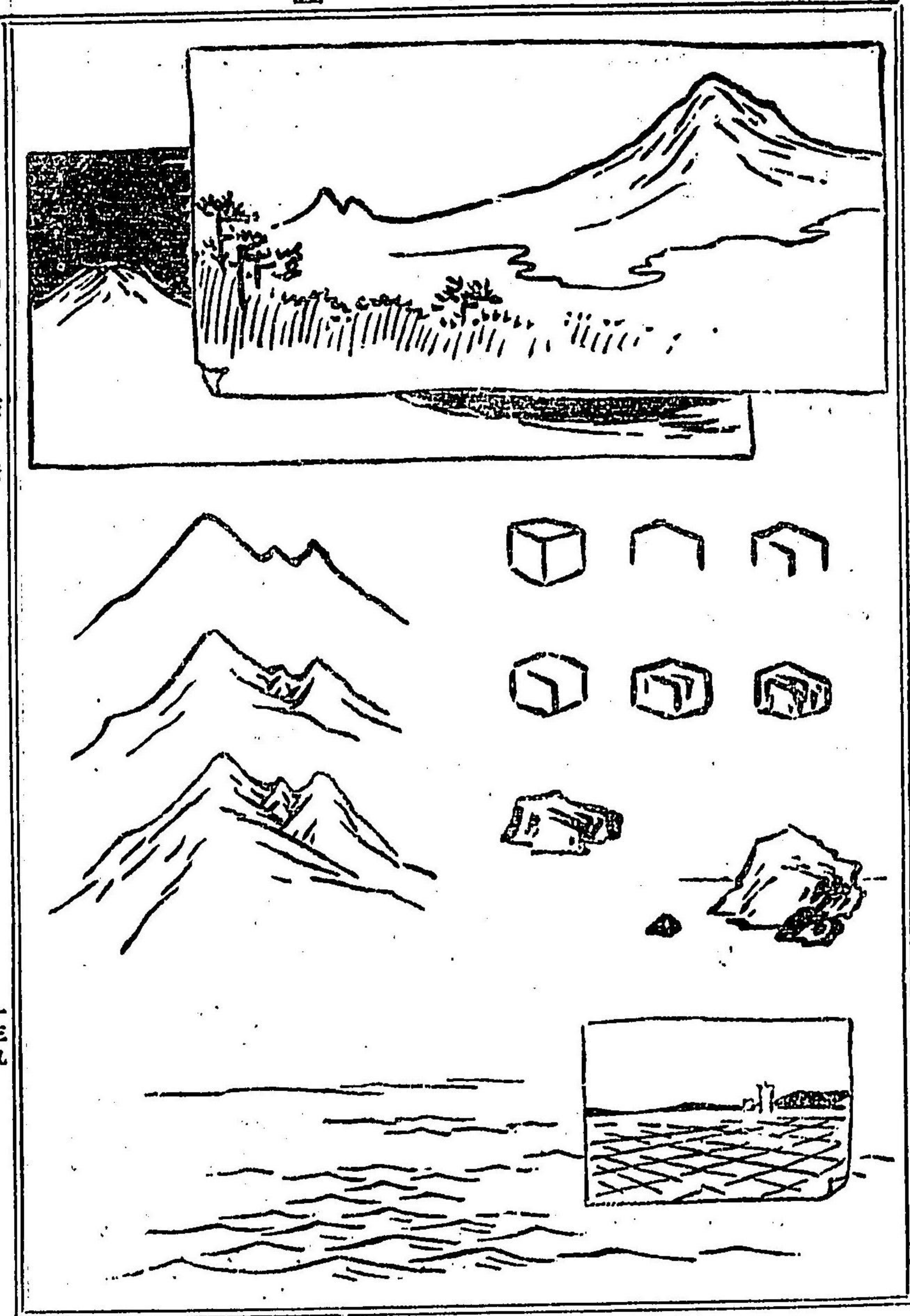


圖十八第





第十八圖



第二編 略 畫 法

一三九

第八十一圖

岩山及水 岩は、三面を見るときは、古から支那畫論の唱ふる所であるが、實に至言である。立林を完全に表はすには、是非三面を要するものであることは、第六十三圖によりても知られるが、岩は立方林の變形、若しくは、其重疊複雑せるものであるから、其心して描影すべきである。山は、其遠きは、單に空との界線を以てし、或は立平面の如く、一面に暗青色、若しくは、青色を塗ればそれでよいが、近き山は、是非其傍面起伏の状態を表はさねばならぬ。之れには、岩と同じく、破を要するのであるが、これは、圓錐林の濃淡の要領、或は第七十圖の方法によるので、彼の富嶽・新高山の如き、皆そうなのである。空との對照に於て、得たる山の輪廓に、凹凸あるものゝ如きは、圖に示す順序により、大小圓錐の抱合、恰も點を結ぶが如くならねばならぬ。水の中で、描き難きは、濤である。彼の波の如きは、網目によりて、へ字形を連続し、遠きに及ぶに従ひ、其角度を大に、描法を弱くし、遂には、水平に至り、茫々際限なきに終はるのである。

第九 橋・船・車

第八十二圖 橋

第八十三圖 船艦

運動しつゝあるものは、静止しあるものより、一般に輕快に描くべきが原則である。それと、波とか煙とかは勿論、進行中の船艦は、他より成るべく輕く筆を運ぶべきものである。

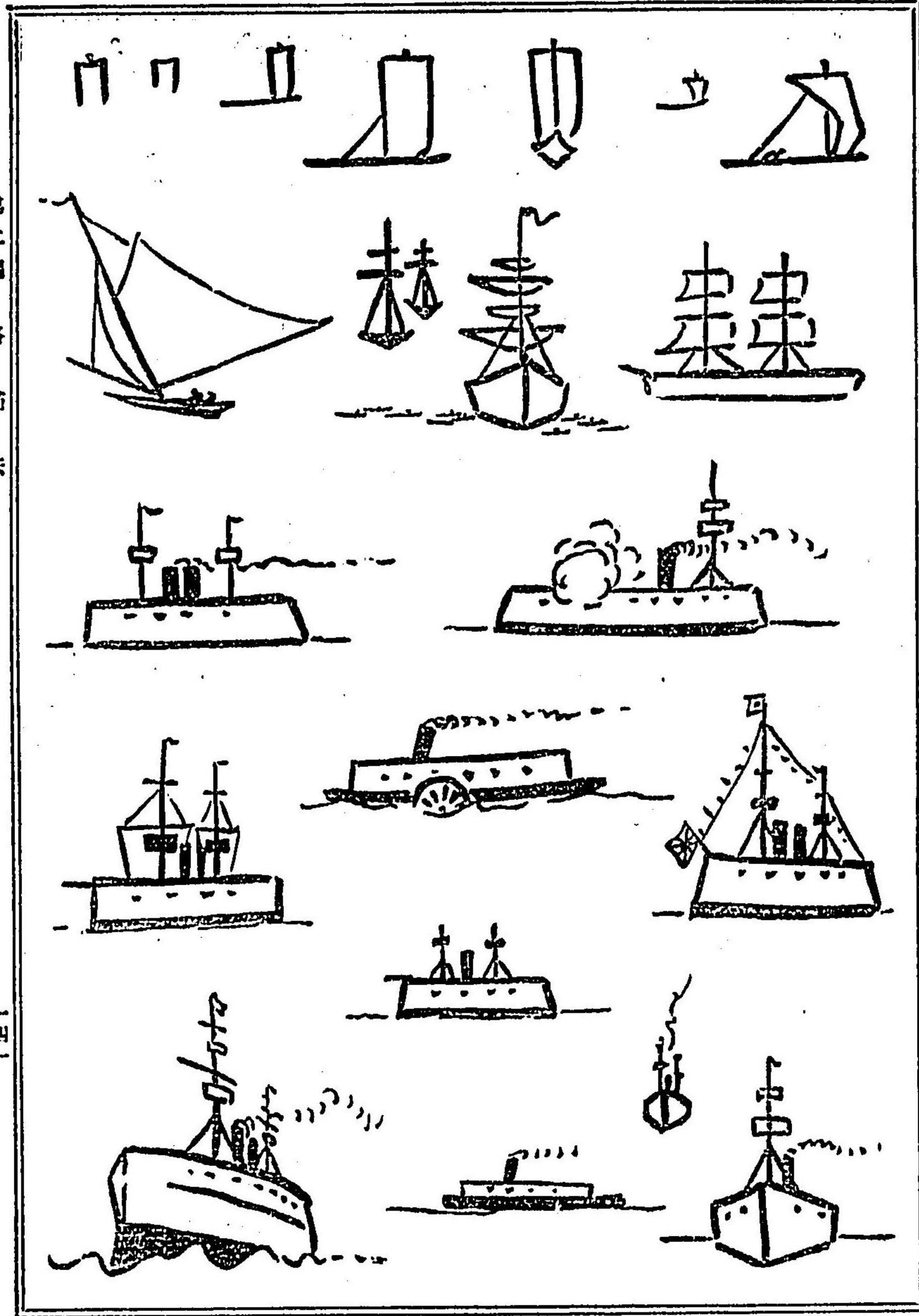
第八十四圖 船

第八十五圖 渡船

一三八



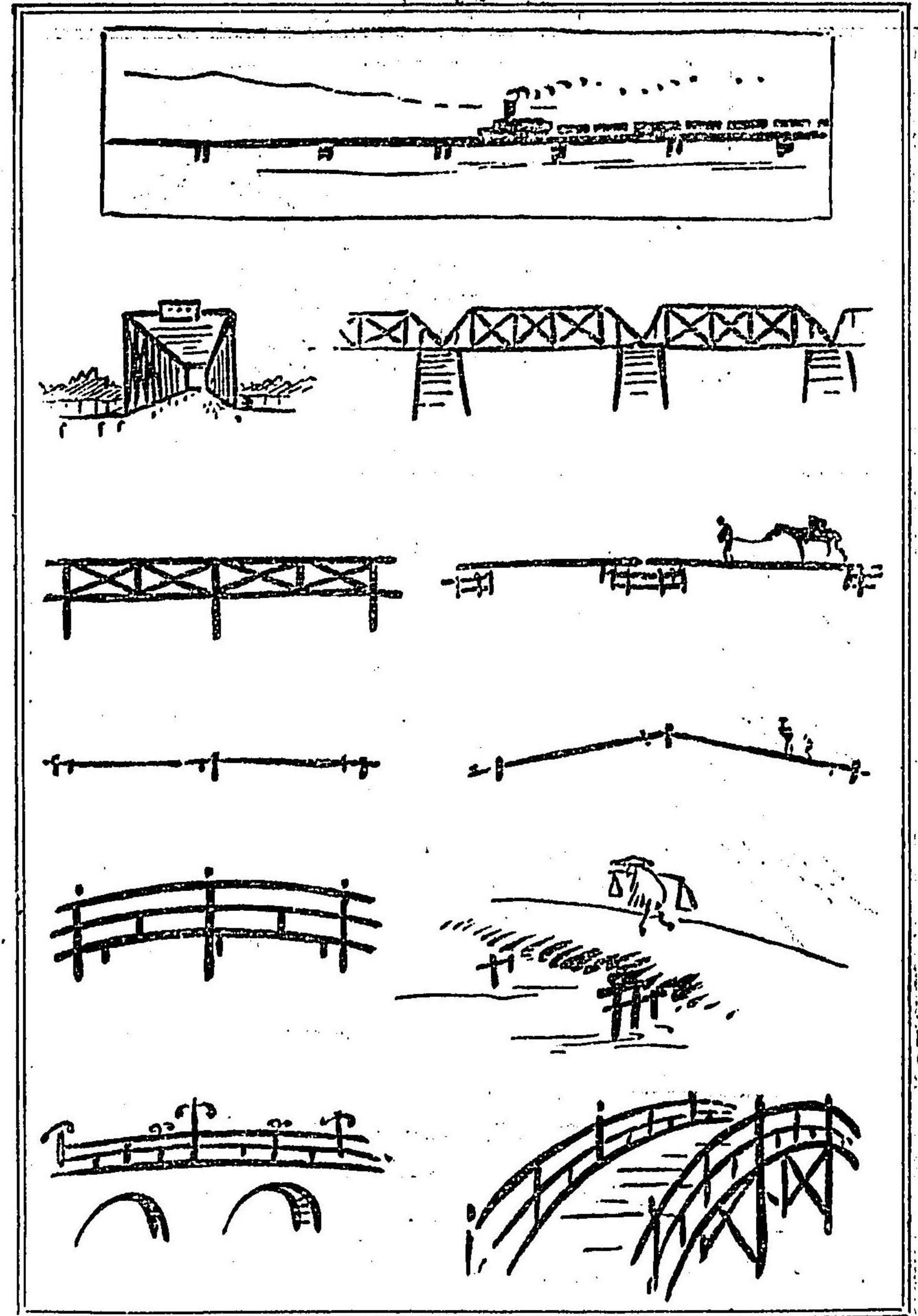
圖三十八第



第二編 略 畫 法

一四一

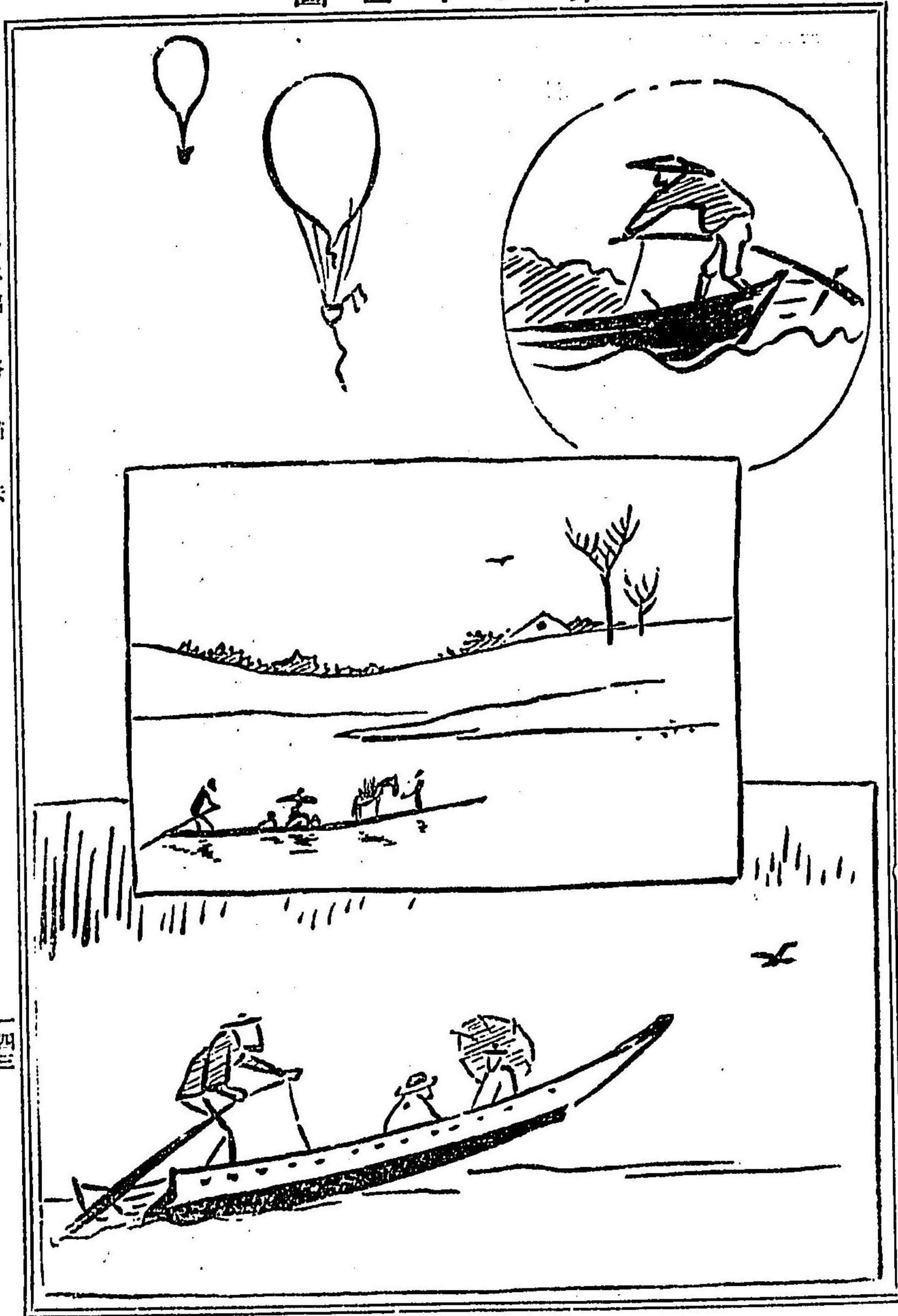
圖二十八第



一四〇



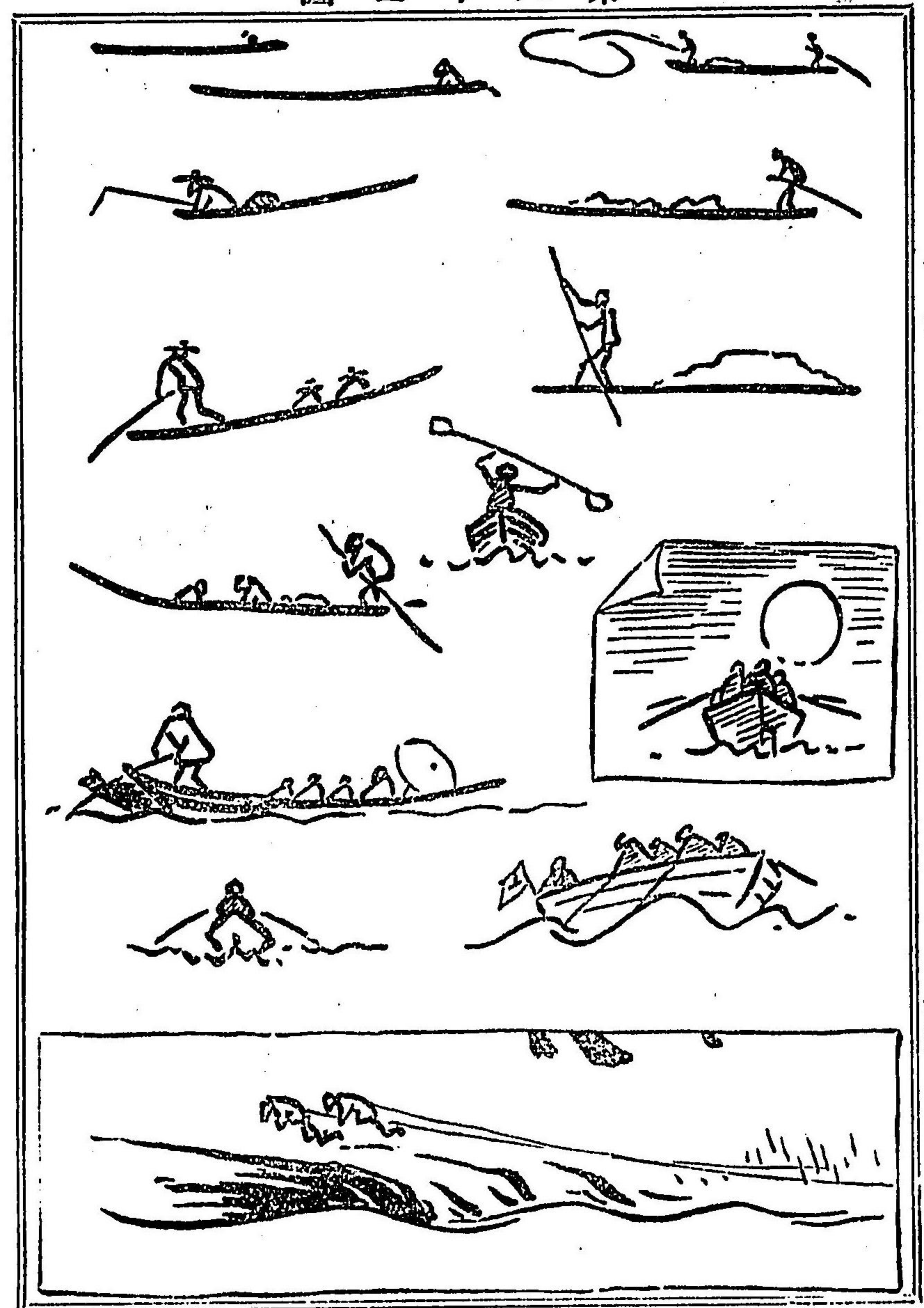
圖五十八第



第二編 繪畫法

一四三

圖四十八第



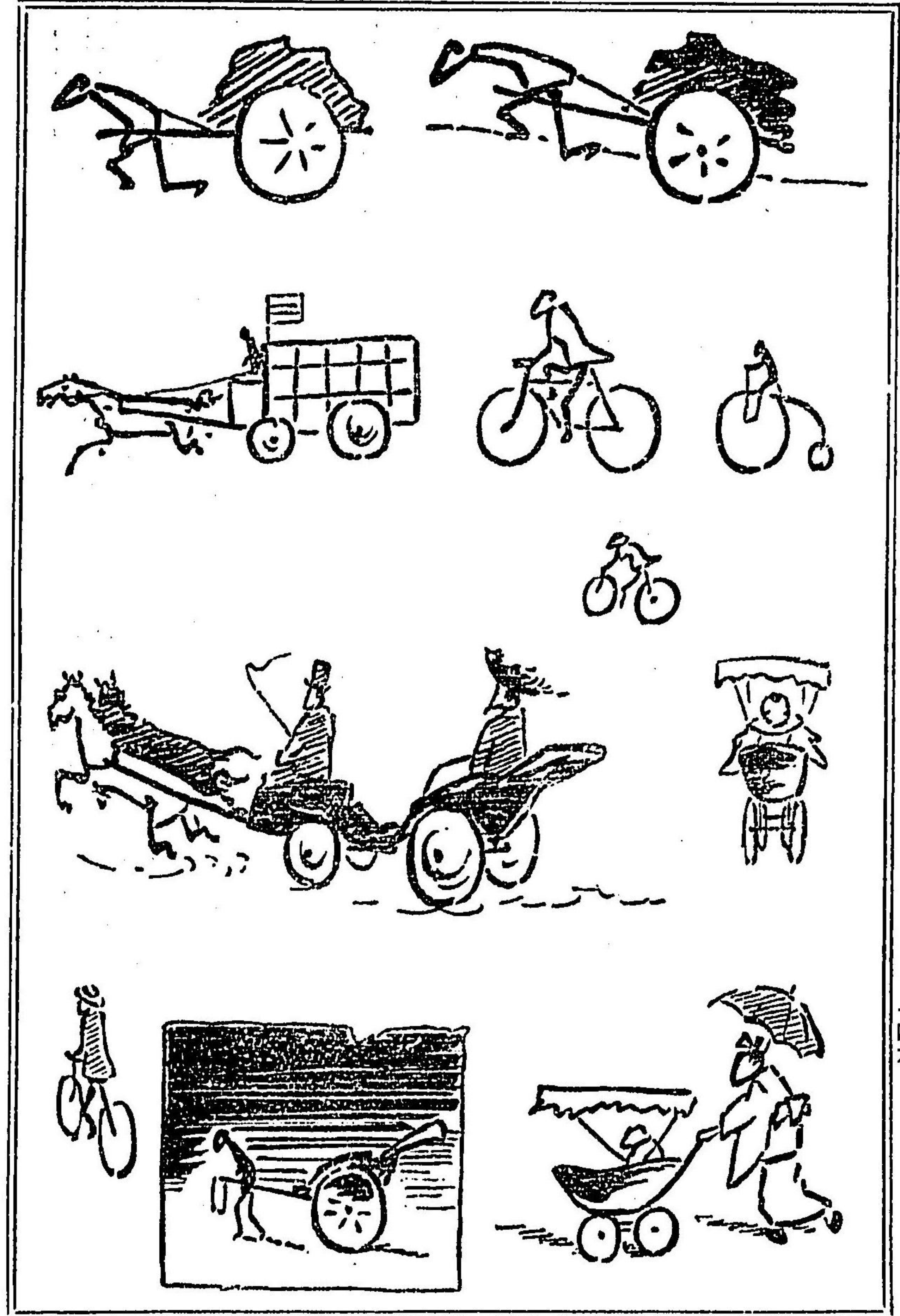
一四二





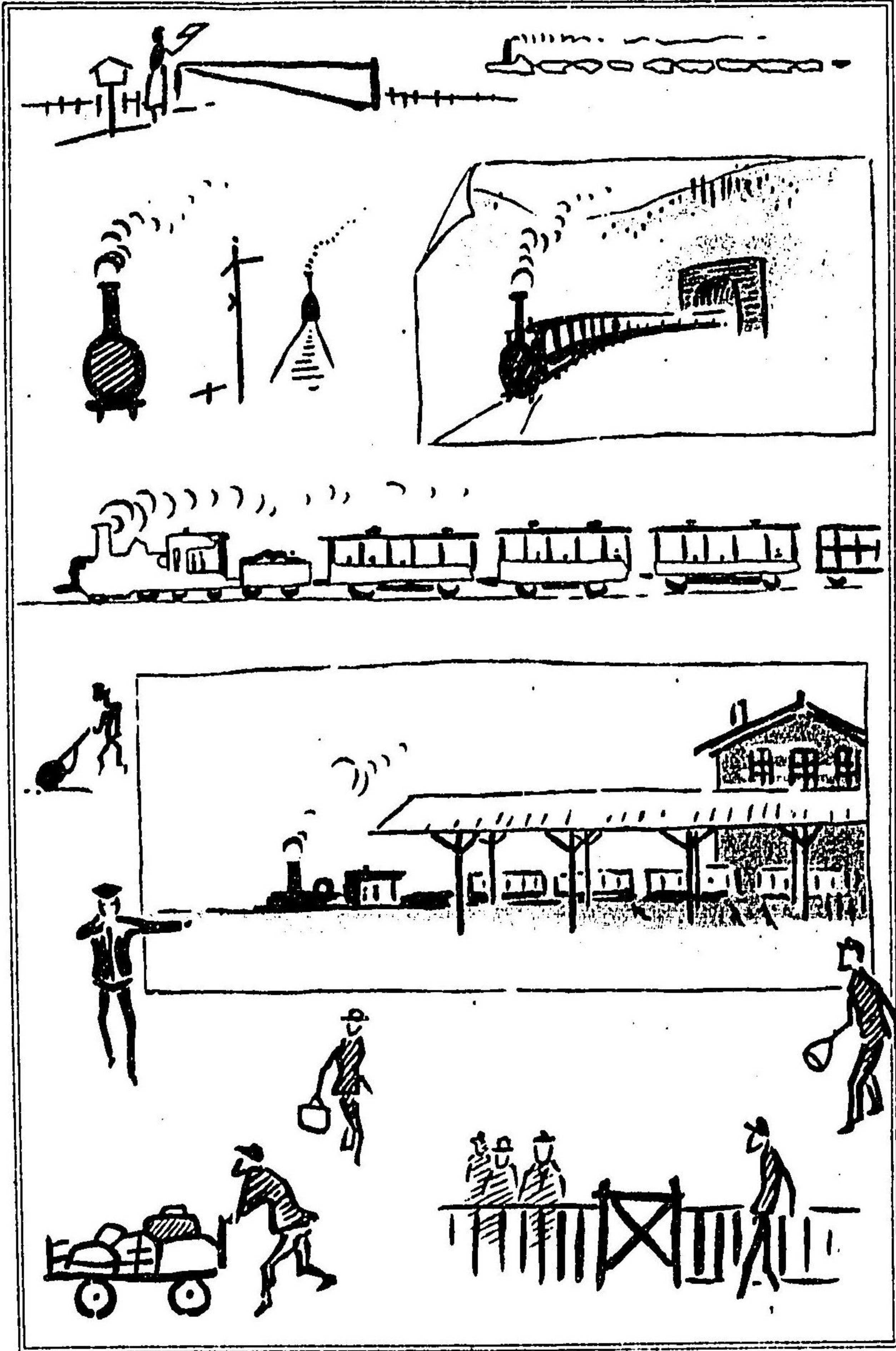


圖七十八第





圖八十八第





## 第十 建造物及景色

## 第八十九圖

建築物並に景色 建築物は、略畫に於ては、第六十三圖の第一圖式、即、正面的形式に據るが、最も便利であるが、試に五重の塔を描かせて見ると、大抵は、其屋背が高く遠ざかるだけ、漸次小さく認むるものである。これは、自分が見んとする區域と、自分からの距離との關係を、知らないからである。總て物を視るに、自分の位置を考ふることは、極めて必要なことで、彼の演劇を見るにしても、景色を賞するにしても亦同様である。

然らば、其視域と距離との關係は、如何にといふに、吾人が眼球を轉移することなくして、見得る區域は、一の環狀を爲すのであるが、其中で最も明瞭に見ゆる區域は、尙一層小さき環内である。此環の大きさは、如何にして定むるかといふに、自分の眼から、真直に水平線を引き、大環の中心點と結合し、次に眼から此水平直線を軸として、周圍に三十度の角を有つ放射線を描く時は、頂角六十度の圓錐形を得る。此圓錐形の大小は、距離の多少によるが、圓錐形の底面、即、所謂視域と其軸線、即、距離と

の比は、一定不變のものなのである。自分が描かんとする總てのものは、此視域内に包括せられねばならぬ。換言すれば、視角六十度以外のものは、見てはならず、描くことは、無論ならぬのである。若しこれを強て描くならば、塔の上部に至るに従ひ、小さくなり、長き扉は、左右に至るに従ひ、其高さが減縮する道理で、眼を上下左右に轉じた結果は、實に要領を得ないものとなるのである。

次に市街の畫を描かんには、是非遠近畫法を知らなければならぬ。即、已に直角に退脚する諸線は、丁度己が眼前の一點に、集中するであらう。此點は、先に述べた視域の中心點で、視點といふ。此視點を通じて、一の水平線を描いたものを、地平線といふ。此線は、景色の寫生に於ては、總ての割出しの基礎となるもので、最も先に描かるべきものである。

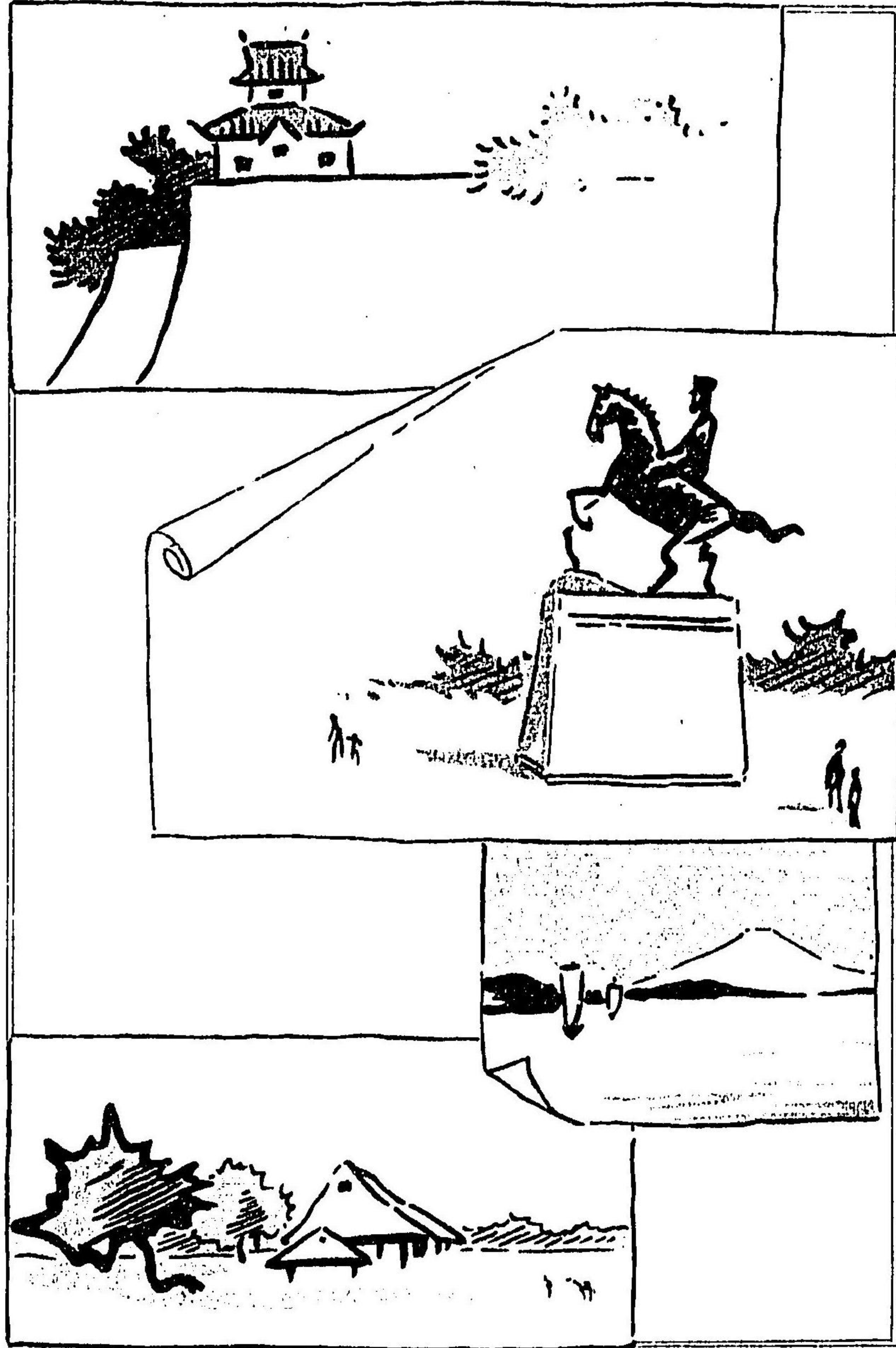
ここに一の注意は、己の眼より上方にある線は、遠ざかるに従て下り、下方にある線は上り、俱に視點に集合消失するので、眼の高さにあるものは、地平線中に包まらることである。

## 第九十圖 景色

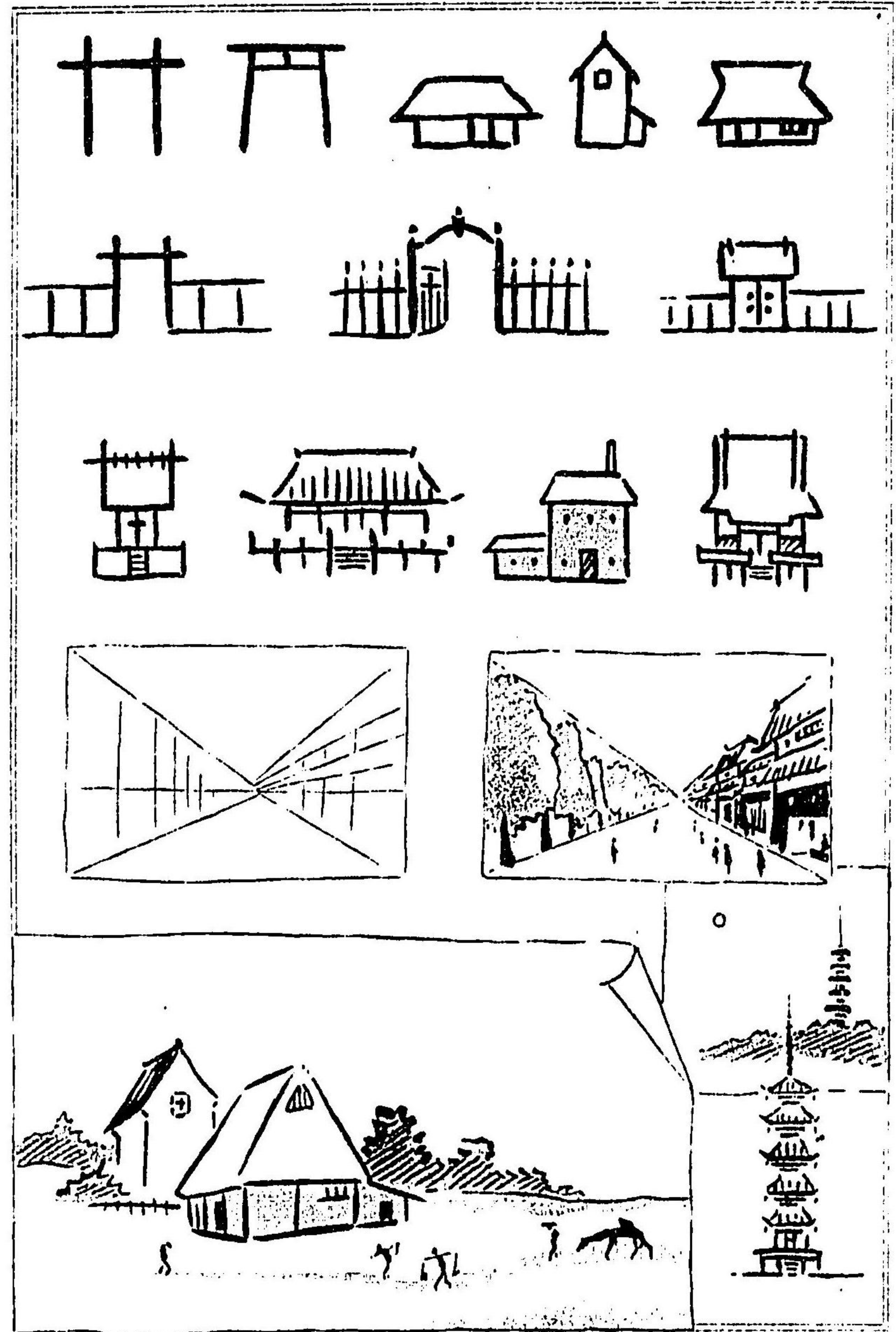
## 第九十一圖 景色



圖十九第

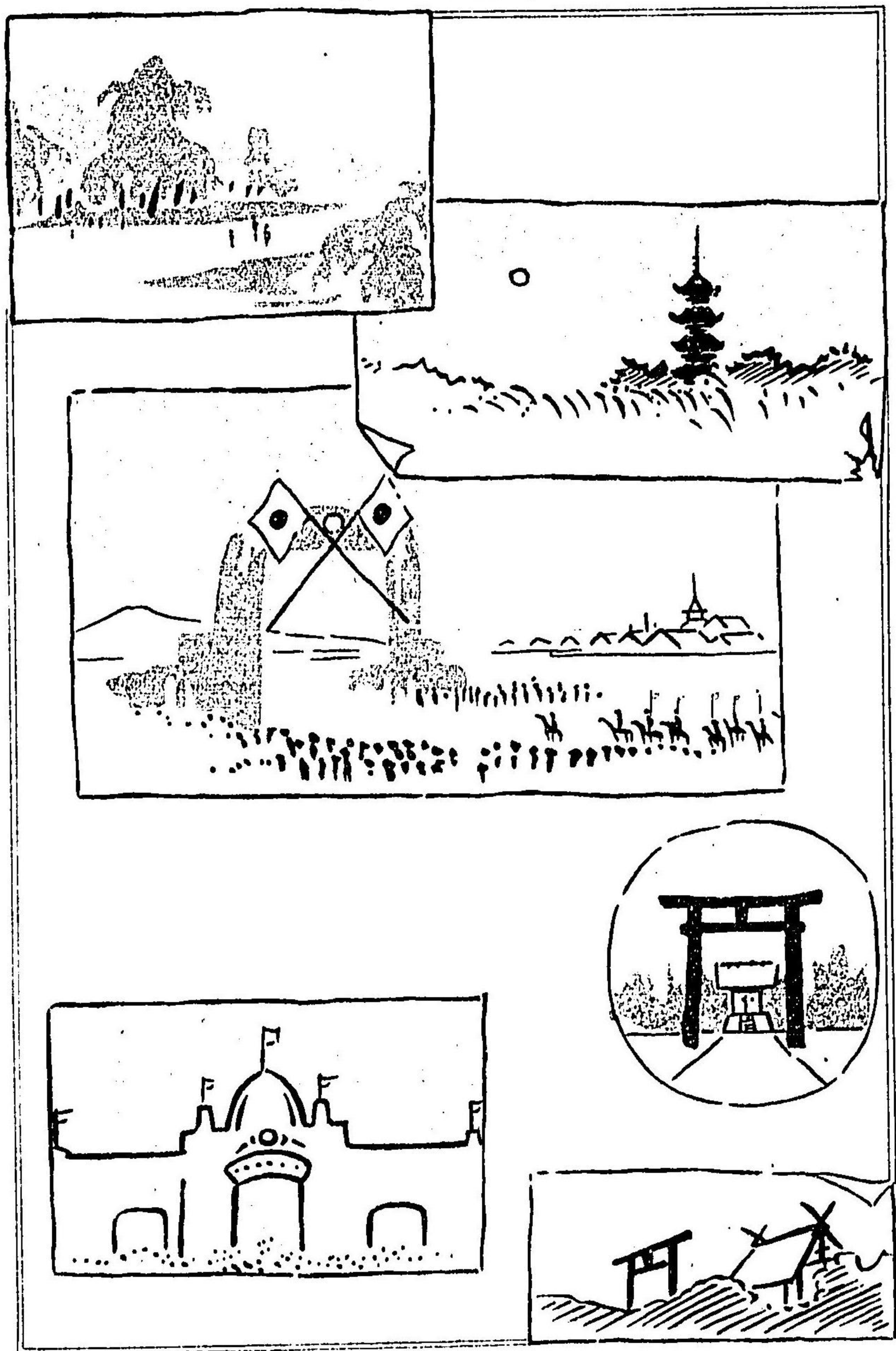


圖九十八第





圖一十九第





### 第三編 圖畫法

#### 第一 測圖

##### 第九十二圖

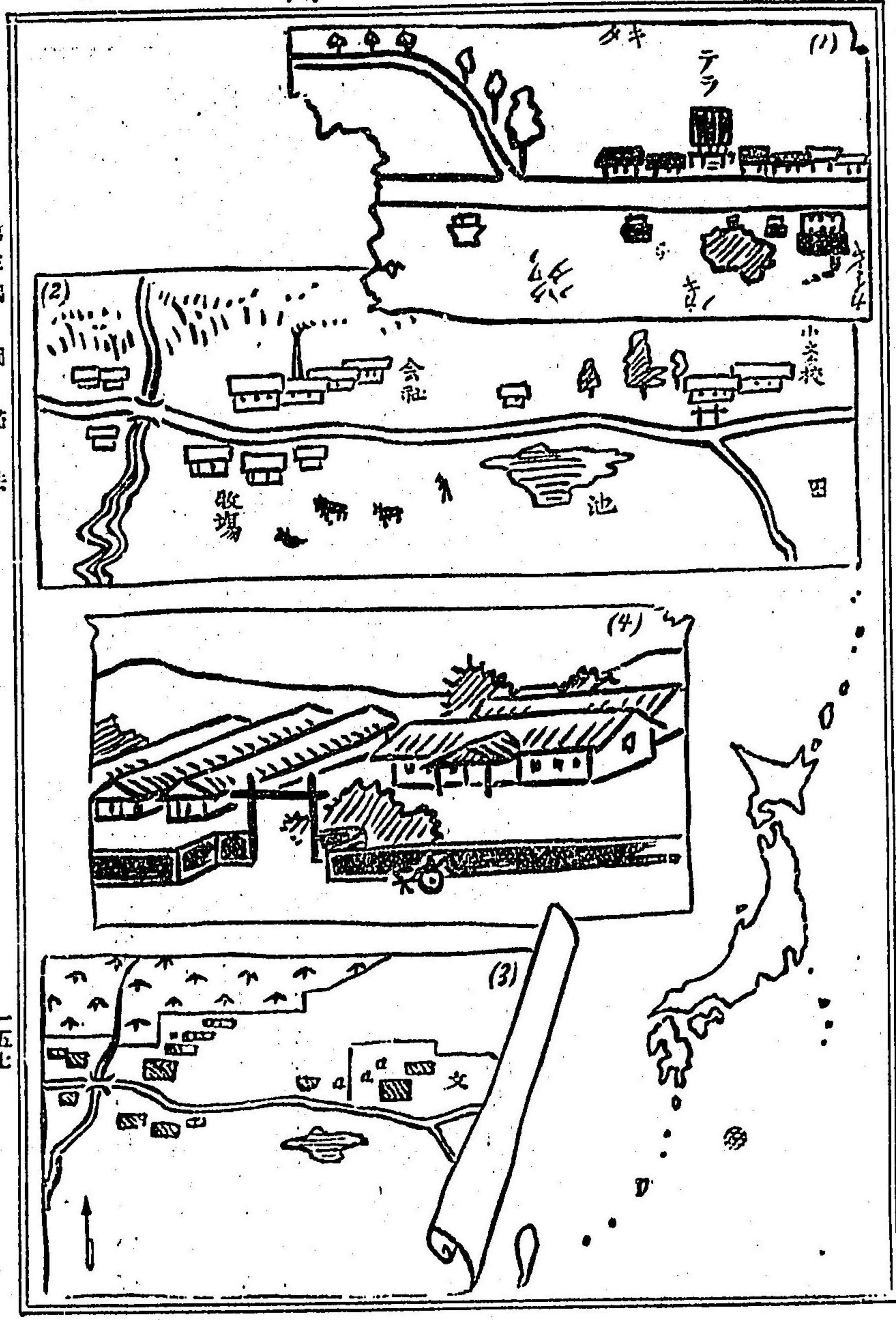
□<sup>1</sup> 初步測圖(其二) 單筋なる地圖を描き得ることは、吾人の生活上、餘程便利なことであらう。それで自分は、尋常小學の最終學年に於ては、大にこれを熟せしめたいものと思ふて居る。

最初は、道路上の測圖であるが、其準備として、五間とか十間とかの距離を、兒童各自に、幾歩で踏み得るかを、知らしめ、紙面には、五間或は十間を、五分とか一寸とか、測圖區域の大小に應じて、之れを定め、道路の長さを測定し、各方位に通ずる、岐路を定め、爲し得れば羅針を使用して、而して左右の家屋、及樹木等、重立ちたる地物の、記入を爲し、便宜の字を記入すること(1)の如くするのである。

次には、實地につきて目測圖、又は肥臆による想像圖を描かしむるので、たとへば(2)の如く、更に進んでは(3)の如く、全く平面的となるので、地物は符合で、顯はすので



圖二十九第



第三編 圖畫法

一五七

あるが、時に符號を用ひずして、文字を以てすることもある。又地圖は、北を上にするのが原則であるが、時に、矢印を以て、北を標示するのである。道路は、其終極の所に「至何杜」とか「何町に至る」といふことを是非記入せなければならぬ。

又(4)の如き構内の説明圖を描かしむることも必要であらうと思ふ。これは第六十三圖の第三圖式によるのである。



## 第九十三圖

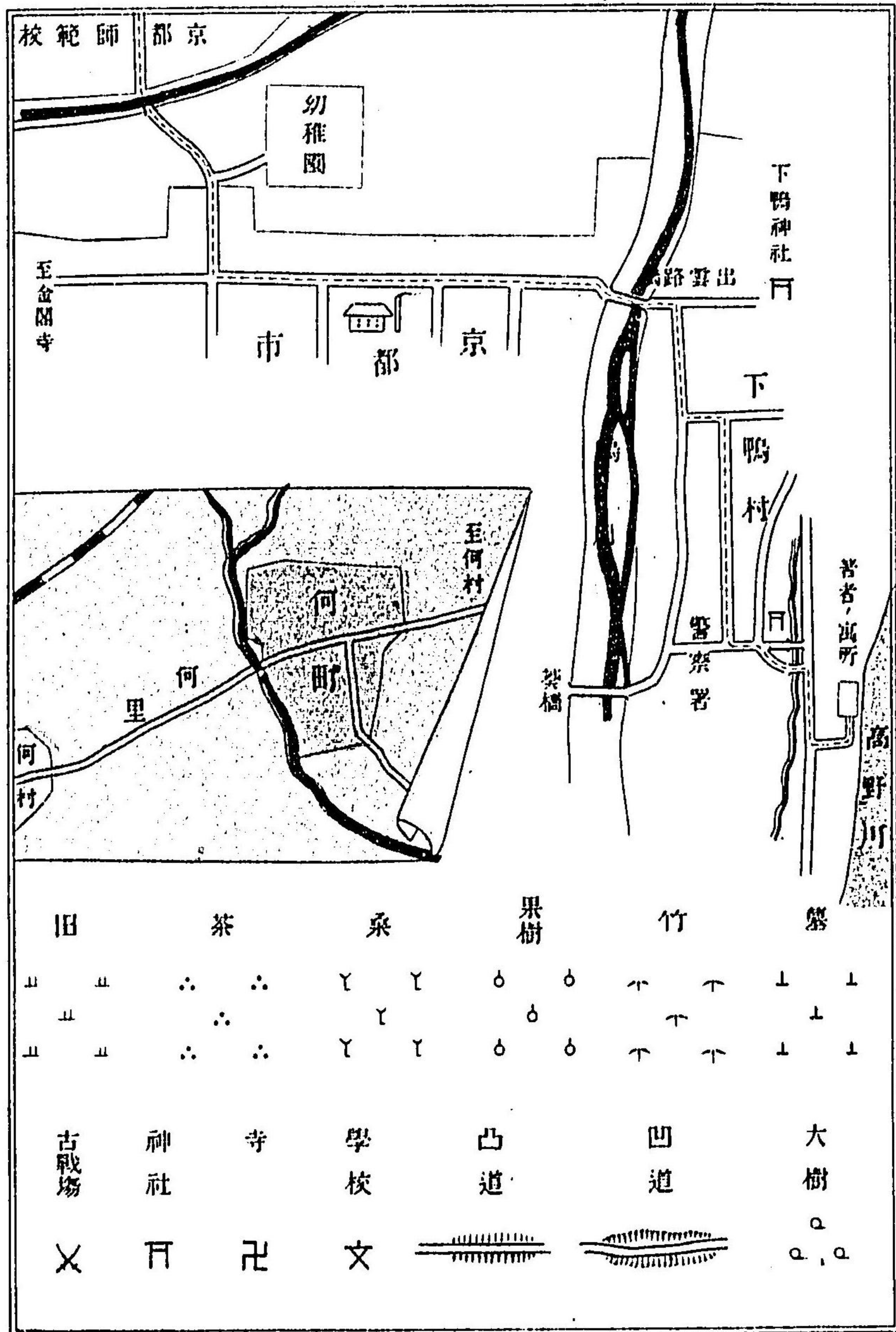
初歩測圖(其二) 兒童自身の宅から、學校迄の路上測圖などは、是非やらせたい考であるが、其道筋は赤き線を描き加へて、他の道と區別し、其沿道の神社とか、會社とか、其他一際目立ちたる、建築物などは、成るべく描き添へたいのである。これは吾々の住居を、人に告げるに、何會社の何處とか、何神社の附近とか云へば、明瞭なものと同じ理である。

又、大區域の畧圖を描く時は、村落又は市町等は、簡單なる外廓にて包括し、其距離などは、梯尺によらず、大凡何里何町と記入するがよい。

地物は、參謀本部二万分一地圖の、地物符號表に據りて、記入するがよからう。本圖には、其一部分を載せた。



圖三十九第





### 第二 透寫及伸縮

#### 第九十四圖

圖書の伸縮及透寫 書や圖を伸ばし、又縮むることは、何人にも必要なるのであらうと思ふが、これは、方眼に據るので、自分の任意大に伸縮し得らるのである。透寫も亦随分熟練し置く必要がある。これは、弊水引薄美濃紙に寫すが、最も便利であるが、場合によりて、厚き紙に寫さなければならぬこともあり、又如何に薄きを用ひても、黒くて見え透らない、古畫などもある。此場合には、揚げ寫しと云ふ方法による。それは、寫すべき紙を、棒様のものに捲き、左手にて之れを揚げては、原圖を覗ひつつ、寫すのである。

第九十四圖

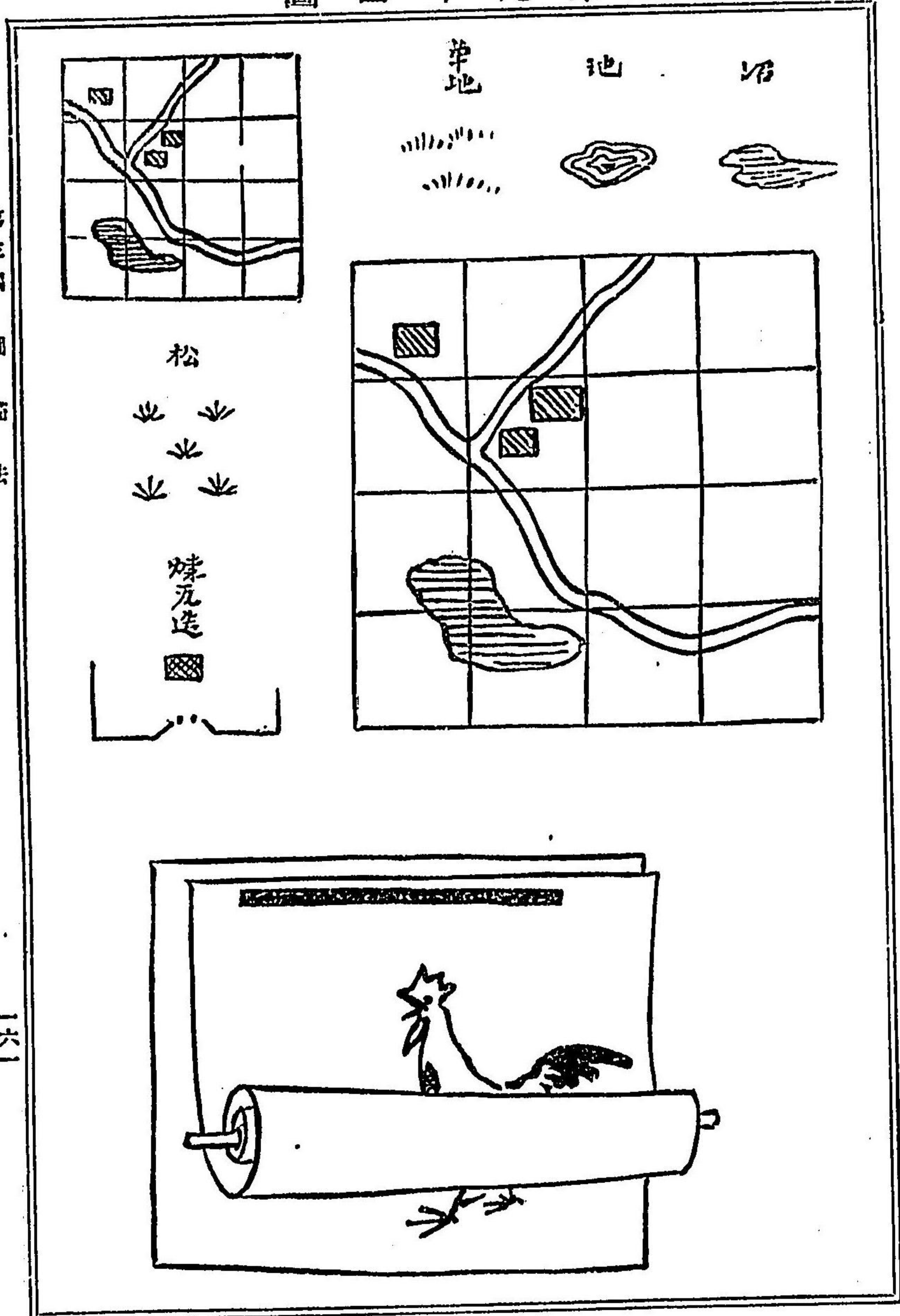
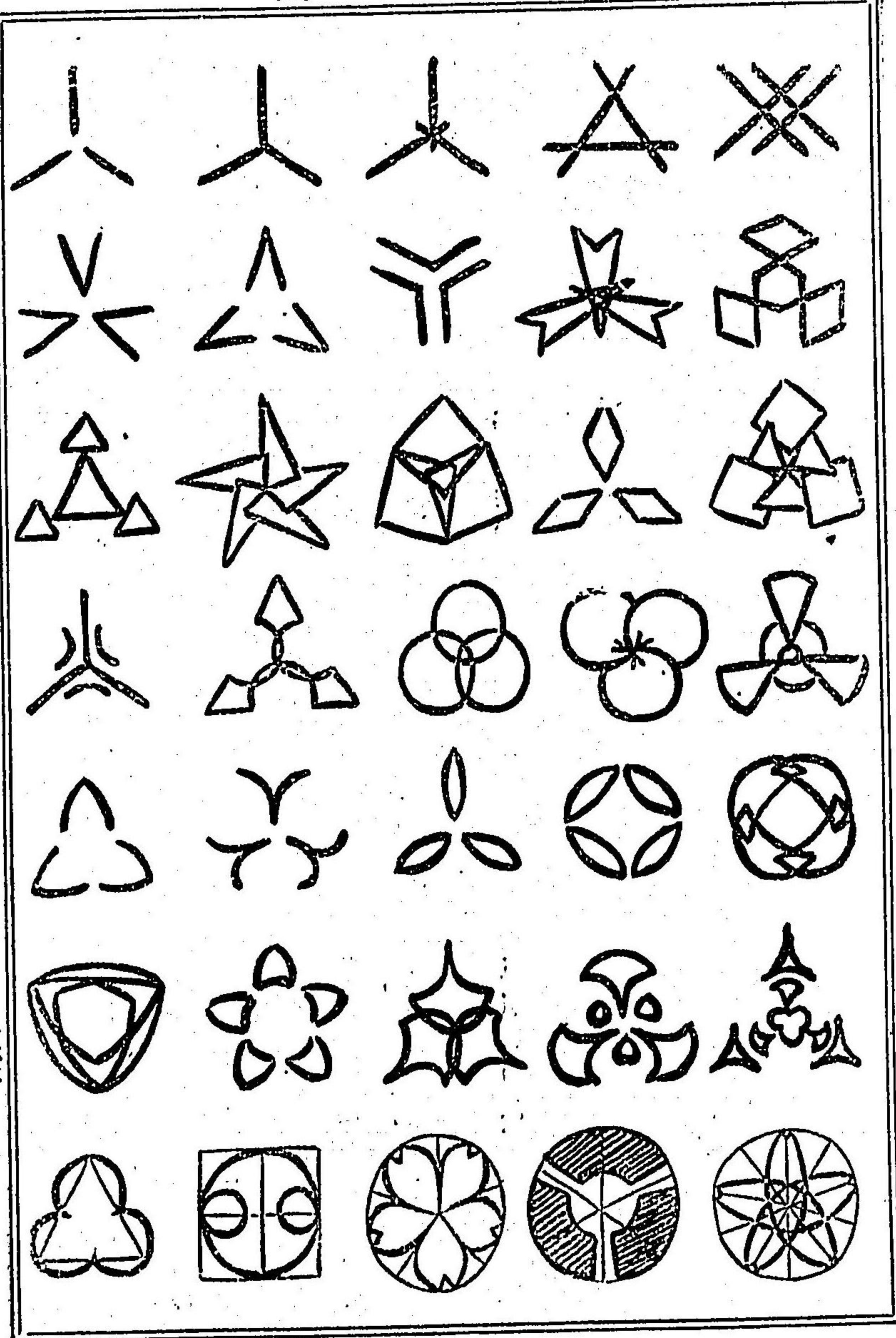




圖 五 十 九 第



第三編 圖 畫 法

一六三

第三 工 夫 畫

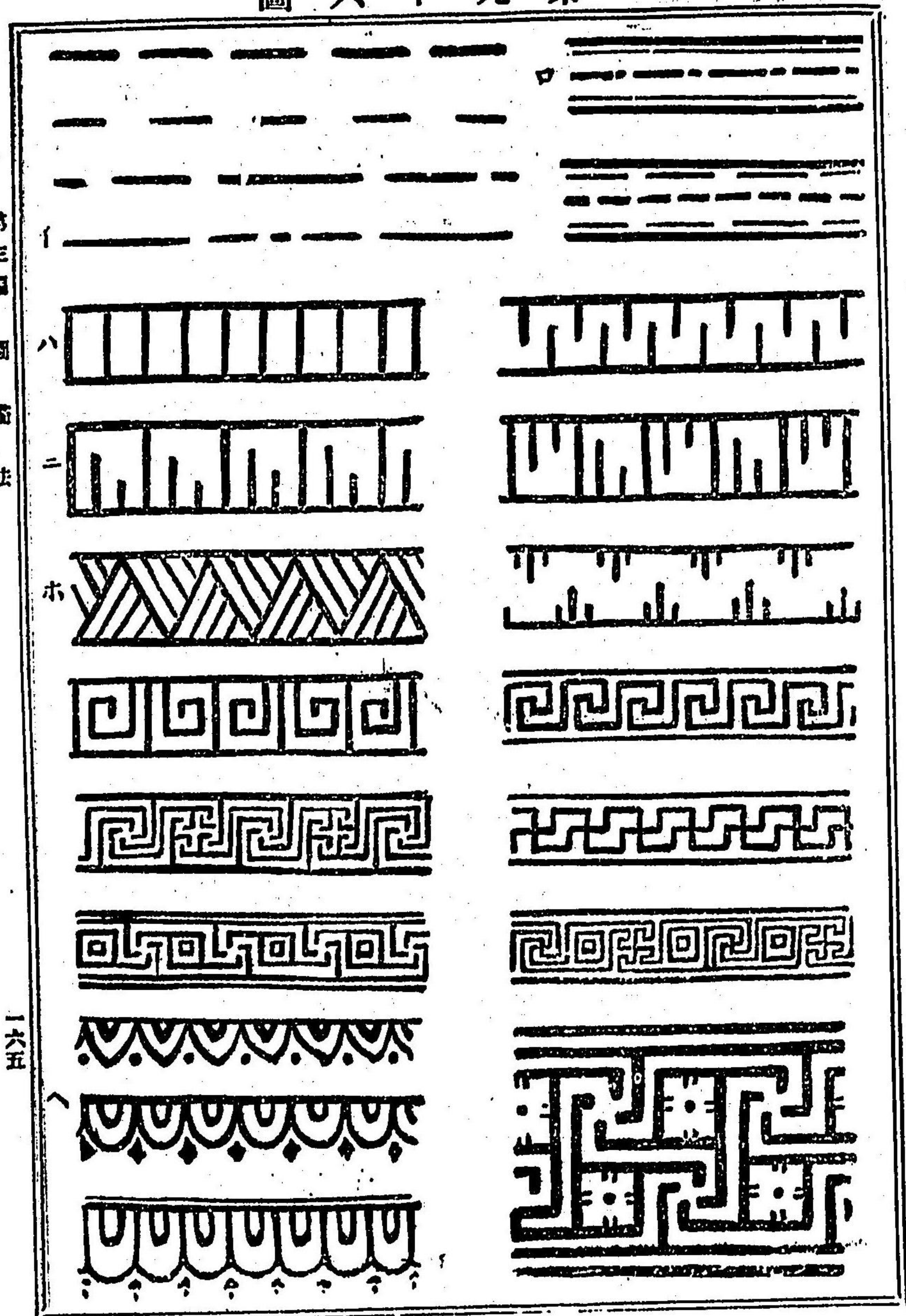
第九十五圖

工<sup>口</sup>夫<sup>口</sup>畫 配合とか、作畫とか、云ふことも、工夫考按を要すべきものであるから、工夫畫の中に容るべきであるが、又工夫畫を作畫の中に、包含せしむべきかは、各自の考に任すこととして、本圖に於ては、線角形、孤角、孤形等の結合、三角形、方形及圓などの、分解工夫畫の例を示したので、兒童をして、意匠を練り、創作の力を養はしめ、近くは模様考按の素養を與へんとする、目的からである。而して成るべく、彩色をさせたい考て居る。

一六二



第九十六圖



第三編 圖 畫 法

一六五

第九十七圖

模<sup>□</sup>樣<sup>□</sup>(其一) 工藝思想を養ふとか、創造力を練るとかいふ爲に、工夫書を課し、進んで模樣を臨模し、又は、考按せしむるとも、必要であるが、其順序として、直線圓線の等分とか、線網の描き方等を、教えなければならぬ。而して模樣又は工夫書の教授の時に、必要に応じて、幾何畫法を教授し、器具の取扱方に慣れしめなければならぬ。これは尋常小學最終學年に於て、是非やらせたいと思ふ。彼の實用に適しないものは、省いて、たとい數學的に説明が出来ない稍不充分なもので、便利な方法を撰みたい考である。

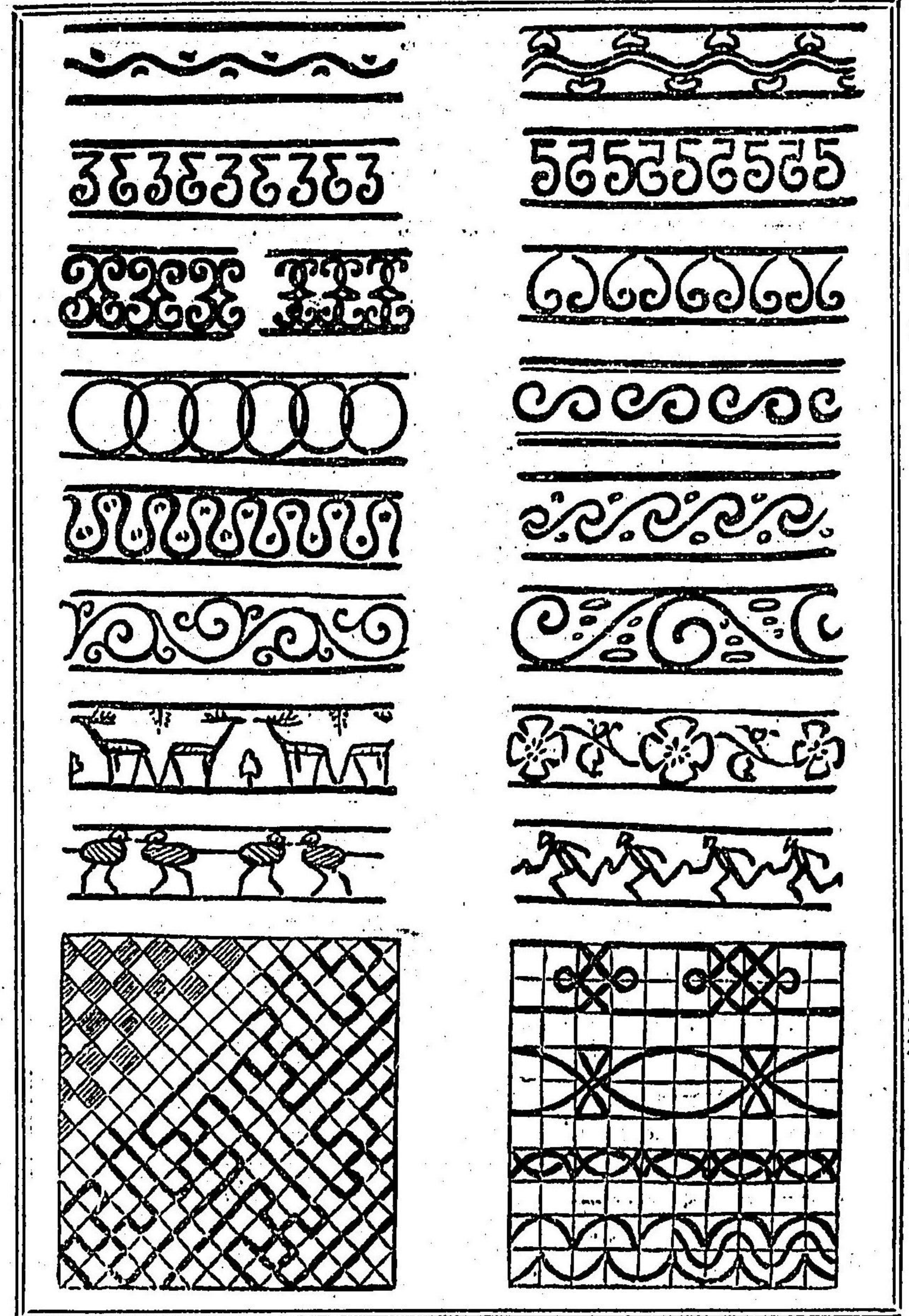
第九十七圖

模<sup>□</sup>樣<sup>□</sup>(其二) 本圖は、曲線式連帶模樣及び幾何的連綴模樣的例である。

一六四



圖七十九第



第九十八圖

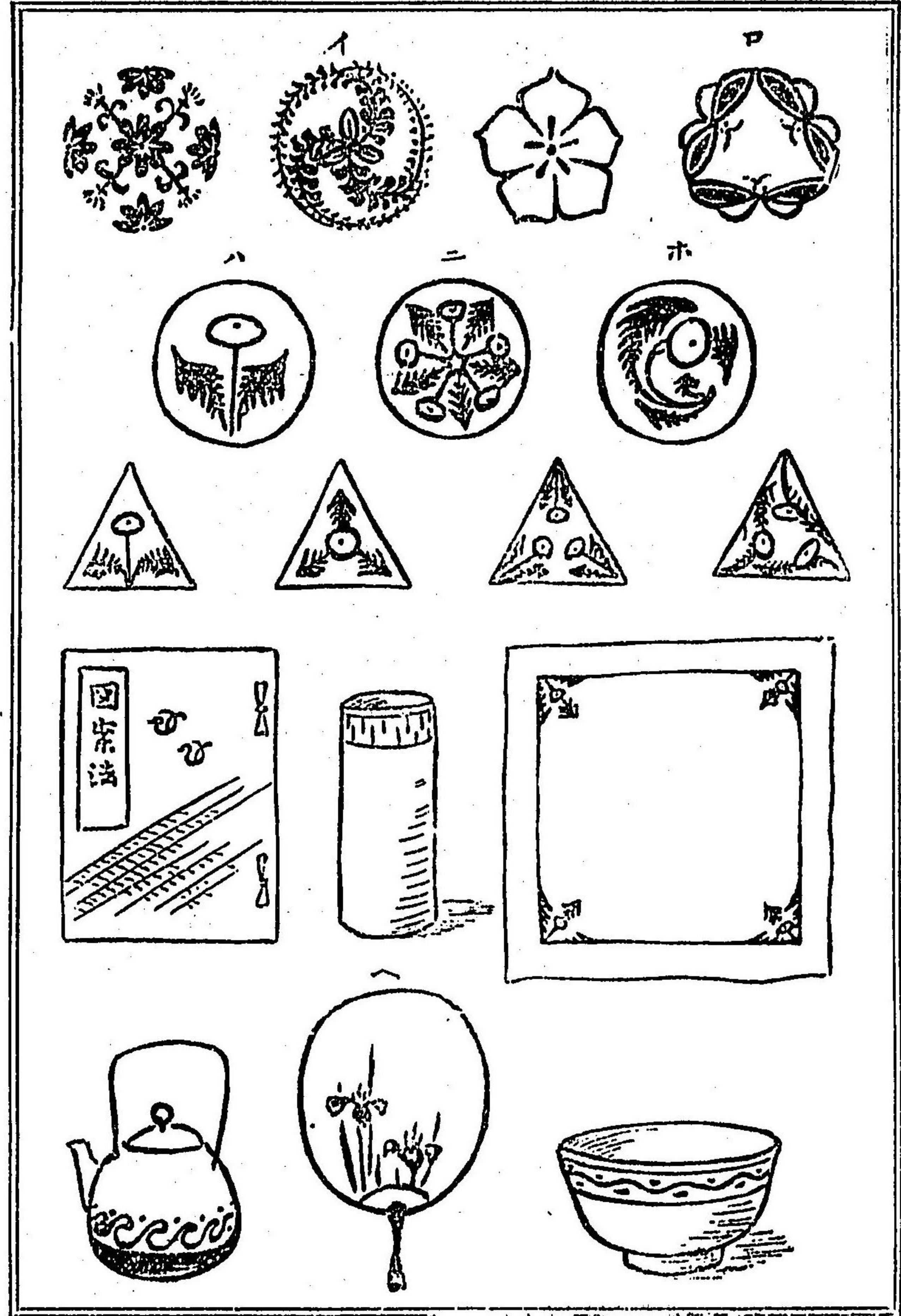
模<sup>口</sup>樣<sup>口</sup>(其三) 本圖は、菊、藤、桔、梗、及、蝶より成る華形模様の例と、充填模様の例とを示し、團扇は、繪畫模様の一例である。尙他に散點模様といふのがあるが、これは、兒童には最も困難なものと思ふから、ここには、わざと略したのである。

模様は、裝飾の一部であつて、決して獨立して存在し得るものでない。常に器物其他の工藝品に應用せられて、其美を發揮するものである。それで模様を教授し、又は考按せしめたときは、成るべくこれが應用を試みさせねばならぬ。

兒童各自の定紋の如きは、是非尋常小學期間に於て、描き得る様にしたいたものである。



第九十八圖



第四 配色

第九十九圖

配色 色の研究は繪事中極めて重要なることで、又愉快なる一事であるが、これを他に教ゆるといふ段になると實に困る。何とならば配色の味は繪事練習の結果、自然に了解せられるもので、此色と彼の色とは、調和すると云つても其濃度如何によりて、不調和に了る事も、屢である様な次第である。然らば配色のことは遂に見童に教ゆることが、出来ないと云ふて、棄ててしまふかといふに、吾人が配色の美を解し得るといふことは、生活上實に愉快で、且利益ある事で彼の歌葉子が排列の如何によりて、美味に見えモスリン友仙が時に其配色の爲めに縮緬を凌ぎ、衣服の色合が、其人の品位を上げ、室内の裝飾が、其主人の心事を紹介するが如き、全く配色の美に因ることを知るならば決して忽に出来ないことであらうと思ふ。それで自分は、ここに初歩教授に於ける、配色の理法を述べ、稍進みたる域に、説き及ぼさんとするのである。

初歩の彩色は、反對の配合でなくてはならぬ。即相接近する色は力めて反對の



ものを取るのがよい。此反対色とは彼の嚴正なる餘色をいふのではなく、帶黄色は帶紫色と、又帶赤色は帶綠色と配合すべしといふのである。彼の襪ナデシコが鞞の中に取りて一際麗しく愛らしく見え、左程美でもない朽葉色の秋の山が、空色を一層心地よく見せることや、海老茶式部の衣類には帶黄色が能く似合ふことや、東洋人に藍色の衣が多きことなど、何れも皆反対の配色でないのはない。併し配色は、反対に限るといふのではない。彼の色黒き女が白き裕衣を着たのや、老人が派手な装ひしたのなどは、誰が見ても、一向美しいものではない。それでは此反対の外に如何なる配色の約束があるかといふに、それは照應といふので、相似たる色を以て彩色するのである。これは、反対の配色が、時に下品に陥るに反し、極めて高尚なる結果を得るのである。彼の古畫の彩色が、多く穩當な調和をしてをるの、は、各色に共通の煤色を含んで居るからであらうと思ふ。

未開の人民は、裝飾に單純な色を用ひるが、進むにつれて、複雑な色が流行する様になる。たとへば我が國で現今梅鼠とか、小豆色とが、再間色以上のものが、持てはやさるるが如きである。

色には寒色と暖色とある、青に屬するものは、寒色で、黄とか赤とかに屬するもの

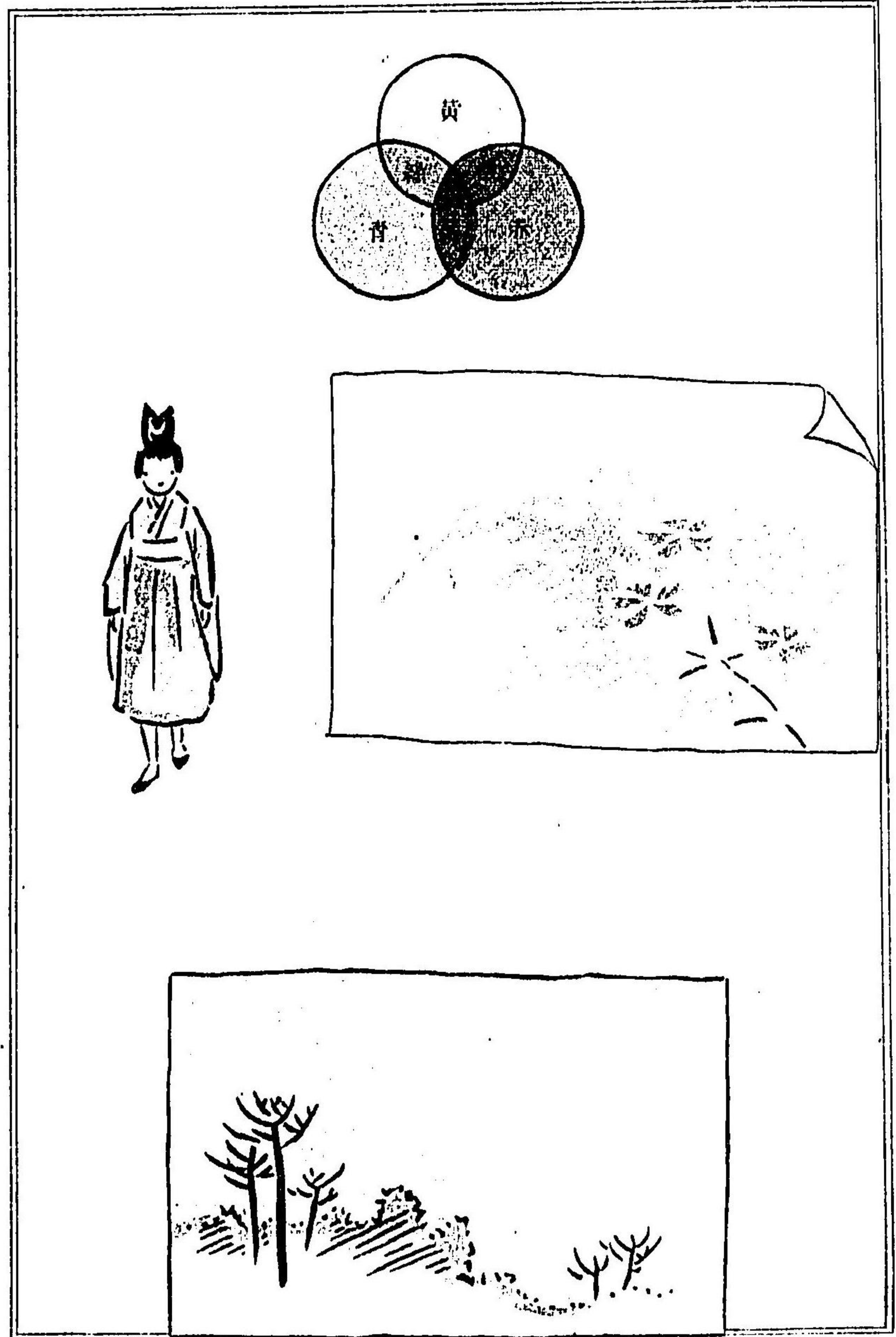
は、暖色である。寒色を陰色又遠色ともいひ、暖色を陽色又近色ともいふ。黑白及鼠色は、時に寒くも、又暖くも見ゆるのである。それで陽の室は青壁を、陰の室は黄又は赤に屬するものを塗り、北の園には、勉めて陽色の花卉を植うるが如きは、自然に來るべき結果であらうと思ふ。

尙一言したきは、彩色には是非三原色が含まるる様にし、其各色に屬する階段を、持たせたいのである。又或る色を分解して、他の部分に施し、又は併合して、或る所に塗る様にしたいと思ふ。

總て彩色は、動かす事の出來ない色を先にし、それに配する適當の色を撰み、用ゆるのである。



圖九十九第





## 第五 配合及作圖

### 第一百圖

配<sup>口</sup>合<sup>口</sup>(其二) 二個以上のものを、一圖中に描かうとするとき、考ふべきは、其排列である。此排列が適當に出來た時に、配合宜しきを得た、といふのである。

(一)(二)は、ともに二個の梨を描いたので、(二)が、たしかに適當な配合を得て居るといふことは、誰人にも知れるが、其理に至りては(三)を考ふべきである。即(三)の雌雄兩雞は、親しく相語る様な情趣が見えるだらう。故に梨に於ても、兩々相親和する趣あるものは、何となく、配合よく見えるのである。

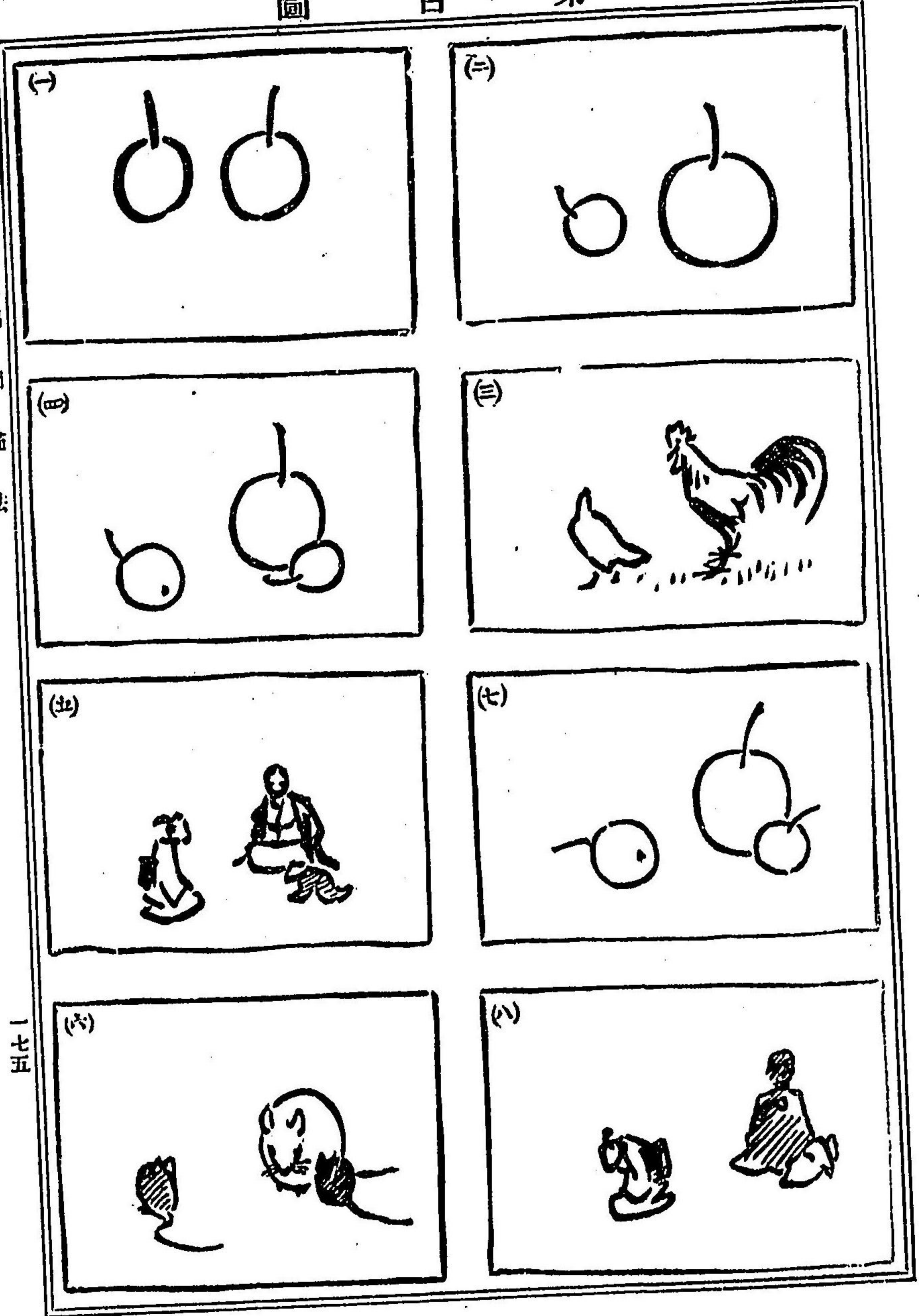
次に、三個の梨を描き(四)及(七)の如き成績を得たと假定するに、此兩圖は、其梨の大小及位置、殆ど全く相等しきも、其柄の方向が異なつて居るであらう。今これを精密に考究すると、其情趣は(五)と(八)の如く、劇しき懸隔を來たすのである。即(五)は一家親和の態で(八)は不和の状況であることが知られる。今(四)の意味によりて三つの鼠を描けば(六)の如くである。

結合すべき材料が、如何に多くても、皆此意味によつてすれば、要領を得た配合が、



第 百 圖

第三編 圖 畫 法



一七五

出来やうと思ふ。實に此配合といふ智識は、箱庭を造るとか、燈籠を建てるとか、樹木を植え込むとか、池を堀るとかいふ様な時に大に役に立つのである。衣服や帯が、其人に能く似合ふといふのも、つまり配合宜しきを得た結果なので、換言すれば、よく調和したのである。